

名古屋城調査研究センター 年報 5
令和 5 年度

2 0 2 5

名古屋城調査研究センター

目 次

I	調査研究事業	1
1	発掘・試掘調査	2
	（1）表二の門発掘調査	
	（2）二之丸庭園第11次調査	
	（3）名古屋城三の丸遺跡発掘調査	
2	その他調査	7
	（1）二之丸庭園石造物調査	
	（2）石垣カルテの作成	
	（3）名古屋城内石垣現況調査	
3	工事立会	11
	（1）二之丸庭園修復整備工事	
	（2）搦手馬出石垣積直し工事	
	（3）余芳移築再建工事	
4	資料調査（文書典籍・美術工芸）	13
5	デジタル化事業	14
	（1）名古屋城史跡管理システム	
	（2）名古屋城関係資料データベース	
II	資料管理	15
1	所蔵資料・受託資料の概要	15
	（1）所蔵資料	
	（2）令和5年度購入資料	
	（3）令和5年度受贈資料	
	（4）令和5年度受託資料	
	（5）令和5年度受贈・購入図書	
2	資料の修理	17
	（1）名古屋城旧本丸御殿障壁画保存修理事業（文化庁補助事業）	
	（2）信長関係染織資料	
3	資料の利用	18
	（1）資料貸出	
	（2）写真貸出	
	（3）熟覧	
III	展示事業	19
1	西の丸御蔵城宝館 展示室	19
	（1）特別展「家康とお嫁様 名古屋城と春姫お輿入れ」	
	（2）企画展「尾張ゆかりの甲冑・刀剣」	
	（3）企画展「文化財を受け継ぐ」	
	（4）特別展「家康と名古屋東照宮」	
	（5）企画展「家康の謎 名古屋城本丸御殿の黒木書院」	
	（6）特別展「守山の御寺 大森寺の宝物」	
2	西の丸御蔵城宝館 情報ルーム	66
	（1）本丸表二の門発掘調査速報展	

(2) 二之丸庭園発掘調査成果報告展	
(3) 八雲木彫熊展示	
(4) 加賀孝一郎画油絵展示	
3 特別公開	69
(1) 期間限定 特別公開 登録文化財 乃木倉庫	
IV 教育普及事業	73
1 刊行物	73
(1) 名古屋城調査研究センター研究紀要 第5号	
(2) 名古屋城調査研究センターだより 第5号	
(3) 特別展「家康とお嫁様 名古屋城と春姫お輿入れ」リーフレット	
(4) 特別展「家康と名古屋東照宮」リーフレット	
(5) 特別展「守山の御寺 大森寺の宝物」リーフレット	
(6) 国秘録 御巡覧留統編 [名古屋城調査研究報告8・名古屋城史料叢書2]	
(7) 名勝名古屋城二之丸庭園発掘調査報告書第7次・第8次 [名古屋城調査研究報告9・埋蔵文化財調査報告書6]	
(8) 特別史跡名古屋城跡御深井丸・小天守西側発掘調査報告書 [名古屋城調査研究報告10・埋蔵文化財調査報告書7]	
(9) 特別史跡名古屋城跡西之丸き損地点発掘調査・修復報告書	
(10) 名古屋城調査研究センター年報4 令和4年度	
2 シンポジウム	74
(1) 名古屋城石垣をつくる・なおす	
3 現地説明会.....	75
(1) 本丸表二の門発掘調査現地説明会	
4 講師派遣.....	76
V 組織と職員	77
VI 参考資料	78
1 令和5年度の名古屋城の活動	78
(1) 催事等	
(2) 特別史跡名古屋城跡全体整備検討会議	
2 入場者の推移	80
(1) 名古屋城入場者数	

I 調査研究事業

名古屋城調査研究センターは、考古学・歴史学・美術史などの分野を横断した総合的な研究を推進し、特別史跡名古屋城跡の保存・活用を進めるとともに、その調査研究成果を広く情報発信していくことを目的に令和元年（2019）4月に設立された。

設立から5年目となった本年度は、考古分野では、二之丸庭園、表二の門の発掘調査などを実施し、特別史跡の現況の把握に努めた。歴史分野では、史料を翻刻し、解題を付した『名古屋城史料叢書 2』を刊行し、美術工芸分野では、戦災で焼失した天守等に伴う焼損金属資料の調査・研究に取り組むなど、各分野で積極的に調査研究に取り組んだ。

そうした成果は、その調査の目的・趣旨に応じて、特別史跡名古屋城跡全体整備検討会議等にて報告したほか、『名古屋城調査研究センター研究紀要』等、各種の刊行物等により公開した。

1 発掘・試掘調査

(1) 表二の門発掘調査

調査期間 令和5年(2023)8月21日(月)～9月27日(水)

調査地区 本丸地区

調査面積 70㎡

調査目的 重要文化財名古屋城表二の門の大規模修理工事計画に伴う雁木復元整備の検討

調査担当 大村陸、高橋圭也

調査概要

重要文化財名古屋城表二の門は経年劣化が進行しており、大規模修理工事の計画が進められている。修理計画と合わせて、表二の門附属土堀の背面にかつて存在した雁木(石段)について情報を収集するため、令和4年(2022)度に試掘調査を実施した。試掘調査で地表下及び石垣面に雁木の痕跡が部分的に残存することを確認したため、土堀全体の残存状況を確認することを目的として発掘調査を実施した。調査区は附属土堀背面の土堀斜面部の全面とし、調査面積は70㎡である。

調査の結果、東西の土堀裾部で一連の切石計12石を検出した。雁木の最下段と考えられる。東側土堀調査区の入隅部の切石は厚さが薄く、矢口長5cm程度の小さい矢穴がついていることを確認した。雁木に小さい矢穴がみられることから雁木も積み直されている可能性がある。

また、東西の土堀斜面部で一面に円礫を検出した。円礫中には瓦片が混じっていた。面的に広がる円礫は雁木撤去時に崩落した状態を反映していると考えられる。部分的に平坦面や垂直面が維持された状況を確認しているが、円礫検出面と雁木推定ライン下端が一致する箇所があり、これは雁木設置時の痕跡である可能性がある。

その他、後世の改変の痕跡を多く確認した。附属土堀の控柱周辺では、拳大～人頭大の円礫が集中して詰まっており、控柱の根固めと考えられる。一部で根固めの円礫が天端石の下に入り込む状況を確認したため、後世に天端石を移動させていると考えられる。西側土堀調査区では控柱の1箇所まで控柱下端まで検出したが、下端に鉄製のボルトが刺さっており、後世に修理した際の痕跡と考えられる。

今後は、発掘調査で得られた情報等をもとに雁木の整備に向けて計画・実施していく。



調査位置図



西側土塁調査区 調査風景（北東より）



東側土塁調査区 完掘状況（北西より）

(2) 二之丸庭園第11次調査

調査期間 令和5年(2023)9月19日(火)～11月9日(木)

調査地区 二之丸庭園東部

調査面積 99m²

調査目的 近世遺構の残存状況把握のための発掘調査

調査担当 花木ゆき乃、高橋圭也、村上慶介

調査概要

本調査は『名勝名古屋城二之丸庭園整備計画書』(名古屋市 2022)の第2次工事範囲発掘調査に位置付けられ、令和3年(2021)度より東御庭を中心とした調査を継続実施している。今回はその3年目にあたる。

本調査区周辺は、過去の調査(第9・10次調査)から南側に池跡、北側に景石群が検出されている。これらの遺構の関連性を探ること目的とし、中間地点にあたる本調査区を設定した。

発掘調査の結果、調査区中央から西部にかけて近現代の大規模廃棄土坑が検出された。またその大規模廃棄土坑に改変されるかたちで東部に近代以降の整地層(路盤か)を検出した。

北西部には第10次調査で検出した景石群に連続するかたちで残存範囲を確定することができたが、これも大規模廃棄土坑により改変を受けていた。しかし、残存している景石の据付け状況を断面で確認することができ、堀方底部に景石の剥離片を充填する、掘方を土で固く締めるなど景石ごとの据付け方法の違いを確認することができた。加えて周囲の抜き取り痕の存在から、景石の据直しや整地に伴う撤去が行われたことがわかった。また大規模廃棄土坑には煤にまみれた食器類等の生活道具が検出された。これらの出土資料から、大規模廃棄土坑は、調査区付近にかつてあった学生会館が昭和48年(1973)に焼失した際に土坑を掘り、残骸を廃棄したものと考えられる。

本調査では、第9・10次調査で検出された池跡遺構等調査区南側の遺構との直接的なつながりは後世の改変により確認することができなかった。庭園東部に本来見られるべき築山等の起伏を伴った地形は、近代以降の整地により大きく取り払われてしまっている可能性が高いものの、今回追加検出した景石群にみられるように整地面以下の高さには庭園遺構が辛うじて一部残存している。それらの遺された在りし日の庭園を精査し、引き続き出土遺物や過去調査成果と比較検討を進めていく。



調査位置図



調査区全景（南東より）



景石据付け断面検出状況（南より）

(3) 名古屋城三の丸遺跡発掘調査

調査期間 令和5年(2023)11月1日(水)～12月20日(水)

調査地区 三の丸

調査面積 約40㎡

調査目的 金シャチ横丁2期整備に伴う事前調査

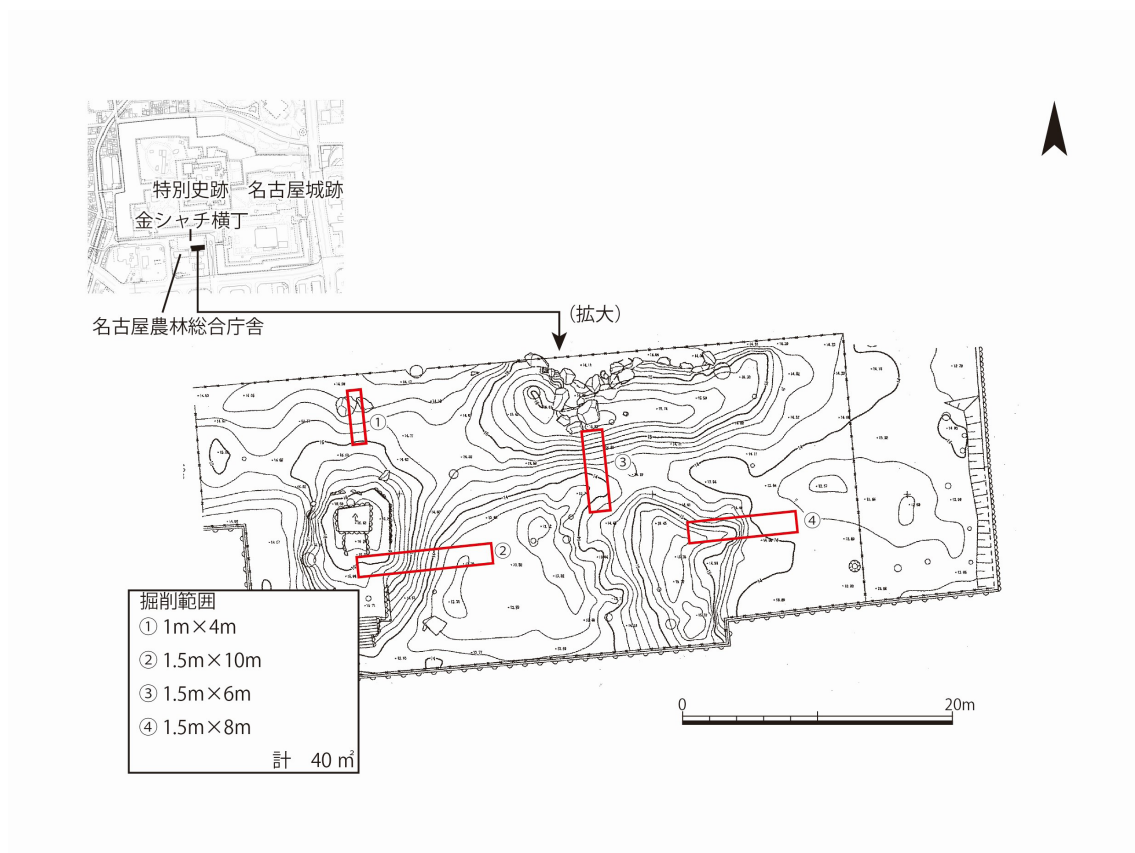
調査担当 二橋慶太郎、濱崎健、大西健吾

調査概要

本調査は金シャチ横丁2期整備に伴う事前調査である。調査地点は名古屋城築城以前から天王坊と呼ばれる寺院が位置しており、明治5年(1872)に陸軍の名古屋鎮台設置に伴い廃絶となった。その後明治20年(1887)に陸軍第三師団司令部がおかれ、昭和20年(1945)まで陸軍の管轄地であった。陸軍の管轄中調査地点付近には神社や防空壕等の施設が置かれたようである。戦後は名古屋婦人会館が建てられた。

調査面積は約40㎡で、4地点にトレンチを設定し調査を実施した。

1 トレンチでは大部分が現代の造成土で構成されていることがわかった。2 トレンチは近代に堆積したと考えられる黄褐色の砂層が1mから2m近くに亘り造成されていることが確認された。近代の神社が存在していた位置とされており、構築する際に盛土が行われたと考えられる。3 トレンチは現代の造成土と近代の溝状遺構が1m程度の深さまで堆積していることが確認できた。4 トレンチは斜面地が近代の造成土で平坦面は近代の遺構が多く存在しており、特に第三師団司令部が竣工した明治20年代製作のれんがが大量に廃棄された遺構が確認された。すべての調査地点で、近代以降に大規模な造成が行われている様相が確認できた一方で、近世の遺構は今回の調査では明瞭に確認することができず、地表面から2m程度の掘削を行ってようやく近世層と推定される層が確認できる状態であった。



調査位置図



1 トレンチ完掘状況（南より）



2 トレンチ完掘状況（東より）



3 トレンチ完掘状況（南より）



4 トレンチ完掘状況（北東より）

2 その他調査

（1）二之丸庭園石造物調査

調査期間 令和5年（2023）9月19日（火）～令和6年（2024）3月29日（金）

調査対象 名勝二之丸庭園北池東の景石、石燈籠2基

調査目的 景石の石種、大きさ、産地などを把握し、考古学的成果と合わせて二之丸庭園の変遷を推測し、あわせて燈籠の実測図作成と由来を調査するもの

調査担当 高橋圭也

調査概要

名勝二之丸庭園を西、東、北池に便宜的に区分し、西にて景石鑑定を行った。景石に対して肉眼観察と計測を行い、観察内容を景石カードに記載した。景石カードは1石に対して1枚作成した。また、平面図に石種ごとに色分けを行った石種分布図を作成した。

観察の結果、近世の作庭と考えられている箇所は高さ1mを越える大きな片岩が多く、砂岩が少ない石種構成であった。近代の作庭と考えられている箇所は高さ1m程度の砂岩と加工された花崗岩が多く、片岩が少ない石種構成であった。

燈籠調査の結果、建中寺から個人を経て名古屋城に寄贈されたことがわかった。燈籠の銘文から3代藩主徳川綱誠と9代藩主徳川宗睦に対して奉納されたものであることが分かった。

（２）石垣カルテの作成

調査期間 令和５年（2023）10月26日（木）～令和６年（2024）３月28日（木）

石垣カルテ作成面積 6,907㎡（８面）

調査目的 特別史跡範囲内の石垣の基礎的情報（長さ・高さ・勾配・積み方などを収集し、健全性を調査するもの）

調査担当 二橋慶太郎、村上慶介

調査概要

名古屋城跡内石垣の保存、整備の一環として、石垣カルテの作成を行った。名古屋城跡内の石垣カルテは平成29年（2017）度から実施、令和５年（2023）度で７年目となる。

令和５年度は二之丸外堀の石垣を対象とした。石垣に近接して勾配の計測や肉眼での積み方などの観察、破損状況の確認を行った。なお、本年度はカルテの作成のみで、石垣のオルソ画像は作成しなかった。

調査の結果、直ちに崩落の恐れがある石垣は見られなかったものの、石垣の膨らみや築石の割れ、間詰石の抜けが各所で確認された。なかでも二之丸外堀南側、出来町通り下の155N石垣では、石垣中段から裾部にかけて各所で変状が見られ、石垣中段で築石が飛び出す箇所もみられた。

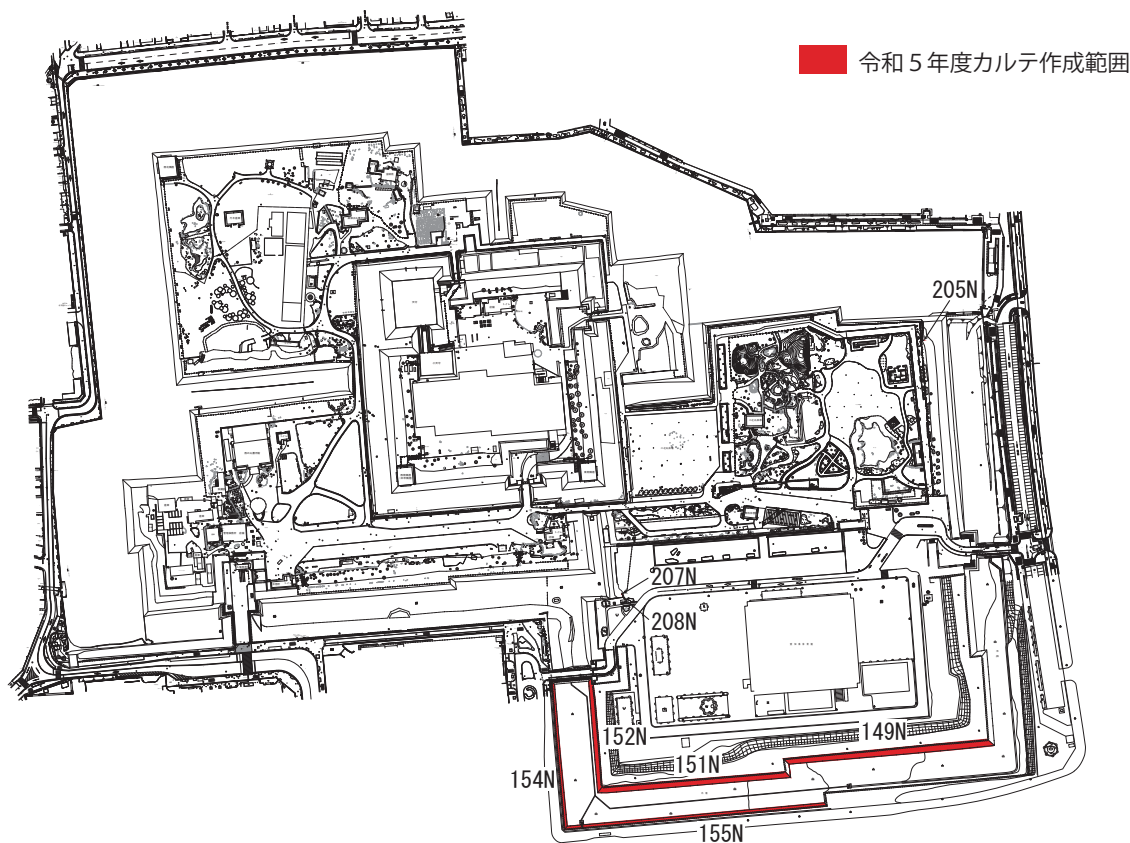
二之丸南西隅の152N石垣では、隅角部に火山砕屑岩（竜山石）の使用を確認した。同石材は兵庫県高砂市周辺で産出し、名古屋城内では池田輝政の丁場を中心に利用が確認されている。名古屋城石垣の隅角石は、その大半が名古屋城近辺で産出される花崗岩、花崗閃緑岩であり、火山砕屑岩の隅角石は池田家ならではの特質といえる。



石垣カルテ作業風景（152N石垣）



152N石垣隅角部の火山砕屑岩



令和5年度石垣カルテ作成範囲

(3) 名古屋城内石垣現況調査

調査期間 令和5年(2023)6月1日(木)～令和6年(2024)3月31日(日)

調査地区 本丸・二之丸・西之丸・御深井丸・三之丸地区(特別史跡範囲内)

調査面積 約67,300㎡(365面、搦手馬出解体範囲を除く)

調査目的 日常点検として石垣に大きなき損や変状がないか確認し、現状を記録するため

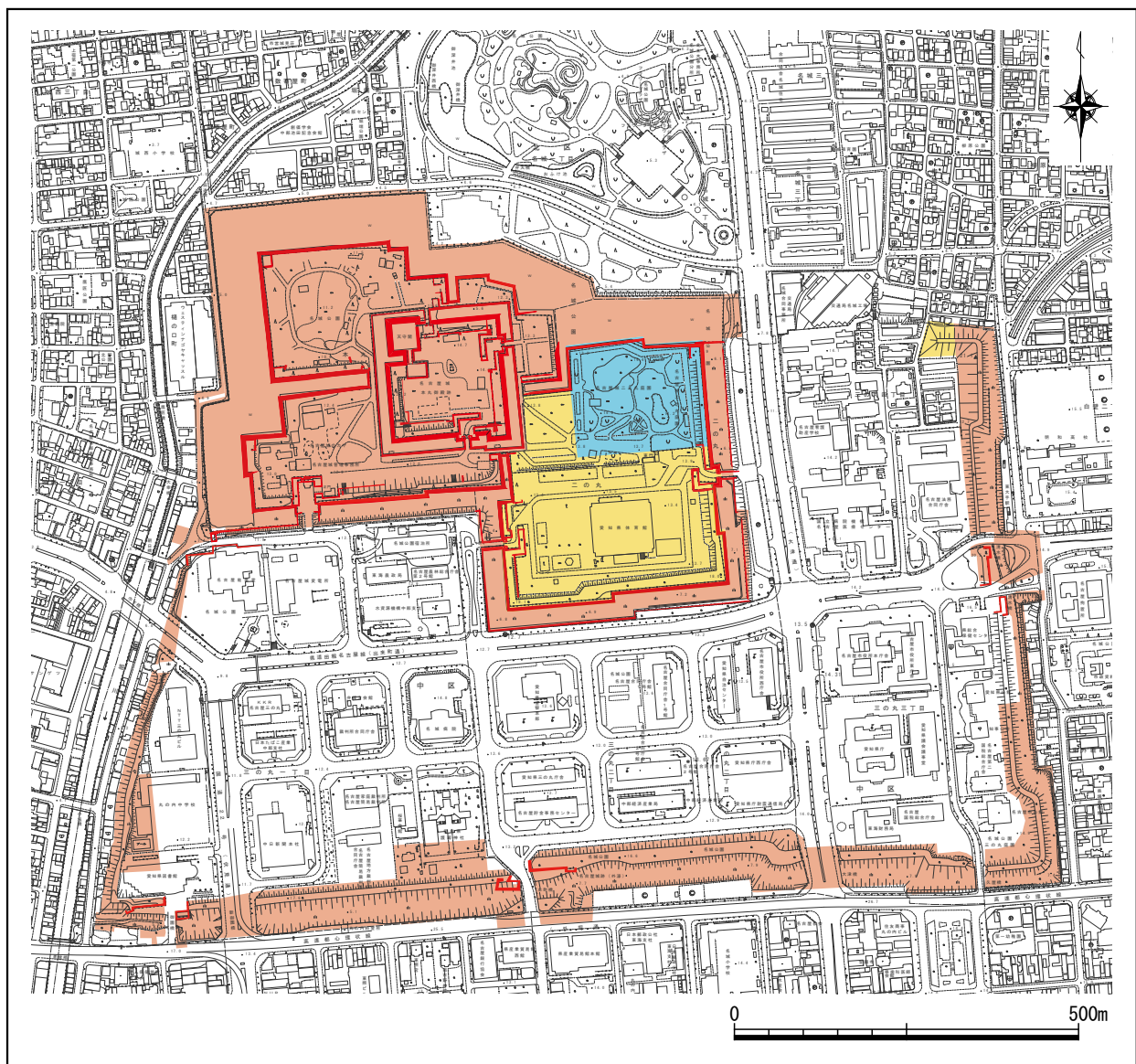
調査担当 村木誠、酒井将史、花木ゆき乃、二橋慶太郎、濱崎健、高橋圭也、大村陸、村上慶介、大西健吾

調査概要

名古屋城跡内における石垣管理の一環として、特別史跡範囲内石垣の現況確認調査を行った。

調査は名古屋城調査研究センターの考古担当学芸員が分担し、担当の石垣を半年に1回の頻度で通年観察した。調査にあたっては石垣石材の落下など、石垣に大きなき損や変状がないかを確認し、写真撮影による記録を行った。

通年による調査の結果、石垣に大きなき損や変状は確認されなかったものの、一部の石垣では間詰石の落下が確認された。今後も継続して調査を実施し、石垣の保全に努めていく。



特別史跡指定範囲
 名勝指定範囲
 史跡範囲 (未告示)
 調査対象石垣

調査対象石垣位置図

3 工事立会

(1) 二之丸庭園修復整備工事

工事期間 令和6年(2024)1月15日(月)～3月29日(金)

工事地区 二之丸(北)二之丸庭園

事業面積 ー

工事原因 名勝名古屋城二之丸庭園修復整備工事(北池護岸のひび割れ修理)

立会担当 高橋圭也

立会結果

北池護岸はタタキで構成されている。経年劣化や樹木根によるかく乱によってタタキの傾倒と割れが発生している。

今年度はひび割れ修理を行った。ひび割れ部分の苔や汚れ等を清掃後、タタキを充填した。清掃後は写真撮影及びタタキ観察表にタタキの厚さ、色調、骨材径等を記録した。

(2) 搦手馬出石垣積直し工事

工事期間 令和5年(2023)1月17日(火)～令和6年(2024)3月29日(金)(令和8年(2026)度末までを予定)

工事地区 本丸搦手馬出

事業面積 約6,000㎡

工事原因 崩落の危険性がある石垣の修復

立会担当 村上慶介、大西健吾、西本茉由、酒井将史

立会結果

本丸搦手馬出では、経年に伴う石垣面の変状による崩落防止対策として、石垣解体・修復工事を平成14年(2002)度の着手以降、継続的に実施している。

平成14年(2002)度から令和3年(2021)度にかけて石垣の解体や石垣変状の原因分析を目的とした地盤調査や変状要因への対策検討、発掘調査・石材調査等を実施してきた。石垣積直しは、令和4年(2022)度から令和8年(2026)度完了を目標とした5か年の計画を基に進捗している。本センターでは、積直し工事立会の傍ら、築石等石材、敷金等その他遺物・遺構の取扱いに関する調査及び資料整理を保存整備室と施工業者に帯同しながら進めている。

令和5年7月21日から28日にかけて未解体分の東面築石2石(001-2683, 001-2877)を復元位置に移動する前に石材カード作成、採拓、実測図作成、記録写真撮影、平面測量及び3次元計測を実施した。また、解体範囲外の東面築石2石(001-2805, 001-2806)について修復石垣面と調整する必要が生じたため、11月13日から12月12日にかけて同様の記録調査を実施した。年度末には計1,066石積み直しを完了した。来年度以降も計画を遂行するため、適宜調査及び立会を継続して実施していく。



築石調査風景(石材カード作成)



角石積直し作業(下段の白い角石は新補石材)

(3) 余芳移築再建工事

工事期間 令和5年(2023)11月6日(月)～令和6年(2024)3月29日(金)(令和6年(2024)度までを予定)

工事地区 二之丸庭園

事業面積 約730(建物約11.2㎡)

工事原因 二之丸庭園の整備のため

立会担当 大村陸、花木ゆき乃、酒井将史

立会結果

名古屋市指定有形文化財(建造物)に指定されている「余芳」は、平成23年(2011)に所有者から名古屋市へ寄贈されて以降、部材の状態で保管していたが、令和3年(2021)度に策定した「名勝名古屋城二之丸庭園整備計画書」のなかで余芳を江戸期庭園の元の場所へ移築再建する方針とした。これを受けて令和5年(2023)度より移築再建工事を実施している。

本センターでは移築再建工事に伴う立会を行った。立会は建物基礎範囲の掘削作業と埋設管設置に伴う掘削・埋戻し等の作業で実施した。

建物基礎範囲の掘削作業は令和5年11月14日に実施した。建物基礎範囲を深さ約50cm掘削したのち、碎石層を敷均しコンクリートを打設した。同日に埋設管設置に伴う掘削作業を行い、建物範囲から北西方向へ約20mの長さで深さ約40cm掘削した。11月15日に埋設管を設置し、山砂敷均し、シートを挟んで埋戻しを行った。なお、どちらの掘削範囲も過去に発掘調査を実施しており、掘削は発掘調査の埋戻し土の範囲で行った。

令和6年(2024)度も工事が継続するため、立会を実施していく。



築石調査風景(石材カード作成)



築石調査風景(石材カード作成)

4 資料調査（文書典籍・美術工芸）

概要

令和5年（2023）度は、調査研究センターが発足した令和元年度より継続的に収集してきた名古屋城関連の文献・史料の内、公益財団法人徳川黎明会 徳川林政史研究所（東京都豊島区）が所蔵する歴代藩主の名古屋城巡覧記録である『国秘録 御巡覧留続編』3冊を翻刻の上、解題を付して『名古屋城史料叢書 2』として刊行した。文献・史料収集は継続して実施し、下記一覧のとおり、18件30点の名古屋城関連資料を複写・収集した。

令和4年（2022）度を実施した御深井丸・小天守西側・二之丸庭園・西之丸御蔵構での発掘調査において、発掘の裏付け・補完を行う文献調査を実施した。その成果の一部は各報告書に反映した。

重要文化財名古屋城本丸御殿障壁画修理事業並びに障壁画復元模写事業において、修理及び復元模写方針策定に関する助言・管理指導を行い、修理・復元模写が完了した案件については納品確認・保管措置を行った。令和3年（2021）度より継続して実施している織田信長関係染織品の修理については、当該年度で事業の完了を迎えるにあたり、修理経過指導及び修理記録撮影の指導・立ち合いを行った。また、名古屋城金鯰鱗片の科学調査を外部機関と提携して実施し、成分・組成の解析を行った。

その他、昨年度に引き続き西の丸御蔵城宝館展示室において特別展3回・企画展3回を実施し、展示の裏付けとなる調査・検証を行った上で、初公開品を含む重要文化財名古屋城本丸御殿障壁画を延べ234日間にわたって公開した。

複写収集資料一覧

資料名	資料番号	点数
徳川林政史研究所所蔵資料		
〔安政三年辰二月十五日御家中始寺社御目見席図〕	続絵図1566	1点
（名古屋城謡初之図）	続絵図1572	1点
新御殿御座之間御次第書図面	続絵図1637-1・2	2点
〔寛永元大坂普請図 可秘云々〕	続絵図1640	1点
〔徳川家持地図面〕	続絵図1708	1点
（名古屋新邸ほか絵図）	続絵図1711-1・2	2点
〔未開墾調之図面写〕	続絵図1808	1点
〔元新邸地之引絵図〕	続絵図1862-1・2	2点
（愛知郡上名古屋村新邸地地籍之図）	続絵図1863-2・4	2点
（名古屋城二之丸絵図）	続絵図1866-1・2	2点
〔尾藩評定所初メ役所絵図〕	続絵図1901-25	1点
〔旧事帳〕	旧蓬左139-60	1点
御留守日記〔尾州御留守日記 一～三〕	尾張徳川家文書69-1～3	3点
瀬戸市所蔵資料		
名古屋城地並附属上地繪圖及書上	伊藤良三氏寄贈資料5-1～3	3点
御成御殿御指圖	伊藤良三氏寄贈資料6	1点
名古屋城下図	伊藤良三氏寄贈資料7	1点
表紙題字冊欠失「尾張国名古屋 城郭貳千四百分一 朱線内摺積三拾五萬坪」	伊藤良三氏寄贈資料8	1点
名古屋市蓬左文庫所蔵資料		
進饌要覧 卷之十一～十三・附録貞	5-20-15～18	4点

5 デジタル化事業

(1) 名古屋城史跡管理システム

概要

令和 5 年（2023）度は、発掘調査の調査区設定および城内における現状変更等に活用するため、特別史跡名古屋城跡及び名勝二之丸庭園における現状変更位置情報を下記の通り集成し、システムに登録した。

今後も、名古屋城内で実施された現状変更、発掘調査等について、情報の更新を進めていく。

登録情報

令和 5 年（2023）度 特別史跡名古屋城跡及び名勝二之丸庭園における現状変更位置 全62件

(2) 名古屋城関係資料データベース

概要

名古屋城調査研究センターでは、令和元年（2019）度より名古屋城に関係する資料の高精細デジタル画像を検索・閲覧できる「名古屋城関係資料データベース」を導入した。現在は所内での調査研究事業に活用している。また、データベースの拡充を図るため、毎年継続的に名古屋城関連史料の高精細デジタル画像を作成し、データベースへの追加登録を行っている。

令和 5 年度は、徳川林政史研究所所蔵「(名古屋城二之丸絵図)」、瀬戸市所蔵「名古屋城下図」、名古屋市蓬左文庫所蔵「進饌要覧 卷之十一～十三・附録貞」など 7 件59点の資料の高精細デジタル画像（画像点数2,992点）をデータベースに登録し、画面上で原資料の閲覧ができるようにした。

Ⅱ 資料管理

1 所蔵資料・受託資料の概要

(1) 所蔵資料

①重要文化財 名古屋城本丸御殿障壁画 (331面、附16面)

重要文化財 名古屋城本丸御殿天井板絵 (331面、附369面) 計1,047点

慶長20年(1615)造営、寛永11年(1634)増築の本丸御殿内に描かれた障壁画群。本丸御殿は昭和20年(1945)の空襲により焼失したが、事前の疎開により襖絵、障子腰貼付絵、杉戸絵、天井板絵は焼失を免れた。なお、壁貼付絵は取り外しが困難なことから事前の疎開ができず、本丸御殿と共に焼失した。

障壁画は慶長造営期・寛永増築期を通じて、狩野派の絵師によって描かれた。慶長造営期は当時の狩野家当主であった狩野貞信をはじめ、狩野甚之丞などが担当、寛永増築期は江戸幕府の御用絵師である狩野探幽をはじめ、狩野奎之助などが担当した。

城郭御殿の障壁画が一括して保存されている事例は、京都市・二条城と名古屋城の2例のみであり、全国的に見ても極めて貴重な資料群である。

文化財指定の経緯

昭和17年	1942	6月26日	障壁画345面(附16面)が国宝保存法に基づく国宝(旧国宝)に指定
昭和25年	1950	8月29日	文化財保護法施行に伴い、旧国宝のうち障壁画199面(附16面)が重要文化財に指定(旧国宝指定分のうち障壁画146面は戦災により焼失)
昭和30年	1955	6月22日	障壁画132面が重要文化財に追加指定
昭和31年	1956	6月28日	天井板絵331面(附369面)が重要文化財に指定

②ガラス乾板写真 738枚

昭和15～16年(1940～41)に、旧国宝に指定されていた建造物24棟および本丸御殿障壁画を中心に撮影された写真。一部、戦後に撮影されたものや他のガラス乾板写真の転写などを含む。

③昭和実測図 307枚

昭和7年(1932)時点で旧国宝に指定されていた建造物24棟の詳細な実測図。昭和7年(1932)実測調査開始、昭和17年(1942)完了、第二次世界大戦による中断を経て、昭和27年(1952)に清書完了。屋根瓦や飾金具の拓本も含まれる。

④その他の主要な所蔵資料

1. 享元絵巻…尾張藩七代藩主・徳川宗春の治世下、享保17～21年(1732～1736)頃の名古屋城下本町通沿いの様子を描いた画卷。遊郭や芝居小屋の賑わいなど、当時の風俗を鮮やかに描く。
2. 金城温古録…奥村得義、定によって編纂された名古屋城の詳細な記録集。明治26年(1893)に名古屋城の本丸・西之丸などが陸軍省から宮内省に移管され、名古屋離宮となるが、名古屋城本はその際に第三師団司令部所蔵本(現靖國神社遊就館本)を転写し作成された。全64巻のうち、得義が尾張藩に献納した31巻分のみの写本となっている。
3. 木子コレクション…故木子進發氏が収集した計865点に及ぶ刀剣・刀装具のコレクション。
4. 戦災資料…焼損した天守・本丸御殿の金具、金鯱の鱗片、焼夷弾の弾頭など。
5. 収集資料…武具、甲冑、名古屋城の図面類など、近世武家文化・名古屋城に関わるものを中心。

（２）令和５年度購入資料

該当資料なし。

（３）令和５年度受贈資料

・名古屋城二之丸御殿儀式次第及び図面など １件53点

「名古屋城二之丸御殿儀式次第及び図面」、「尾張藩分限帳及び分限覚書」、「名古屋東照宮祭礼行列書」などの尾張藩や尾張の文化に関する文書のほか、美濃大垣藩士小森家に関連すると思われる、文書や紀伊松坂領波瀬村に関連する文書などを含む文書群一式。

・葵紋付箆・破魔弓・破魔矢など ６件25点

11代将軍徳川家斉の御番医師・小島昌流が文化４年（1807）に阿久比町宮津熱田社に奉納した家斉姫君の誕生に関する儀礼調度で、破魔矢・弓・箆と左義長羽子板、寄進札、尾張藩主奉納の白羽矢などからなる江戸の武家文化を示す資料。

・五箇条御誓文太政官高札（慶応４年３月14日）・五榜の掲示第四札名古屋縣取次高札 ２件２点

「五箇条御誓文太政官高札（慶応４年３月14日）」は太政官によって慶応４年（1868）３月に、「五榜の掲示第四札名古屋縣取次高札」は慶応４年に掲出され、名古屋県が発足した際に改めて掲示された高札で、明治維新时期における政治動向を知ることができる資料。

（４）令和５年度受託資料

計10件（継続７件、新規３件）。

（５）令和５年度受贈・購入図書

（単位：冊）

	報告書	図録	紀要	年報	資料集	リーフレット	一般書籍等	合計
受贈	26	51	18	14	1	9	46	165
購入	4	2	0	0	2	0	32	40
合計	30	53	18	14	3	9	78	205

2 資料の修理

（１）名古屋城旧本丸御殿障壁画保存修理事業（文化庁補助事業）

昭和61年（1986）からの継続事業として、名古屋城旧本丸御殿障壁画・天井板絵計1047面（実数は1049面）の修理を行っている。障壁画331面については、平成17年（2005）度に根本修理（解体修理）が完了したことを受け、平成27年（2015）度から、名古屋城内での点検修理を実施している。天井板絵331面（附369面）は平成14年（2002）から根本修理（解体修理）を実施しており、令和6年（2024）度で終了する予定である。また令和4年（2022）度から過去に修理した天井板絵の点検修理を行っている。今年度は引き続き折上部天井板絵（R天井板絵）の点検を行った。

また、R天井板絵の修理が最終段階に入ったことを受け、令和4年度の構造模型作成に引き続き、各修理過程について記録映像の撮影を行った。

R部の修理は、本紙と支持体（木部）の間にカーボンを挟むという天井画としては前例のない工法を、修理技術者・文化庁・名古屋城管理事務所（当時）で協議し開発したものであるが、本紙と木部間の構造は修理終了後は隠れてしまうため、記録するものである。令和5年度は撮影を行い、令和6年度に追加撮影ならびに編集を行う予定である。

令和5年（2023）度修理画面

①点検修理

作品名	場所	形状		面数
岩波禽鳥図 91	御湯殿書院二之間南側	襖絵	紙本金地着色	4面
扇面流図92	御湯殿書院一之間北側東側	襖絵	紙本金地着色	4面
花車図 60	上洛殿一之間南入側	杉戸絵	板画着色	2面
花桶図 61	上洛殿二之間南入側	杉戸絵	板画着色	2面
山水図 5	上洛殿上段之間	天井板絵R	紙本着色	1面
山水図 6	上洛殿上段之間	天井板絵R	紙本着色	1面
山水図 7	上洛殿上段之間	天井板絵R	紙本着色	1面
画題不詳 8	上洛殿上段之間	天井板絵R	紙本着色	1面
合計				16面

②根本修理

作品名	場所	形状		面数
山水図 137	上洛殿一之間	天井板絵R	紙本墨画	1面
七宝唐草文図附 314～344	上洛殿三之間	天井板絵	紙本着色	26面
合計				27面

（２）信長関係染織資料

令和3年（2021）度・令和4年度に引き続き、下記の染織資料の修理を行い、完了した。

今回の修理の方針は、衣桁等にかけての展示は想定せず平面展示のみに限ることを基本とし、平面展示に耐えうる程度の可逆的修理を行った。また保存箱は、西の丸御蔵城宝館収蔵庫の棚幅にあわせた最大幅の箱を中性紙で制作した。

資料番号	資料名	材質	員数
499-1	萌黄四ツ目菱斜格子緞子地木瓜紋鎧下着	緞子地	1領
499-2	紅麻地木瓜紋籠目文鎧下着	麻地	1領
497-1	軍旗	絹、革、金箔	2旒

3 資料の利用

(1) 資料貸出

貸出先	貸出目的	貸出資料	展示期間
三井記念美術館	N H K 大河ドラマ 特別展 「どうする家康」	【寄託資料】 「東照宮縁起絵巻」 第三巻 「徳川家康画像」	令和 5 年 (2023) 4 月15日～ 6 月11日
愛知県美術館	「幻の愛知県博物館」展	【所蔵資料】 「金鯰鱗」はじめ 6 件 6 点 【寄託資料】 名古屋城振興協会所蔵 「元ト昌平阪聖堂ニ於テ 博覧会図」はじめ 8 件 8 点	令和 5 年 (2023) 6 月30日～ 8 月27日
岡崎市美術博物館	N H K 大河ドラマ 特別展 「どうする家康」	【寄託資料】 「東照宮縁起絵巻」 第一巻	令和 5 年 (2023) 7 月 1 日～ 8 月20日
関鍛冶伝承館	企画展「名古屋城名刀展」	「脇差 銘相模守藤原政常」 はじめ31件31点	令和 5 年 (2023) 9 月15日～11月 5 日
徳川美術館 名古屋市蓬左文庫	秋季特別展 「人間讃歌—江戸の風俗画—」	重要文化財名古屋城本丸御殿障壁画「風俗図」(対面所上段之間付書院障子腰貼付) 1 件 4 点	令和 5 年 (2023) 9 月24日～11月 5 日
石川県立歴史博物館	秋季特別展「御殿の美」	重要文化財名古屋城本丸御殿障壁画「松竹禽鳥図」(表書院上段之間襖) はじめ 9 件24 点28面	令和 5 年 (2023) 10月14日～11月26日
静岡市美術館	N H K 大河ドラマ 特別展 「どうする家康」	【寄託資料】 「東照宮縁起絵巻」 第二巻 「徳川家康画像」	令和 5 年 (2023) 11月 3 日～12月13日

(2) 写真貸出

64件250点(観光用写真を除く)

(3) 熟覧

熟覧日	熟覧者	熟覧目的	熟覧資料
令和 5 年 (2023) 6 月21日	名古屋城本丸御殿障壁画復元模写制作共同体	名古屋城本丸御殿障壁画復元模写制作の参考とするため	「竹虎図」はじめ重要文化財名古屋城旧本丸御殿障壁画・天井板絵13件18面
令和 5 年 (2023) 9 月27日	名古屋城本丸御殿障壁画復元模写制作共同体	名古屋城本丸御殿障壁画復元模写制作の参考とするため	「竹虎図」はじめ重要文化財名古屋城旧本丸御殿障壁画・天井板絵13件18面
令和 5 年 (2023) 12月20日	名古屋城本丸御殿障壁画復元模写制作共同体	名古屋城本丸御殿障壁画復元模写制作の参考とするため	「竹虎図」はじめ重要文化財名古屋城旧本丸御殿障壁画・天井板絵13件18面
令和 6 年 (2024) 1 月31日	名古屋城本丸御殿障壁画復元模写制作共同体	名古屋城本丸御殿障壁画復元模写制作の参考とするため	「竹虎図」はじめ重要文化財名古屋城旧本丸御殿障壁画・天井板絵13件18面

Ⅲ 展示事業

1 西の丸御蔵城宝館 展示室

(1) 特別展「家康とお嫁様 名古屋城と春姫お輿入れ」

会期 令和5年(2023)3月18日(土)～6月18日(日) 93日間

1期: 3月18日(土)～4月25日(火) 39日間

2期: 4月26日(水)～5月15日(月) 22日間

3期: 5月16日(火)～6月18日(日) 34日間

入館者数 111,239人(1日平均1,196人)

出品件数 16件

印刷物 解説目録 カラー A4 8頁 令和5年(2023)3月17日発行

展示担当 朝日美砂子

趣旨

慶長20年(1615)4月12日、初代尾張藩主徳川義直との婚儀のため、初代紀州藩主浅野幸長の息女春姫が名古屋城に入城した。春姫お輿入れの大行列を、義直の父家康は櫓の上から見守ったという。婚儀が行われたのは、その直前に完成した本丸御殿で、中でも対面所が主に用いられたと考えられる。本展は、対面所を飾った障壁画ほぼ全点を一堂に公開する。対面所障壁画と関連する絵画も集成し、本丸御殿での婚儀を多角的に検証する。

テーマパネル・作品解説・補助解説

文章の改行・ルビ、挿入写真・図面は省略した。ここに収録しないパネル・キャプションもある。特記のないかぎり所蔵は名古屋城総合事務所。

テーマⅠ 名古屋城本丸御殿の対面所

対面所は、武家屋敷におけるもっとも重要な儀礼である対面を行う部屋。慶長20年(1615)に完成した名古屋城本丸御殿では、玄関、広間(現呼称 表書院)につづく棟が対面所と呼ばれていた。当時の間取を描く図面によれば、対面所の西には、「書院」、「御殿」、「化粧間」などの藩主義直や正室春姫の御座所と思われる建物が連なっていた。しかし、書院以西は寛永11年(1634)の三代将軍家光御成にともない破却された。残された玄関・表書院・対面所も、昭和20年(1945)5月14日の名古屋大空襲により全焼した。襖・舞良戸・腰障子などに描かれた障壁画は、空襲直前に取り外され別途保管されていたため、奇跡的に焼失をまぬがれ今に残る。

テーマⅡ 対面所の障壁画

対面所の障壁画には、京都・和歌山の風景や年中行事が季節感豊かに描かれている。その穏やかな画風からか、対面所は、春姫生誕地である和歌山を意識した内向きの接客空間とされることが多い。しかし、戦災焼失前に撮影された写真に写る、二重折上格天井や黒漆塗の舞良子、葵紋を多用する長押釘隠しや襖引手は、表書院より豪華で格が高い。家康実子義直を初代藩主とする尾張徳川家にあつては、「内向きの客」とは将軍家、すなわち家康・秀忠に他ならない。本丸御殿自体、家康の直命で建てられており、対面所は、家康と義直との対面を意識して荘厳された建物と考えられる。また、対面所障壁画が四季名所風俗図であることも、格と密接に関連する。名所絵は、統治者による土地支配を形象化したものであり、年中行事図や職人尽図、耕作図も、為政者による豊穰と繁栄への予祝に他ならない。この意味で対面所障壁画は、きわめて正統的かつ普遍的な画題を描くものといえる。

テーマⅢ 対面所と春姫

慶長20年(1615)4月12日、本丸御殿で、16歳の義直と13歳の春姫(1603～37)との婚儀が行なわれた。春姫の父は紀州和歌山の初代藩主浅野幸長で、義直との結婚は6年前の慶長14年、家康により定められていた。婚儀のため4月10日から名古屋城に滞在していた家康は、15日、大坂夏の陣に向け出発し、翌16日には義直も出陣した。春姫は、嫁いだ4

日後には義直を戦場に送りだし、7月の帰陣まで、和歌山から同行した乳母とともに本丸御殿で過ごした。春姫の居室は、「化粧間」という最奥の建物であったと考えられ、表にあたる対面所とは長い廊下と杉戸でへだてられていた。幼い春姫が一人で対面所まで出向くことはありえない。それでもなお、婚儀の折りに見た襖絵に描かれた故郷和歌山の景が春姫を慰めたことも、また確かであろう。

テーマⅣ 対面所障壁画を描いた画家

名古屋城本丸御殿対面所は、南側に上段之間と次之間の二室が続き、北側に納戸上之間と次之間があった。今回展示するのは南側二室の四周に描かれた、風俗図と総称される障壁画である。二室のうち上段之間には、吉田神社、上賀茂神社などの京都洛北の光景が、また次之間には、紀州和歌山の城下や海辺の景色が、季節の行事とともに展開されている。いずれも改竄や補筆が少なく、慶長期の障壁画としては稀有な状況にある。逆に顔料の剥落や退色が目に立つが、対面所を担当した画家の個性的な表現は伝わってくる。すなわち、建物や遠山と金雲を重層的に重ねる奥行表現、細長い松を多用し根元まで描く樹木描写、闊達な動きを示すがやや小振りの人物、その尖った鼻や二重瞼、薄い爪先などである。そして、全体に漂う穏やかで品のある画趣が、この画家の本質的個性といえよう。

テーマⅤ さまざまな風俗図

慶長期（1595～1615）の障壁画は、戦乱や火災などにより大半が失われ、現存する例はきわめて少ない。その中で名古屋城本丸御殿の対面所障壁画と画風を同じくする障壁画が存在する。細かく見れば表現に差はあるが、同一工房の作であることは確実である。そもそも慶長期本丸御殿障壁画を描いた画家は、狩野貞信の名が狩野家の記録にあるのみで、それ以外は記録がない。建物と狩野家の序列を鑑み狩野永徳の甥にあたる甚之丞（1581または1583～1626または1628）を対面所筆者にあてるのが今の定説となっているが、甚之丞の他作品と比較すると対面所の画風は同一とはいき切れない。そもそも現在の建物序列論は、義直御座所など寛永期に壊された慶長期建造物を無視しており、再考が必要と考えられる。

作品解説 1 雛人形 個人蔵 二対のうち一对二点 室町時代 天文16年（1547）頃

紙や布を折って衣装とした紙雛。天文16年（1547）、6歳の家康（当時竹千代）は父松平広忠により人質として今川義元の駿府に送られる途中、親族の裏切りにより織田信秀に届けられ、熱田の加藤家（東加藤家）に預けられた。東加藤家の娘よめは、紙を折って人形を作り家康を慰めた。この愛らしい紙雛こそ、幼い家康が手にとって遊んだ人形であるという。

作品解説 2 風俗図〔門付〕 重要文化財 名古屋城本丸御殿対面所次之間東側舞良戸 4面 次之間・東入側境 慶長19年（1614）

対面所は、畳敷きの入側（廊下）で囲まれ、室内と入側との境に、舞良戸や腰障子と呼ばれる建具がはめこまれていた。舞良戸は、入側側（裏面）が総板戸で、室内側（表面）に風俗図と総称される絵が貼られる。展示資料は次之間東側の舞良戸。千秋万歳の門付、綱引き、注連縄作り、髪結、見世物など、迎春準備と新春行事が描かれる。左に広がる海は、春姫故郷の和歌の浦と考えられている。

作品解説 3 風俗図〔田植〕 重要文化財 名古屋城本丸御殿対面所上段之間東側襖 4面 上段之間・次之間境 慶長19年（1614）

対面所の表側（南側）に並ぶ上段之間と次之間は、両面に絵を貼り込んだ襖によって仕切られていた。展示の画面は、上段之間側（東側）の襖絵。右1枚目の上部に京都・吉田神社の湯立神事、その下に早乙女による田植や豊作祈願としての男女の争い、左端に上賀茂神社の一之鳥居を配している。人物の軽やかな動きが個性的である。本画面に続く張台構には、上賀茂神社の競馬神事が描かれていたが、昭和20年（1945）5月の空襲で建物とともに焼失した。

作品解説 4 風俗図〔勅使参詣〕 重要文化財 名古屋城本丸御殿対面所次之間西側襖 4面 上段之間・次之間境 慶長19年（1614）

対面所の表側（南側）に並ぶ上段之間と次之間は、両面に絵を貼り込んだ襖によって仕切られていた。展示の画面は、次之間（西側）の襖絵。右から、玉津島神社に参詣する勅使（天皇家からの使者）、鏡山南面の奥の窟という洞窟。船から降りる女性は、安産を願って参拝にきたのかもしれない。その左に船を川におろす船大工。上方には布引松と紀三井寺の境内が描かれる。

作品解説 5 風俗図〔石投〕 重要文化財 名古屋城本丸御殿対面所次之間南側障子腰貼付絵 4 面 次之間・南側入側境 慶長19年（1614）

対面所次之間と南側の入側（廊下）とを仕切る腰障子。上が明り取りのための紙障子、下が板に絵を貼る舞良仕立になっている。展示画面の右側では、武士の一行が紀ノ川に石を投げて遊んでいる。左側では、街道を行く山伏や武士が描かれ、旅籠らしき家がならぶ。石投げに興ずる武士の表情は穏やかで、この画家の個性をよく示している。

作品解説 6 風俗図〔風呂屋・刈入〕 重要文化財 名古屋城本丸御殿対面所上段之間南側障子腰貼付絵 2 面 上段之間・南側廊下境 慶長19年（1614）

上段之間南側の入側（廊下）との境の大障子腰。風呂屋や饅頭屋がならぶ辻と、刈り取り中の稲田、稲束を運ぶ牛が描かれる。風呂屋では湯女が男性客の髪を結う。悪所の気配はなく、御殿にふさわしい健全な描写となっている。手前の饅頭屋では、男性が麺を打ち女性が丸めた麺を包丁で切る。ゆでた麺を黒漆塗の椀に入れ供したと思われ、慶長期の食堂としても興味深い。

作品解説 7 芦雁図 重要文化財 名古屋城本丸御殿対面所上段之間 違棚天袋襖 慶長19年（1614）

上段之間には、大床、違棚、付書院があり、武家書院造のうち最高の格式を備えていた。展示の画面は、違棚上部の天袋という、ごく小さな押入の襖絵。芦原に群れる雁を描いている。なお表具裂は明治以降の修理時に仕立てられたもの。

作品解説 8 長谷寺観桜図屏風 個人蔵 江戸時代前期

桜につつまれた奈良の長谷寺を描く。現状は二曲一隻の屏風であるが、左扇右端に引手跡があり、本来は四枚引き襖の中央二枚で、右の襖の左端が若干切り詰められたと考えられる。中央下から左上に、仁王門、399段という屋根付きの登廊、懸造りの本堂が連なり、お参りに来た姫君と乳母、投扇に興じる僧と稚児らが小さめに配される。急角度で建物や山、雲を重ねる奥行、動きはあるが控え目な人物、その尖った鼻や爪先、全体に漂う穏やかな画趣などは、名古屋城対面所に極めて近い。制作時期もほぼ同じと考えられる。しかし、土坡の一部に金箔を貼り、衣装には金泥の線描を加えている。名古屋城以上に豪華な仕様の障壁画を必要とした慶長末期前後の御殿は限られ、今後の検討を要する。

作品解説 9 社頭風俗図屏風 個人蔵 江戸時代前期

現状は屏風であるが、中央部に2個の引手跡があり、四枚引きの襖の中央二枚とわかる。画面下に京都洛北の清滝川が流れ、田植、豊作祈願としての印地打（石投げ）、吉祥画題である跳馬や馬喰が描かれる。上方には、赤鳥居をくぐる参道が愛宕山に刻まれ、山頂の愛宕神社にいたる。急角度で上にのびる構図や速度ある人物表現は名古屋城対面所障壁画や個人蔵「長谷寺観桜図」（8）と共通し、さらに地面や衣装の表現に金を多用する仕様は「長谷寺観桜図」と極似する。「長谷寺観桜図」が春の奈良、本資料が初夏の京都を描くことから、同じ建物の障壁画であった可能性もある。

作品解説10 風俗図 江戸時代前期 名古屋市博物館蔵

名古屋の旧家に伝来し、近年名古屋市博物館に寄贈された風俗図。紙継があり、襖絵か屏風の断簡と考えられる。展示の軸には、双六に興ずる武士が描かれる。庭先の柳は未だ芽吹かず、冬あるいは早春の景となる。二重の目元、尖った足先、なだらかな金雲などは、名古屋城対面所障壁画に類似する。しかし、筆致がやや硬く、人物の動きも軽やかさに欠ける。対面所筆者と近い工房画人の作で、制作時期も同じ頃か、下ってもわずかな差と考えたい。

作品解説11 葵紋黒漆塗唐草文金時絵女乗物 江戸時代後期

名古屋の旧家に伝わり、近年名古屋城に寄贈していただいた女乗物。女乗物とは、高位の女性が用いた駕籠のこと。室内には極彩色で松、竹、梅、鶴など吉祥的な花鳥を描き、天井は格天井とし様々な花で埋め尽くしている。外側の屋根や正面上部には葵紋金具を打ち、また金時絵により葵紋を四周に表している。時絵の葵紋は形式化した幕末期の形であるが、金具の葵紋は、茎が優しい曲線を描くなどやや古い。室内の脇息の裏に「御修覆 御紋入替 文久三年亥二月吉日 江戸神田紺屋町三丁目代地 住人乗物屋三郎右衛門」と墨書されており、文久3年（1863）2月、江戸神田紺屋町代地（現東京都千代田区）に住む乗物師が、既存の乗物を修復し紋を入れ替えたことがわかる。漆を塗りなおし、金具は古いものをそのまま用いたのであろう。

解説パネル 女乗物に乗った人

江戸時代の乗物には規定があり、本資料のように黒漆を塗り金蒔絵で家紋を表すものは、大名家の正室とその娘しか使用できなかった。展示の乗物が修復された文久3年（1863）とは、江戸屋敷に住む諸大名の妻子が政情不安により帰国を許された年である。当地の見聞書『青窓紀聞』（水野正信編・名古屋市蓬左文庫蔵）によれば、同年3月4日、貞慎院（12代尾張藩主斉荘正室）、矩姫（14代慶勝正室）、政姫（15代茂徳正室）、釧姫（斉荘四女）という藩主と元藩主の妻女4名が江戸を発ち、22日に名古屋に戻った。4女性のうち未婚は釧姫（1843～71）のみ。正規の女乗物は嫁入り時に作られることが多いことから、急な帰国にあたり、自身の乗物がない釧姫のため、既存の乗物を塗り直し葵紋を蒔絵した可能性がある。なお釧姫は、明治4年（1871）大給松平家に嫁いだが、新調の乗物に乗ったため漆にかぶれ、婚儀の三月後に没したという。

作品解説12 黒漆塗葵紋裏菊紋梨地蒔絵長持 松山カーテン株式会社寄贈 江戸時代前期

本年3月にご寄贈いただいた長持。蓋表と身に、十六葉裏菊紋と葵紋を梨地蒔絵で交互に配し、金具にも葵紋と十六葉裏菊紋を金鍍金で表している。葵紋は豪快で、17世紀、すなわち江戸前期の姿を示す。この頃に裏菊紋と葵紋を併用できた女性は、初代尾張藩主義直の孫で公家の広幡忠幸を父とし三代藩主綱誠の正室となった新君（1654～92）しかいない。新君の母は、義直長女京姫。京姫は、慶安2年（1649）正親町天皇の曾孫にあたる幸丸（八条宮智仁親王の子）と婚約した。幸丸は義直の養子となり名古屋に移住し長女新君を設けたが、妻子を置いて京都に戻り、寛文3年（1663）公家となり広幡忠幸と名乗った。広幡家の家紋が十六葉裏菊紋である。新君は、寛文7年、義直孫綱誠に嫁いだ。本資料は、実家と婚家（こんけ）の紋を付けた新君の婚礼調度と考えられる。

作品解説13 黒漆塗葵紋若松唐草模様蒔絵長持 江戸時代後期 名古屋城振興協会蔵

葵紋を大きく表し、若松や唐草模様で周囲を埋める、典型的な長持。伝来は知られず、いずれかの徳川家から嫁いだ姫君の婚礼調度と考えられる。松は常緑であるところから長寿のモチーフとされ、とくに芽生えたばかりの若松（小松）は子孫繁栄の象徴としてしばしば婚礼調度に配された。蓋の金具には葵紋と唐草文、七宝繫文が刻されているが、底の部分の金具には紋がなく、七宝繫文だけが表されている。下方には葵紋を入れないというのも当時の定石であった。

作品解説14 稲富流砲術伝書 全21冊1巻のうち 岐阜関ヶ原古戦場記念館蔵

稲富祐直（一夢、1552～1611）を始祖とする、鉄砲（火縄銃）などの砲術流派である稲富流の秘伝書。一夢は、細川忠興、井伊直政に仕えた後、清須城主松平忠吉に招かれ、忠吉没後もその弟である徳川義直に庇護された。本資料は、紺表紙と茶表紙の二種からなり、もとは別系統の伝書と考えられる。茶表紙系は、慶長5年（1600）6月、春姫実父の浅野左京大夫幸長（1576～1613）が相伝したものであることが奥書から知られる。幸長は、秀吉家臣であったが、慶長5年8月の関ヶ原合戦の功により家康から紀伊国37万石余を与えられた。男子がないまま慶長18年に没し、弟長晟が跡を継ぎ、同20年には遺児の春姫が義直に嫁いだ。鉄砲名手で稲富一夢に師事した事でも知られる。本資料は関ヶ原合戦直前の成立で、慶長10年以降の秘伝書が多い中できわめて早期のものとなる。金銀泥を駆使した流麗な料紙装飾と狩野派絵師による絵も優れ、慶長初年の絵画として貴重である。紺表紙系は、紺紙の表紙に金銀泥で草木や野山を描き、金銀の砂子や切箔を散らすもの。金泥で下絵を描いた朱色の題箋を張り込んでいる。江戸時代前期の御伽草子などに共通する典型的な料紙装飾である。秘伝内容も茶表紙系にくらべはるかに整っており、秘伝書が固まった時期の制作と考えられる。

十七号 鶯、鳩、鷺、鷹、蜻蛉、蝶、猪、鹿、騎馬武者、松、薄などの草木・鳥獣虫魚・人物を鉄砲で打つ時どこをねらうかを図示する。奥書はないが、装丁や紙質から、慶長5年の秘伝書（茶表紙系）と一連と考えられる。「津村」と墨書する付箋が表紙にあり、津村家に伝来したのであろう。人物の彫りの深い顔立ちは狩野孝信など慶長期の狩野派本流の画法にのっとっており、鳥獣の描写も的確である。このような秘伝書制作が狩野派の底力になっていたと考えられる。

十九号「鉄砲町之薬積并九星槽見積之事」「矢蔵」（矢倉）とは、遠距離を打つ場合（町打ち）に用いる照尺の事。稲富流は、照尺を用いての精緻な遠距離射撃を得意とした。一方料紙には、金泥で界線を引いた上、金泥や銀泥を用いて芭蕉、菜の花、桔梗、薄などの四季の草花を繊細に描いている。

二十号「鉄砲十九ヶ條秘伝之書 天からしだれる藤、大きくしなる柳、野菊や萩が咲き乱れる秋の田、そして遠山までを、長い画面に描ききる。天地をカットするトリミング、近景から遠景へと視点をかえる複視点など、構図も巧みで、茶表紙系料紙の内ではひときわ優れている。このような絵屋の中から、国宝「風神雷神図屏風」で知られる俵屋宗達が生まれたのである。

尾張藩初代藩主義直の事績を記す年代記。諸書にのる記事を再録したもの。慶長20年（1615）4月の義直と紀州和歌山の前藩主浅野幸長の遺児春姫との婚儀について、時系列で記す。家康は、名古屋城の隅櫓にのぼり、本丸御殿に入る春姫の婚礼行列を見守ったという。

チラシ

特別展 名古屋城 西の丸御蔵城宝館



名古屋城 西の丸御蔵城宝館 特別展

家康と

お嫁様

名古屋城と春姫お輿入れ

令和5年3月18日(土)～6月18日(日)

会期中展示替えいたします。展示状況はホームページをご覧ください。

名古屋城 西の丸御蔵城宝館

午前9時～午後4時30分(最終入館 午後4時)
ただし、催事等により変更となる場合があります。
会期は無休

入館無料
※名古屋城観覧料500円が必要。
(名古屋市内在住65歳以上100円・中学生以下無料)
主催：名古屋城総合事務所 名古屋城調査センター



名古屋城 西の丸御蔵城宝館 特別展

家康と

お嫁様

名古屋城と春姫お輿入れ

令和5年3月18日(土)～6月18日(日)

会期中展示替えいたします。展示状況はホームページをご覧ください。

名古屋城 西の丸御蔵城宝館

午前9時～午後4時30分(最終入館 午後4時)
ただし、催事等により変更となる場合があります。
会期は無休

入館無料
※名古屋城観覧料500円が必要。
(名古屋市内在住65歳以上100円・中学生以下無料)
主催：名古屋城総合事務所 名古屋城調査センター

名古屋城 西の丸御蔵城宝館 特別展

家康と

お嫁様

名古屋城と春姫お輿入れ

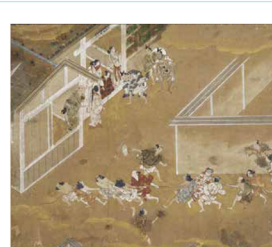
令和5年
3月18日(土)～6月18日(日)

会期中展示替えいたします。展示状況はホームページをご覧ください。

名古屋城 西の丸御蔵城宝館

午前9時～午後4時30分(最終入館 午後4時)
ただし、催事等により変更となる場合があります。
会期は無休

入館無料
※名古屋城観覧料500円が必要。
(名古屋市内在住65歳以上100円・中学生以下無料)
主催：名古屋城総合事務所 名古屋城調査センター



名古屋城 西の丸御蔵城宝館 特別展

家康と

お嫁様

名古屋城と春姫お輿入れ

令和5年
3月18日(土)～6月18日(日)

会期中展示替えいたします。展示状況はホームページをご覧ください。

名古屋城 西の丸御蔵城宝館

午前9時～午後4時30分(最終入館 午後4時)
ただし、催事等により変更となる場合があります。
会期は無休

入館無料
※名古屋城観覧料500円が必要。
(名古屋市内在住65歳以上100円・中学生以下無料)
主催：名古屋城総合事務所 名古屋城調査センター

名古屋城 西の丸御蔵城宝館 特別展「家康とお嫁様 名古屋城と春姫お輿入れ」

令和5年3月18日(土)～6月18日(日)
主催 名古屋城総合事務所 名古屋城調査研究センター

番号	指定	作品名	員数	備考	時代	所蔵	展示期間
1		雛人形	1対2点	伝徳川家康所持	室町時代		3月18日(土)～4月25日(火)
2	◎	風俗図 〔門付〕	4面	名古屋城本丸御殿対面所次之間東 側舞良戸 34	慶長19年 (1614)	名古屋城総合事務所	3月18日(土)～4月25日(火)
3	◎	風俗図 〔田植〕	4面	名古屋城本丸御殿対面所上段之間 東側襖 36	慶長19年 (1614)	名古屋城総合事務所	3月18日(土)～4月25日(火)
4	◎	風俗図 〔勅使参詣〕	4面	名古屋城本丸御殿対面所次之間西 側襖 35	慶長19年 (1614)	名古屋城総合事務所	4月26日(水)～6月18日(日)
5	◎	風俗図 〔石投〕	4面	名古屋城本丸御殿対面所次之間南 側障子腰貼付絵 38	慶長19年 (1614)	名古屋城総合事務所	4月26日(水)～6月18日(日)
6	◎	風俗図 〔風呂屋・刈入〕	2面	名古屋城本丸御殿対面所上段之間 南側障子腰貼付絵 39	慶長19年 (1614)	名古屋城総合事務所	4月26日(水)～6月18日(日)
7	◎	芦雁図	4面	名古屋城本丸御殿対面所上段之間 違棚天袋襖 37	慶長19年 (1614)	名古屋城総合事務所	右2面5月16日(火)～6月18日(日) 左2面3月18日(土)～4月25日(火)
8		長谷寺観桜図屏風	二曲一隻		江戸時代前期		3月18日(土)～5月15日(月)
9		社頭風俗図屏風	二曲一隻		江戸時代前期		3月18日(土)～4月25日(火)
10		風俗図 〔綱引図・双六図〕	2幅		江戸時代前期	名古屋市博物館	綱引図3月18日(土)～4月25日(火) 双六図4月26日(水)～6月18日(日)
11		葵紋黒漆塗唐草文 金蒔絵女乗物	1挺		江戸時代後期	名古屋城総合事務所	3月18日(土)～6月18日(日)
12		黒漆塗葵紋裏菊紋 梨地蒔絵長持	1棹	松山カーテン株式会社寄贈	江戸時代前期	名古屋城総合事務所	3月18日(土)～6月18日(日)
13		黒漆塗葵紋若松唐 草模様蒔絵長持	1棹		江戸時代後期	名古屋城振興協会	3月18日(土)～6月18日(日)
14		稲富流砲術伝書	21冊1巻中 19冊1巻		慶長5年 (1600) 他	岐阜関ヶ原古戦場記念館	3月18日(土)～6月18日(日) * 4月25日(火)冊を入替
15		秘書 敬公実録	9冊中 第1冊		江戸時代後期写	名古屋東照宮	4月26日(水)～6月18日(日)
16		紅地松皮菱枝垂桜 御所車唐織	1領	生駒里翠氏寄贈	平成元年7月	名古屋城総合事務所	3月18日(土)～6月18日(日)

◎重要文化財

(2) 企画展「尾張ゆかりの甲冑・刀剣」

会期 令和5年(2023)6月26日(月)～9月3日(日) 70日間

入館者数 35,450人(1日平均1,143.5人)

出品件数 45件

展示担当 原史彦

趣旨

甲冑・刀剣は武士にとって必須の備え武具であると同時に、武家の格式を示す道具です。甲冑は機能性や防御性を重視しつつ、戦場での識別を兼ねて個性的な造形が施された他、刀剣は製作した刀工や工芸品としての優劣に基づき贈答用としても用いられたため、泰平の世でも優れた甲冑・刀剣が製作・伝承されました。尾張徳川家が治めた濃尾の地においても、御三家筆頭の領地に相応しい甲冑・刀剣の優品が伝えられています。本展覧会では、名古屋城コレクションの中で、尾張ゆかりの甲冑・刀剣を中心に、武家の備えの美を紹介します。

作品解説

1 紺糸威二枚胴具足 附 鉄錆地六十二間筋兜 丹羽家伝来 兜：室町時代 天文2年(1533) 胴：江戸時代 17世紀

全体を紺糸で威して色彩を統一し、金具も丁寧な造りとした上級武士の具足である。兜の前立は鯨を象り、尾張名古屋に相応しい意匠とするが、後補の可能性もある。胴裏に金工師・市口河内による宝永元年(1704)の修理銘、兜の鉢裏に天文2年(1533)の製作銘がある。

2 勝色糸威胴丸具足 附 鉄地金箔貼変り兜 赤目横井家伝来 兜：明珍政家作 桃山時代 天正4年(1576) 胴：江戸時代 17世紀

胴を金箔革張り、兜を金箔貼りとした豪華な仕立てとする。赤目横井家は鎌倉幕府執権・北条家の末裔という由緒を持ち、室町時代より赤目の地(現・愛知県愛西市西部)を領した。尾張藩では重職を歴任した名家である。勝色とは暗い紺色のことで、縁起の良い名の色として武家に好まれた。袖・杏葉・佩楯は後補。兜の鉢裏に製作銘がある。

3 紺糸素懸威五枚胴具足 附 鉄錆地三十二間星兜 明珍宗胤作 鳥居高次着用 江戸時代 弘化3年(1846)

幕末の名工・明珍宗胤作の具足で、胴の正面向かって左側に「日本唯一甲冑良工」と自負する宗胤による銘、右側に鳥居高次なる武士の注文によって製作されたことが記される。袖にも製作年・製作者の銘がある。製作年・着用者が明示される具足は珍しい。

4 梨子地竹に雀紋散時絵糸巻太刀拵 江戸時代 19世紀 木子コレクション

糸巻拵とは、柄と鞘の上部を同じ素材の組紐で巻いた太刀拵で、15世紀中ごろより製作された形式である。鞘には梨子地で表裏に竹に雀紋を6個ずつ時絵であしらひ、金具にも竹に雀紋を散らす。太刀拵は馬上で使用することを目的に、帯取と呼ばれる紐で腰に吊るし、刃は下向きとなる。16世紀末の桃山時代以降は、主に大名の儀式で使用され、豪華な造りの拵がつくられるようになった。

5 丸に花菱紋・南天車紋時絵柄采配 有浦元左衛門所用 江戸時代 18～19世紀

黒漆の柄に家紋を時絵で施し、細く切った金箔張りの厚紙を束ね、銀の金具で装飾した豪華な造りの采配である。采配は戦場における指揮具の一つで、軍勢の大將が所持した。采配を振ることで、軍勢を動かす合図としたことから、人に命令して事業を展開する事を、現在でも「采配を振る」と形容する。小田原藩士の有浦家に伝来した一品である。

6 黒漆塗十二間総覆輪筋兜 伝明珍宗安作 石河家伝来 南北朝時代 14世紀

尾張藩家老職を歴任し、美濃国駒塚(現・岐阜県羽島市)を本拠として1万石を領した石河家伝来の兜である。吹返を大きくとった古式の筋兜で、鉢の筋は金板で覆い、鍔に金革を貼る豪華な仕立てにする。胴は現存しない。石河家は、尾張徳川家初代義直の生母で徳川家康の側室・相応院お亀の方ゆかりの家として、尾張藩では重臣として取り立てられた。眉庇裏に、江戸時代前期の甲冑師・明珍宗介による朱書があり、明珍家10代の宗安作と極めている。

7 鉄鍔地置手拭形兜 春田辰到作 江戸時代 18世紀

戦国時代末頃より流行した変わり兜の一つである。手拭を置いた形を象っている。戦場での活躍をより一層際立たせるため、武将たちは伝統的な兜の造形を脱して、装飾的かつ個性豊かな兜を着用するようになった。江戸時代中期の甲冑師・春田辰到の作とする銘が鉢裏にある。

8 黒漆塗鉢巻形兜 江戸時代 18世紀

戦国時代末頃より流行した変わり兜の一つである。鉢巻を頭上で絞った造形とする。鉄鉢の上に木ないしは紙で鉢巻の形を作り、漆で塗り固めているため、見かけよりは軽量に作られている。戦場での手柄は自己申告だけでは認めてもらえず、首を取ったとしても、第三者による証明を必要としたため、自分の活躍を誇示する上でも、戦場で目立つ格好が求められた。そういった世情を反映し、徐々に個性豊かな変わり兜が産み出されていった。

9 総面 伝明珍信家作 江戸時代 18～19世紀

面部・喉及び頭頂部を防御する防具である。鎧兜を着用した際、面部の防御が手薄となるため、顔面や喉を保護する上で、面頬と呼ばれる防具を着用する場合があるが、面部全体と頭頂部までを覆う防具は珍しい。顎下に武田信玄の甲冑師・明珍信家の作とする朱書があるが確証は無く、装飾性が加味されているところから、江戸時代の作と考えられる。

10 面頬 石河家伝来 江戸時代 18世紀

甲冑を着用した際、防御が手薄となる顔面及び喉を保護する防具である。顔面全体を覆うと視界が狭まるため、目の下までを保護する目の下頬とも称される本作の形式が一般的である。尾張藩家老職を歴任した石河家伝来の道具で、本来は甲冑に附属する品だが、本体の甲冑は失われている。

11 半頬 江戸時代 19世紀

甲冑を着用した際、防御が手薄となる顔面及び喉を保護する防具である。通常は目より下の顔面を覆う面頬（目の下頬）が一般的だが、顎と喉のみを防御する本作のような形式も存在する。通常の面頬に比べ防御する面が半分のため半頬（顎下頬）とも称する。面頬類の顎下には汗を抜く孔が開けられている。

12 鎖頭巾 江戸時代 19世紀

頭部及び首筋を防御する防具である。麻裂の中は鎖が編まれて、全体を覆うように作られているため、刀で裂を切断させることは難しい。細かい鎖を使用するため重量は抑えられているが、胴体を覆う鎖帷子と対で着用した場合、相応の重量になる。

13 短刀 無銘 附 梨子地葵紋蒔絵合口拵 短刀：伝徳川家康所持 江戸時代 17世紀 拵：伝尾張徳川家伝来 江戸時代 17世紀 加藤千博氏寄贈

某華族家伝来の刀剣で、尾張徳川家より明治天皇へ献上された徳川家康所用刀との伝承がある。目貫は近代の後補だが、拵の作りや小柄・拵は優品で尾張徳川家伝来は頷けるが、刀剣とともに後代の作と考えられるため、家康所持とは言い難い。刀剣の茎（柄）の部分の朱書文字は、「康継」と記されていたと記録されるものの、作風は康継と異なる。刀身の表には摩利支天、裏には不動明王の彫り物が施されている。

14 刀 無銘 江戸時代 17世紀 木子コレクション

刃文は沸付で兼房風の互の目文を焼き、肌が美しい刀剣だが、2回ほど区送りして切り詰めた形跡がある。寛永年間(1624～44)頃の肥前国の伊予掾宗次か出羽大掾行広の作風に似る反面、美濃・尾張系統の氏房系統の作風、ないしは慶長年間(1596～1615)頃的美濃関の刀工に類する作風との指摘もあり、作刀工については見解が分かれる。今後の検討が待たれる優品である。

15 短刀 銘 若狭守氏房作/天正三年五月日 桃山時代 天正 3 年(1575) 木子コレクション

若狭守氏房は織田信長の御用鍛冶を勤めた刀工である。美濃国関(現・岐阜県)の鍛冶で岐阜城下において鍛刀したと伝わる。本作が作られた天正 3 年(1575)は、信長は長篠合戦で武田勝頼勢に勝利し、右近衛大将に任じられた年である。

子の飛騨守氏房は、信長歿後に尾張国（現・愛知県）を領した豊臣秀次に仕え、相模守政常・伯耆守信高とともに「尾張三作」と讃えられる名工となった。記年銘がある氏房作刀剣の中では最古級である。

16 脇指 銘 相模守藤原政常 江戸時代 17世紀

相模守政常は、「尾張三作」の一人と讃えられた名工である。幕末まで10代を数え、尾張藩の御用鍛冶を勤めた。初代政常（生年未詳～1619）は、美濃関の刀工・兼常の門人で、福島正則の御抱刀工となって尾張へ移住し、正則が安芸国へ転封になった後は、徳川家康の4男・松平忠吉の御抱刀工を経て、尾張徳川家初代義直の御抱刀工となった。本作は初代の銘とはやや異なるため、2代政常（生年未詳～1609）作の可能性はある。

17 脇指 銘 伯耆守藤原信高 附 蠟色塗脇指拵 松平六左衛門所持 脇指・拵：桃山時代 16世紀

伯耆守信高は、「尾張三作」の一人と讃えられた名工である。徳川家康の4男・松平忠吉の御抱刀工となった後、尾張徳川家の御抱刀工となった。本作は松平忠吉の家臣・松平六左衛門が関ヶ原合戦での戦功により忠吉から拝領したという伝承がある。この真偽は不明だが、拵は三双葵紋小柄・桐紋散赤銅鍔・桐紋散縁及び頭など良質の刀装具が附属する優品で、忠吉下賜の伝承も頷ける。

18 太刀 無銘 附 白檀塗唐草文太刀拵 石河家伝来 刀：室町時代 16世紀 拵：江戸時代 19世紀

尾張藩で家老職を歴任した石河家伝来の太刀である。大磨上で銘を欠き、切先も研ぎ減らしがあって、折れた可能性も指摘されている。元の形状は太刀だったとも考えられる。鎬も高めで、美濃関の刀工・陸奥守大道作とも考えられるが、今後の検討を要する。拵は、透明な漆で下地の模様を浮き上がらせる白檀塗の技法で装飾されている。

19 脇指 銘 来国治 江戸時代 18世紀 木子コレクション

尾張藩の御用を勤め、名古屋城下御深井御庭で鍛刀した事を示す「御深井国治」とも称された名工・来国治作の脇指である。国治は美濃国上有知（岐阜県美濃市）の出身で、相模守政常の門人として、はじめは「秀辰」と称し、「山城守」を受領した後、大坂で鍛刀した。後年、名古屋に戻り「来国治」と改名し、切れ味に定評のある作品を産み出した。本作は、兼房丁子を思わせる華麗な刃文を焼く優品である。

20 短刀 銘 尾張国政秀/青山永隆之好依作之/慶応二年丙寅三月日 江戸時代 慶応2年（1866）木子コレクション

政秀は尾張国の刀工とする以外の情報は乏しく、来歴は不明だが、いくつかの作例は確認されている。本作は、板目肌に喰違刃が混じる細直刃の刃文を焼き、淡く棒映りが立つ優品で、青山永隆なる人物の注文によって作刀された事や、作刀年が記されており、史料的に貴重である。

21 刀 銘 尾州住登竜子晴英作/明治元辰十一月吉日 近代 明治元年（1868）木子コレクション

作刀例の少ない刀工・晴英の作品で、大切先に作る勇壮な姿の刀である。これまで晴英の活動地は不明とされていたが、本作の銘により尾張国の刀工だったことが確認された。明治改元の2ヶ月後に作刀されており、日本刀が常用された時代の最後期を飾る一品である。

22 笹穂槍 銘 大和守源康道 尾張藩士蘿木家伝来 江戸時代 17世紀

尾張徳川家初代義直の時より御馬廻役などを勤め、250石を領した蘿木家伝来の槍である。蘿木家は武田家旧臣で、武田家時代は「武川」と称し、武田家滅亡後に家康に仕えて、「蘿木」と改姓した。本作は両面を鎬造とする珍しい形状で、その姿が笹の形に似ることから笹穂槍と称される。大和守源康道は、寛文年間（1661～74）頃的美濃国関の刀工で、尾張国での活動も確認できる。

23 兜割 江戸時代 19世紀

「切る」のではなく「叩く」ことを目的とした武具で、主に捕り物などで使用された道具である。刀剣形で反りもつけられているが、刃は入れられておらず、打撃を意図した武具である。刀を折り兜すらも割る威力を出すことができる。

24 十手 江戸時代 19世紀 木子コレクション

江戸時代の捕り物で使用された武器である。捕り物道具である「兜割」から派生した道具で、持ち手近くに鉤が付くのが特徴である。鉤で刃を受け止め絡め捕る事ができ、突く・叩く・押さえつけるといった用法で相手を制圧した。十本の手の役割をするという意味で「十手」と称されている。捕り物道具であると同時に、江戸町奉行所与力・同心の身分の証でもある。与力・同心以外でも、同心配下の小者の内、特別に許可された者だけが十手を所持できた。

25 鎖鎌 江戸時代 19世紀 木子コレクション

本来は農具である鎌を攻撃・護身用として発達させた武器である。鎌の柄尻から長さ 2 ～ 4 メートル程の鎖で分銅と繋ぎ、分銅を投げて相手に打撃を与えるか、鎖を絡めた後に鎌で攻撃する。一定の攻撃力はあるものの、相手に鎖を捕まれた場合の対処法や、投げた鎖の回収に時間を要するといった点で難がある武器である。本作の鎖は近代の補作である。

26 鉄杖 尾張藩士丹羽氏長所用 江戸時代 18～19世紀

知新流手裏剣術の一派・丹羽流を創出し、その師範として尾張藩に仕えた丹羽氏長（1731～1811）所持の鉄杖である。打撃を与える武器としても使用できる。火縄銃の銃身を改造して杖状としているため、長さ108cm・上部の径2.5cm、下部の径1.8cmほどだが、重さは2.3kgあり、見た目以上の重量がある。丹羽氏長はこの重量級の杖を70歳過ぎても使用し続けたと、丹羽家の家伝で語り継がれている。

27 手裏剣 尾張藩士丹羽家伝来 江戸時代 19世紀

知新流手裏剣術師範として尾張藩に仕え、丹羽流を創出した丹羽家伝来の手裏剣である。手裏剣の形は流派によって異なり、知新流は棒手裏剣を用いた。手裏剣術を伝える刀剣流派は記録上53流派を数え、その内、手裏剣術を主とする流派だけでも11派を数える。丹羽流は手裏剣術を主とする流派である。至近距離からの打撃では鎧を貫通させるほどの威力を発揮するものの、知新流では手裏剣は鎧武者に用いるのではなく、山賊などに襲われた際、機先を制するために用いると説く。

28 知新流手裏剣目録写 尾張藩士丹羽家伝来 江戸時代 19世紀

知新流の一派・丹羽流手裏剣術の免許皆伝者に与えられる目録の写しである。流派が求める一定の技量を取得したことを証する内容だが、その奥義は口伝とする。目録末には奥義継承者名が記されており、長久手合戦時に岩崎城を守った丹羽氏の分家筋にあたる丹羽織江（氏張）が知新流を取得し、その息子・丹羽周太郎（氏長）が尾張藩の手裏剣術師範となり、寛政3年（1791）に正式に150石を与えられて尾張藩士に取り立てられた。筆頭に記される飯嶋市兵衛は、宮本武蔵の弟子・竹村與右衛門から術を授けられたと、知新流では伝えている。

29 丹羽家家宅絵図控 尾張藩士丹羽家伝来 江戸時代 19世紀

知新流の一派・丹羽流手裏剣術を尾張藩で伝えた丹羽家の屋敷図である。丹羽家は正式に藩士に取り立てられる以前から、伏見下（現・名古屋市中区白川公園南西部付近）に屋敷を与えられており、「屋敷改帳」によれば、西側の伏見町筋に冠木門（図中では「惣門」）を開く270坪の敷地であった。居住区域は西側の門に続く座敷部と、北側に風呂・厠の2棟が建つ簡素な屋敷で、敷地の半分は畑となっており、その一角の中央部南側に手裏剣術の「稽古場」があったことが判る。寛政3年（1791）には尾張徳川家9代宗睦や、付家老の犬山成瀬家6代正典がこの屋敷へ武芸上覧に訪れた記録も遺されている。

30 黒漆塗鞠挟に山字紋散蒔絵刀筒 江戸時代 19世紀 木子コレクション

刀袋に入れた刀を収納し、運搬する道具である。合口蓋とし、蓋は施錠できる。所有者の家紋と思われる鞠挟に山字紋を蒔絵で散らす。鞠挟は、蹴鞠の鞠の形状が崩れないように挟む板状の道具で、紋のように鋭く尖ってはいないが、形状に雅味があるため、家紋の意匠に取り入れられることもあった。中央に山の字を入れた鞠挟紋は他に例を見ないものの、この紋を使用した家は判明していない。

31 青貝螺鈿蒔絵刀筒 江戸時代 19世紀

刀袋に入れた刀を収納し、運搬する道具である。鐔にあたる部分に膨らみをもたせ、被蓋とした刀筒である。蓋は施錠できる。全体に青貝片を蒔いて華麗に装飾した刀筒で、家紋はあしらわれていない。刀筒は、参勤交代などで複数の刀を運搬

する大名級武士に特有の道具で、家紋を付けて所有者を明確にする作例が多い中、本作のように装飾的な作例も見られる。

32 朱漆塗刀箱 江戸時代 18～19世紀 木子コレクション

刀の保管・収納箱である。朱漆塗の箱の縁を丸く面取りして黒漆塗にするなど、丁寧な造りの箱である。内部は前後に受木を入れて、二段重ねに刀を収納できる仕組みとなっている。上段に5本、下段に4本の計9本の刀が収納でき、箱身の内面は更紗風の和紙を張る。一回り大きい刀用の箱もあり、2箱で一对とした。本箱は脇指用の収納箱と思われる。

33 織田信長画像摸本 中野鼓山筆 近代 昭和7年(1932) 原本：桃山時代 天正11年(1583) 愛知・長興寺蔵

織田信長(1534～82)が本能寺の変で自害した後、一周忌に際して信長の家臣だった与語(余語)正勝(生歿年未詳)により、与語(余語)氏の菩提寺である三河国高橋郡(現・愛知県豊田市)の長興寺に奉納された信長画像の摸本である。原本は国の重要文化財に指定されている。信長歿後すぐの製作であるため、信長の風貌をよく伝えている肖像とされ、原本の背面には狩野永徳の弟・狩野宗秀(1551～1601)の落款があるが、製作年・作者については異論がある。

34 豊臣秀吉画像摸本 護城鳳山筆 近代 昭和7年(1932) 原本：桃山時代 16世紀 愛知・妙興寺蔵

豊臣秀吉(1537～98)の権威をより視覚化させるため、周囲の室礼を豪華に描いた秀吉の画像で、原本は一宮(現・愛知県一宮市)の妙興寺に伝来し、愛知県指定文化財となっている。上部の賛は、秀吉が篤く敬った臨済宗の高僧・南化玄興(1538～1604)によって慶長5年(1600)に記されており、画像の製作年代もその頃と考えられる。寺伝では本図の作者を狩野山楽(1559～1635)とし、画像の表具は秀吉が着用した衣装で製作されたとするが、確証は無い。

35 徳川家康坐像 江戸時代 18世紀

歿後に「東照大権現」として神格化された徳川家康(1542～1616)の坐像である。像を納める小型の厨子も附属しており、家康を神として祀るどこかの東照宮にあった神像と考えられるが、名古屋市が所蔵する以前の伝来経緯は判らない。容貌は本人に似せるよりも、威儀ある姿とする事を重視している。着衣の黒袍には葵紋が浮き彫りされ、袴の文様も細かに描かれており、小型ながら丁寧に造られた像である。

36 徳川家康并十六将図 江戸時代 19世紀

徳川家康を武神、武神を守護する四天王・十二神将といった眷属に有力武將を見立てた作品で、江戸時代中頃より流行し、他にも武田家や上杉家といった戦国大名家でも同様に見立てられた。家康の場合は、酒井忠次・井伊直政・大久保忠世・平岩親吉・大久保忠佐(推定)・鳥居元忠・蜂屋貞次(推定)・米津常春(以上左列)、松平康忠・榊原康政・本多忠勝・高木清秀・内藤正成・鳥居直忠・渡邊守綱・服部正成を十六将とするが、蜂屋に代わり植村家存を入れる場合もある。

37 徳川家康并十六将図 江戸時代 19世紀

徳川家康を武神、武神を守護する四天王・十二神将といった眷属に有力武將を見立てた作品で、江戸時代中頃より流行し、他にも武田家や上杉家といった戦国大名家でも同様に見立てられた。家康の場合は、酒井忠次・井伊直政・平岩親吉・渡邊守綱・蜂屋貞次・米津常春(以上左列)、本多忠勝・鳥居元忠・内藤正成・服部正成(以上中列)、松平康忠・榊原康政・大久保忠世・高木清秀・大久保忠佐・鳥居直忠(以上右列)を十六将とするが、蜂屋に代わり植村家存を入れる場合もある。

参考 金陀美具足(徳川家康着用)模造 丸竹産業(現・丸武産業)作 近代 昭和62年(1987) 原品：桃山時代 16世紀 静岡・久能山東照宮蔵

桶狭間合戦の前哨戦において、徳川家康(当時は松平元康)が織田勢に包囲された大高城(名古屋市緑区)への兵糧入れを成功させた際、着用していたと伝わる具足の模造品である。今川義元より与えられた具足ともいわれる。原品は、家康の最初の墓所・久能山東照宮への奉納品で、国の重要文化財に指定されている。全体を金泥で装飾された極めて豪華な具足だが、桶狭間合戦が行われた永禄3年(1560)まで遡る具足では無いと考えられており、同合戦での着用は伝承に過ぎない。

参考 南蛮胴具足(徳川家康着用)模造 丸竹産業(現・丸武産業)作 近代 昭和62年(1987) 原品：桃山時代 16世紀 栃木・日光東照宮蔵

徳川家康が関ヶ原合戦で使用したと伝わる具足の模造品である。原品は、久能山東照宮(静岡市駿河区)より改葬された

家康の墓所があり、江戸幕府最高の霊地とされた日光東照宮への奉納品である。南蛮胴とは西洋から渡来した甲冑を日本式に改良した形式で、胴の中央部を盛り上げて山形とすることで、鉄炮の威力を軽減できた。豊臣秀吉の時代以降に使用され家康も愛好したが、織田信長の時代に日本に存在したのかについては、史料的な確認が取れない。

38 加藤清正画像摸本 護城鳳山筆 近代 昭和7年(1932) 原本：江戸時代 17世紀 京都・勸持院蔵

熱心な日蓮宗信者だった加藤清正(1562～1611)が、日蓮宗大本山本圀寺への参詣の折、宿坊としていた勸持院(京都市下京区)に伝わった画像の摸本である。顎髭を蓄えた勇猛な面貌に、加藤家の家紋である桔梗を散らした小袖を着用する姿で描かれる。豊臣秀吉の小姓より出世して、肥後国熊本52万石の大大名となった加藤家は、2代忠広の代で改易となったが、清正の出世や武勇は庶民に親しまれ、「清正公」という神として崇められ続けた。

39 福島正則画像摸本 中野鼓山筆 近代 昭和7年(1932) 原本：江戸時代 17世紀 東京・個人蔵

豊臣秀吉の小姓より出世し、安芸国広島49万8千石の大大名となった福島正則(1561～1624)の画像の摸本である。秀吉の甥・豊臣秀次が追放・切腹させられた後、秀次の領地だった尾張国の領主となる。関ヶ原合戦では家康勢の勝利に貢献するものの、元和5年(1619)の広島城修築時の不手際で、信濃国川中島4万5千石(後、2万石に減封)に減封され、歿後には遺体の無断火葬を咎められて福島家は取り潰された。正則遺品が伝わらない中、残された数少ない画像として貴重である。

40 浅野長政画像摸本 護城鳳山筆 近代 昭和7年(1932) 原本：江戸時代 17世紀 東京・個人蔵

豊臣政権で五奉行の一人として行政手腕を発揮した浅野長政(1547～1611)の画像の摸本である。この摸本は、長政の末裔である浅野侯爵家より昭和18年(1933)に名古屋市が寄贈を受けた。長政は浅野長勝の娘を娶っており、同じく長勝の養女・寧を娶った豊臣秀吉とは義理の兄弟にあたる。同じ五奉行の石田三成との関係は良好ではなかったため、関ヶ原合戦時は家康を支持し、戦後浅野家は紀伊国和歌山37万石の大大名となった。

41 関ヶ原合戦絵巻 江戸時代 天保2年(1831) 名古屋城振興協会蔵

関ヶ原合戦の前哨戦となる上杉攻めより合戦終了までを時系列的に描いた絵巻で、2巻本と岐阜城攻めを描く4巻本があり、本絵巻は2巻本だが上巻を欠く。徳川家康の姿は描かず、旗指物などでその存在を暗示する。本絵巻は上杉攻めの小山評定の場合より始まり、真田家の離反・合渡川の渡河・岡山着陣・上田城攻め・関ヶ原本戦の場面を描く。展示の場面は、①関ヶ原に着陣した西軍諸将の陣の場面で、中央に石田三成の姿が描かれている。②関ヶ原に着陣した東軍諸将の陣の場面で、左端に徳川家康の金扇馬標が描かれている。③関ヶ原合戦の最終局面で、敵中突破を図った島津勢を松平忠吉・井伊直政勢が猛迫している場面を描く。④関ヶ原合戦の最終局面で、盲目の武将・大谷吉継自害の場面と、吉継の首をめぐる攻防の場面を描く。

42 義家朝臣鎧着用次第 18面の内 伊勢貞丈筆 江戸時代 安永9年(1780)

武家の棟梁「八幡太郎」として崇められ、源氏の祖として伝説化された源義家(1039～1106)を模範として、古式鎧の着用方法を図示した武家故実書(先例心得)である。作者の伊勢貞丈(1717～84)は、室町幕府政所職を務めた伊勢家の末裔で、江戸幕府では武家の礼法を伝える役目を担った。18世紀前後に古い時代の復古的な甲冑が人気となったため、こういった故実書が作られ、人気を博したと考えられる。

43 刀鍛冶図絵馬 江戸時代 19世紀

刀の鍛刀場面を描く絵馬である。絵馬は神社や寺院に祈願、ないしは祈願成就の礼として奉納する木製板で、もともとは神の乗物である馬の代わりに馬の絵を奉納したのを語源とし、室町時代後期より馬に限らず様々な絵が描かれるようになった。この絵馬も刀鍛冶技量の向上を祈願するために奉納したのであろう。刀匠による鍛錬の傍らで、刀匠の指示に基づき相槌を打つ先手、右側には鋼を熱する火床に風を送る手動の差し鞆が描かれる。

木子コレクション

名古屋市で飲食店を営んだ木子進發氏が蒐集した刀剣・刀装具コレクションで、刀剣類267点(太刀3振・刀136振・脇指100振・短刀21振・薙刀2振・長巻1振・槍1本・小刀3振)、拵205点(太刀拵5口・刀拵65口・脇指拵64口・短刀

展示風景

特記のないものは名古屋城総合事務所蔵



チラシ



西の丸御蔵城宝館企画展
「尾張ゆかりの甲冑・刀剣」

出品目録

会期：令和5年6月26日（月）～9月3日（日）



甲冑・刀剣は武士にとって必須の備え武具であると同時に、武家の格式を示す道具です。甲冑は機能性や防御性を重視しつつ、戦場での識別を兼ねて個性的な造形が施された他、刀剣は製作した刀工や工芸品としての優劣に基づき贈答用としても用いられたため、泰平の世でも優れた甲冑・刀剣が製作・伝承されました。尾張徳川家が治めた濃尾の地においても、御三家筆頭の領地に相応しい甲冑・刀剣の優品が伝えられています。本展覧会では、名古屋城コレクションの中で、尾張ゆかりの甲冑・刀剣を中心に、武家の備えの美を紹介します。

展示期間 A：6/29～7/31 B：8/1～9/3 表記無しは通期

	名称	作者・所用者	員数	製作年代	備考・所蔵	展示期間
1	紺系威二枚胴具足 鉄錆地六十二間筋兜	丹羽家伝来	1領 1頭	江戸時代 室町時代	17世紀 天文2年(1532)	
2	勝色系威胴丸具足 鉄地金箔貼変り兜	赤目横井家伝来 兜：明珍政家作	1領 1頭	江戸時代 桃山時代	17世紀 天正4年(1576)	
3	紺系素懸威五枚胴具足 鉄錆地三十二間筋星兜	鳥居高次所用 明珍宗胤作	1領 1頭	江戸時代	弘化3年(1846)	
4	梨子地竹に雀紋散蒔絵系巻太刀拵		1口	江戸時代	18世紀	木子コレクション
5	丸に花菱紋・南天車紋蒔絵柄采配	有浦元左衛門所用	1握	江戸時代	18-19世紀	
6	黒漆塗十二間総覆輪筋兜	伝明珍宗安作・石河家伝来	1頭	南北朝時代	14世紀	
7	鉄錆地置手拭形兜	春田辰到作	1頭	江戸時代	18世紀	
8	黒漆塗鉢巻形兜		1頭	江戸時代	18世紀	
9	総面	伝明珍信家作	1頭	江戸時代	18-19世紀	
10	面頬	石河家伝来	1面	江戸時代	18世紀	
11	半頬		1面	江戸時代	19世紀	
12	鎖頭巾		1頭	江戸時代	19世紀	
13	短刀 無銘 梨子地葵紋蒔絵合口拵	伝徳川家康所持 伝尾張徳川家伝来	1振 1口	江戸時代 江戸時代	17世紀 17世紀	加藤千博氏寄贈
14	刀 無銘		1振	江戸時代	17世紀	木子コレクション
15	短刀 銘 若狭守氏房 天正三年五月日		1振	室町時代	天正3年(1575)	木子コレクション
16	脇指 銘 相模守藤原政常		1振	江戸時代	17世紀	木子コレクション
17	脇指 銘 伯耆守藤原信高 蠟色塗脇指拵	松平六左衛門所持	1振 1口	桃山時代 江戸時代	16世紀 17世紀	
18	太刀 無銘 白檀塗唐草文太刀拵	石河家伝来	1振 1口	室町時代 江戸時代	16世紀 19世紀	
19	脇指 銘 来国治		1振	江戸時代	18世紀	木子コレクション
20	短刀 銘 尾張国政秀 青山永隆之好依作之 慶応二年丙寅三月日		1振	江戸時代	慶応2年(1866)	木子コレクション
21	刀 銘 尾州住登竜子晴英作/明治元辰十一月吉日		1振	近代	明治元年(1868)	木子コレクション
22	笹穂槍 銘 大和守源康道	尾張藩士蘿木家伝来	1本	江戸時代	17世紀	
23	兜割		1握	江戸時代	19世紀	
24	十手		1握	江戸時代	19世紀	木子コレクション
25	鎖鎌		1式	江戸時代	19世紀	木子コレクション
26	鉄杖	尾張藩士丹羽氏長所用	1握	江戸時代	18-19世紀	
27	手裏剣	尾張藩士丹羽家伝来	2本	江戸時代	19世紀	
28	知新流手裏剣目録写	尾張藩士丹羽家伝来	1帖	江戸時代	19世紀	
29	丹羽家家宅絵図控	尾張藩士丹羽家伝来	1舗	江戸時代	19世紀	

30 黒漆塗鞠挟に山字紋散蒔絵刀筒		1合	江戸時代	19世紀	木子コレクション
31 青貝螺鈿蒔絵刀筒		1合	江戸時代	19世紀	
32 朱漆塗刀箱		1合	江戸時代	18-19世紀	木子コレクション
33 織田信長画像摸本	中尾鼓山筆	1幅	近代	昭和7年(1932)	愛知・長興寺原蔵品
34 豊臣秀吉画像摸本	護城鳳山筆	1幅	近代	昭和7年(1932)	愛知・妙興寺原蔵品
35 徳川家康坐像		1軀	江戸時代	18世紀	
36 徳川家康并十六将図		1幅	江戸時代	19世紀	A
37 徳川家康并十六将図		1幅	江戸時代	19世紀	B
参考 金陀美具足(徳川家康着用)模造	丸竹(武)産業作	1領	近代	昭和62年(1987)	静岡・久能山東照宮原蔵品
参考 南蛮胴具足(徳川家康着用)模造	丸竹(武)産業作	1領	近代	昭和62年(1987)	栃木・日光東照宮原蔵品
38 加藤清正画像摸本	護城鳳山筆	1幅	近代	昭和7年(1932)	京都・勤持院原蔵品
39 福島正則画像摸本	中野鼓山筆	1幅	近代	昭和7年(1932)	東京・個人原蔵品
40 浅野長政画像摸本	護城鳳山筆	1幅	近代	昭和7年(1932)	東京・個人原蔵品
41 関ヶ原合戦絵巻		1巻	江戸時代	天保2年(1831)	* 場面替
42 義家朝臣鎧着用次第	伊勢貞丈筆	18面の内	江戸時代	安永9年(1780)	
43 刀鍛冶図絵馬		1面	江戸時代	19世紀	

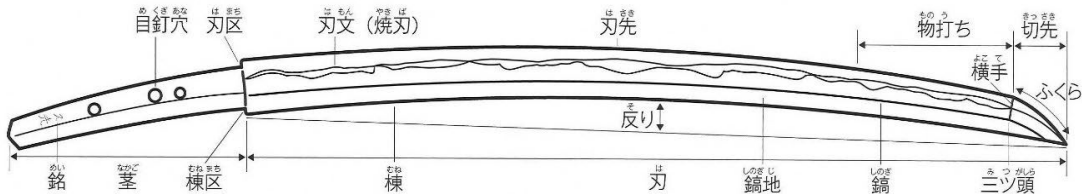
*は名古屋城振興協会の所蔵。その他の作品は全て名古屋城総合事務所の所蔵です。出品番号は展示順と異なります。

木子(きし)コレクション

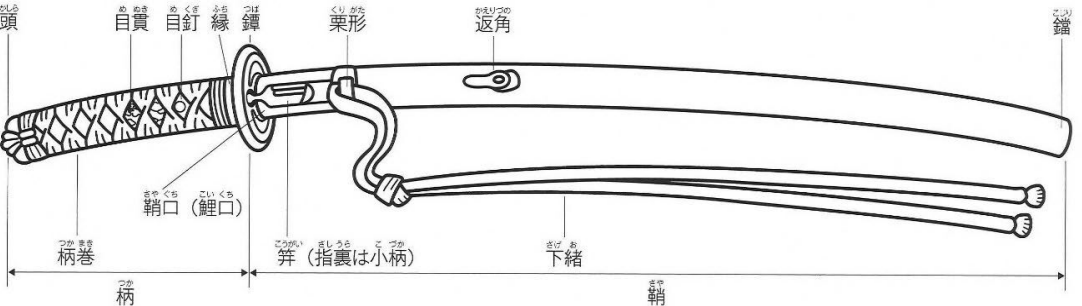
名古屋市で飲食店を営んだ木子進發氏が蒐集した刀剣・刀装具コレクションで、刀剣類267点〔太刀3振・刀136振・脇指100振・短刀21振・薙刀2振・長巻1振・槍1本・小刀3振〕、拵205点〔太刀拵5口・刀拵65口・脇指拵64口・短刀拵12口・槍拵1口・薙刀拵2口・長巻拵1口・軍刀拵8口・部品等47点〕、刀装具362点〔鐔(つば)264枚・鍔(はばき)21点・縁(ふち)及び頭(かしら)16組・縁24点・頭20点・目貫(めぬき)9点・小柄(こづか)3点・筭(こうがい)5点〕の他、刀道具等31点の総計865点に及ぶ一大コレクションである。進發氏の歿後、平成5年(1993)に名古屋市(名古屋城)に寄贈された。

刀図解

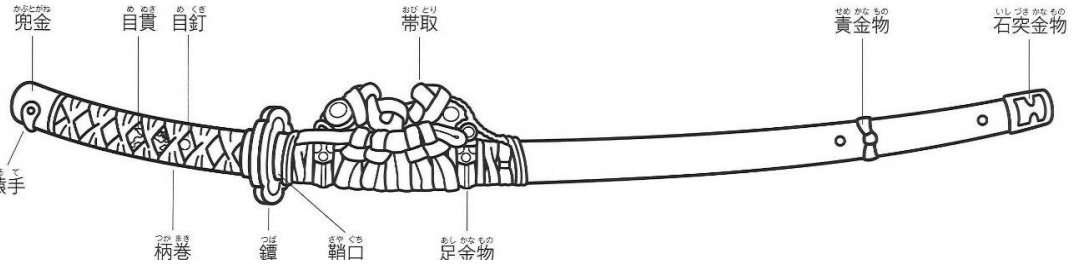
刀



刀拵



糸巻太刀拵



（３）企画展「文化財を受け継ぐ」

会期 令和５年（2023）９月９日（土）～10月９日（月・祝） 31日間

入館者数 32,215人（１日平均1,039.2人）

出品件数 22件

展示担当 角田美奈子

趣旨

名古屋城は、先の戦災で焼失した本丸御殿の障壁画をはじめとして、尾張徳川家やこれにゆかりのある近世武家文化に関する各種の資料を収蔵している。また、市民のみならずの協力によっても、名古屋城に関する資料の保全や調査研究と公開ができています。名古屋城で行われている文化財を受け継ぎ後世に伝える活動の一端を、寄託を含む名古屋城収蔵資料と公益財団法人日本美術刀剣保存協会の協力団体である名古屋支部の会員が所蔵する刀剣類で紹介した。刀剣類を第１部、収蔵資料を第２部とした。

作品解説

文章の改行・ルビ、挿入写真・図面は省略した。ここに収録しないパネル・キャプションもある。刀剣は公益財団法人日本美術刀剣保存協会名古屋支部から提供された情報に名古屋城調査研究センターが表記の統一などを行った。

第１部＝刀剣を受け継ぐ（「第47回 名古屋城刀剣展示会」）

明治維新や第二次世界大戦後の社会変革により、武器や格式の象徴としての役割を終えた刀剣は、武家をはじめとする所有者から手放され、美術工芸品として市民に受け継がれるようになります。昭和23年（1948）設立の日本美術刀剣保存協会名古屋支部は、同年設立の公益財団法人日本美術刀剣保存協会の協力団体であり、日本刀の保存と継承を目的とした活動を行っています。昭和34年（1959）に再建された名古屋城天守閣を会場にした「郷土の愛刀家百人展」などに昭和40年頃から継続して会員所有の刀剣類を出品しています。ここでは、名古屋城の展示活動にご協力いただいていた名古屋支部の活動を会員所有の刀剣類と資料で紹介します。

１ 短刀 銘 藤原貞清 黒呂塗龍文高時絵鞘出鮫合口拵 鎌倉時代 14世紀 大和国（保昌派） 刃長 7寸3分5厘（22.3cm）

大和鍛冶は鎌倉時代に僧兵の力が増すとともに各寺院のお抱え工として栄えた。この短刀は保昌派の伝統を顕著に示しており、鍛えは柃目肌、刃文は直刃を焼き、帽子は焼詰めて、映りが鮮明に表れている。光山押形所載。

２ 太刀 銘 家忠 金梨地鞘糸巻太刀拵 鎌倉時代 13世紀 備前国（古備前派） 刃長 2尺3寸7分（71.8cm）

鍛えは板目肌良く詰み、映りを表し、刃文は直刃仕立てに小丁子小乱れが交じる。太刀姿は優雅で、古い時代を感じさせる。現存する家忠作刀剣は極めて少なく、１振が重要文化財に指定されている。

３ 太刀 銘 長光 朱色鮫研出鞘打刀拵 鎌倉時代 13世紀 備前国（長船派） 刃長 2尺3寸4分（70.9cm）

長光は備前・長船派の２代目である。同派は皆名工揃いで、作品も多く残されている。この太刀の鍛えは板目肌に乱れ映りを表し、刃文は互の目に丁子を交えた長船派の典型である。長光作の刀剣は、国宝に６振、重要文化財に10振が指定されている。

４ 刀 無銘 安綱 黒呂塗鞘葵紋打刀拵 平安時代 10世紀 伯耆国 刃長 2尺3寸5分（71.2cm）

太刀であったが、室町時代に短くされ刀に改造された。寛文４年（1664）本阿弥光温が安綱と極めて金70枚の格付をしている。鍛えは板目良く詰み、刃文は大小の互の目に丁子交じりの華やかな出来である。５代將軍綱吉が元禄４年（1691）3月22日に柳沢吉保の江戸上屋敷へ御成を行った際に、綱吉から吉保に下賜された刀である。徳川実紀所載。

５ 短刀 銘 兼元（２代） 朱色金紛溜塗鞘葵紋出鮫合口拵 室町時代 16世紀 美濃国 刃長 8寸9分1厘（27.0cm）

兼元は美濃の代表刀工である。鍛えは板目に柃目肌が交じり、刃文は尖り互の目を３つ連ねて１つの互の目にした「関

の三本杉」と言われる有名な刃文である。この刃文は伊勢国・村正作刀剣にもあり、2代兼元との交流が考えられる。

6 刀 銘 越後守包貞（2代）茶色塗鞘打刀拵 江戸時代 17世紀 摂津国 刃長 2尺2寸9分（69.4cm）

2代包貞は美濃・照門の一門で、大坂に出て初代包貞の門人となり、後に養子となる。初銘を輝包という。鍛えは杢目肌がよく詰み、小沸の大湾れの刃文をゆったりと焼く。延宝8年（1680）頃から坂倉言之進照包と改名しており、天和4年（1684）より坂倉越後守照包と刻銘している。

7 脇差 銘 綱廣（3代）朱菊判変り塗鞘小さ刀拵 桃山～江戸時代 16～17世紀 相模国 刃長 1尺2寸4分（37.6cm）

初代綱廣は初銘を正廣といい、北条氏綱に召出されて小田原で鍛刀し、氏綱より綱の一字を賜り綱廣と改名したと伝えられる。3代綱廣は鎌倉扇ヶ谷に住した。鍛えは板目肌に匂口の締った大互の目を焼き、華やかな出来である。3代綱廣は慶長10年（1605）津軽藩からの依頼で300腰を作刀した記録がある。

8 刀 銘 飛騨守藤原朝臣氏房 黒呂塗鞘打刀拵 桃山～江戸時代 16～17世紀 尾張国 刃長 2尺3寸2分（70.3cm）

氏房は美濃鍛冶・若狭守氏房の子で、天正20年（1592）に関白豊臣秀次の斡旋で飛騨守を受領した。清須に住し、慶長15年（1610）の名古屋城築城に伴い城下に移住した。刃文は沸出来の広直刃で、働きの豊富な出来であり、鍛えは杢目肌良く詰んで美麗である。

9 脇差 銘 於南紀重国造之 朱色塗鞘小さ刀拵 桃山～江戸時代 16～17世紀 紀伊国 刃長 1尺2寸9分（39.1cm）

重国は大和・手搔派の末葉で、駿府の徳川家康に召されお抱え工となり、駿府での作刀も現存する。元和5年（1619）徳川頼宣の転封に伴い紀伊和歌山に移る。作風には大和伝と相州伝がある。この脇差は相州伝で沸の豊富な直刃仕立ての刃文であり、刃文の元から先に従い焼が広くなり、覇気ある出来である。

10 短刀 銘 播磨守輝廣作（2代）黒呂塗鞘合口拵 桃山～江戸時代 16～17世紀 安芸国 刃長 9寸4分7厘（28.7cm）

慶長6年（1601）福島正則の転封により、初代輝廣と共に清須より広島に移る。初銘を兼久という。慶長5年（1600）に「播磨守輝廣」と刻名した作刀がある。鍛えは小板目良く詰み、刃文は直刃に小互の目小足入る出来である。輝廣作の短刀で鶴首造は珍しい。

※第1部はすべて日本美術刀剣保存協会名古屋支部会員蔵

第2部= 思いを受け継ぐ

名古屋城の天守と本丸御殿は、第二次世界大戦の空襲により、昭和20年（1945）5月14日に焼失しました。名古屋城に受け継がれている重要文化財の本丸御殿障壁画は、同年の3月末以降に御殿から取り外され、城内の別の場所で保管されていたことから、焼失を免れました。焼け残った銅瓦や飾り金具、釘などは拾い集められ、保存されています。これらは、損傷しているものの、当時の国宝だった天守や本丸御殿などの建造物の一部であり、障壁画と同様に貴重なものです。一般財団法人名古屋城振興協会は、天守閣が再建された昭和34年（1959）に名古屋城の振興を目的として設立されました。城内の施設運営と案内業務のほか、名古屋城に関する資料の収集と魅力を紹介する普及活動を行っています。収集資料は名古屋市（名古屋城総合事務所）に寄託され、展示や調査研究に活用されています。ここでは、名古屋城を守り、後世に伝える活動を、名古屋城総合事務所が収蔵する資料によって紹介します。

1-1 名古屋城古釘転用火箸 3組 江戸時代/昭和時代 名古屋城総合事務所蔵 松山カーテン株式会社寄贈

1-2 名古屋城古釘転用火箸 5本 江戸時代/昭和時代 名古屋城総合事務所蔵 松山カーテン株式会社寄贈

松山氏が入手した約600本の瓦釘のうち、240組480本が箱入り火箸となりました。名古屋城へは箱なしの火箸50組100本と加工が終わっていない23本が昨年度に寄贈されました。ここでは、その一部を紹介します。

2 瓦釘火箸 1組 江戸時代/昭和時代 名古屋城総合事務所蔵 松山カーテン株式会社寄贈

火箸の箱書きは、茶道松尾流10代松尾宗吾（不染斎）と尾張徳川家19代徳川義親によるものの2種があります。名古屋

城は徳川義親箱書きの火箸3組を別途寄贈により所蔵しています。うち2組は、蓋の巻紙に指物師の長谷川甫斎の朱印があります。甫斎は不染斎と親しく、そのため箱作りを任されたと思われます。

補助解説「名古屋城古釘転用火箸」

屋根に瓦を固定するための釘（瓦釘）を茶道で用いる火箸にしたものです。松山民右衛門氏が名古屋城再建の寄付事業に役立てようと作成しました。松山氏によると、戦後間もない頃、名古屋市は名古屋城の焼け残りを整理した際に一部を民間に払い下げましたが、払い下げを受けたなかに瓦釘が含まれていたそうです。名古屋城天守の再建を望む声は戦後間もなくからあり、昭和29年（1954）頃から市民の自発的な募金活動が行われています。天守閣の再建工事は昭和32年（1957）6月に始まり、昭和34年（1959）10月1日に完成式が行われました。一般への公開は10月3日からです。火箸となった瓦釘は、焼失前の名古屋城の建物の一部であり、貴重です。

補助解説「再建天守閣への金鯢据え付け」

昭和34年（1959）8月5日に行われた雌鯢の天守閣への据え付け作業の様子です。鯢は傷がつかないように晒で巻かれ、鰭の一部が取り外されています。鉄棒に固定された鯢は、天守閣上の足場に10分でつり上げられました。雄は6日に行われ、外した鰭の取り付けなどの作業が7日まで続けました。

3 名古屋離宮城之図 1枚 後藤彦右エ門 明治29年（1896）名古屋城振興協会所蔵 名古屋城総合事務所寄託

この版画では、西北側から見た天守と右下に西北隅櫓の屋根が描かれ、その上の枠内に金鯢の大きさが記されています。右上の枠内には、名古屋城と同様に国宝だった名古屋東照宮の唐門と拝殿が描かれています。三の丸にあった名古屋東照宮は、明治9年（1876）に三の丸に隣接する現在地に移転しています。御祭神の徳川家康の命日（4月17日）に催される東照宮の祭礼は多くの市民で賑わいましたが、近くにある離宮に入ることはできず、昭和6年（1931）の公開まで天守や御殿は石垣外から眺めるしかありませんでした。このような版画は、当時の人々がどのように名古屋城の情報を得て、楽しんでいたかを知らせてくれます。

4-1 名古屋城古写真 1枚 明治時代 名古屋城振興協会所蔵 名古屋城総合事務所寄託

本丸表二之門の外、南東から撮影されています。中央奥に金鯢のある天守が写っています。天守の金鯢は明治4年（1871）4月から明治12年（1879）2月まで取り外されていました。石垣上の多門櫓は明治24年（1891）の濃尾地震後に取り払われています。これらから、明治12年（1879）から明治24年（1891）の間に撮影されたと思われます。

4-2 名古屋城古写真 1枚 明治時代 名古屋城振興協会所蔵 名古屋城総合事務所寄託

御鷹部屋があり武家地だった西側の水堀対岸から撮影されています。中央左奥に写る天守の右が西之丸、左が御深井丸で、西之丸には月見櫓が残っています。陸軍は、石垣上にあった堀を明治6年（1873）頃から取り去りました。西之丸と御深井丸にあった建物が石垣越しに写っています。明治4年（1871）4月から明治12年（1879）2月まで、金鯢は天守にありませんでした。撮影は、金鯢が天守に戻った後と思われます。

4-3 名古屋城古写真 1枚 明治時代 名古屋城振興協会所蔵 名古屋城総合事務所寄託

天守を本丸東南から撮影しています。左に小天守、その下に本丸御殿の上台所と下御膳所が写っています。手前の屋根は明治になって設けられた倉庫です。撮影は、上台所の屋根のかたちから、改装された明治20年（1887）頃より後と思われます。

補助解説「名古屋城の資料」

尾張藩のもとにあった名古屋城は、明治維新を経て、明治5年（1872）から陸軍の管理となり、明治26年（1893）からは本丸などが宮内省管理の名古屋離宮となりました。名古屋離宮は、昭和5年（1930）に名古屋市に下賜され、翌昭和6年（1931）から公開されます。名古屋城総合事務所（以下、総合事務所）の所蔵資料は、下賜時に名古屋城にあったものが基となっており、不足する資料を購入や市民のみなさまの寄贈と寄託によって補っています。名古屋城振興協会は、天守閣が再建された昭和34年（1959）に名古屋城の振興を目的として設立され、総合事務所が所蔵していない名古屋城に関連する資料を所蔵し、寄託しています。これら寄託資料は、展示や調査研究などの名古屋城の諸活動に役立てられています。

補助解説「名古屋城古写真」

名古屋城総合事務所（以下、総合事務所）は、昭和初期に名古屋城を撮影したガラス乾板写真を所蔵しています。戦災を受ける前の名古屋城を記録するこれらの写真は、焼失した本丸御殿や天守の再建に役立てられています。総合事務所は明治時代撮影の写真も所蔵していますが、数が少なく、ここで紹介する明治期撮影の3枚の写真はその不足を補っています。似ている画像を比べると、そこから細かな情報を得ることができます。

補助解説「金鯱のない天守」

明治3年（1870）、名古屋藩知事となった徳川慶勝（尾張藩第14代藩主）は、明治政府に従うことを示すため、金鯱の金を剥がし政府の財源とすることを伺い出します。金鯱は明治4年（1871）4月に天守から降ろされ、6月に皇城内に御物として納められました。雄は明治5年（1872）に湯島聖堂で開催された日本初の博覧会に、雌は明治6年（1873）開催のウィーン万国博覧会に出品され、評判となります。金鯱を戻そうという運動が始まり、明治12年（1879）2月に元のように戻されました。

5-1～5 石垣拓本資料 1枚 川地義郎 昭和時代 名古屋城総合事務所所蔵 川地義郎氏寄贈

研究紀要で番号9として紹介された「石垣拓本資料 一式」に含まれる拓本5枚です。採拓場所が隅に記されているものがあります。刻印のある場所を記録したノート2冊もあり、整理によって採拓場所などが明らかになるかもしれません。

補助解説「石垣拓本資料」

名古屋城の石垣には、築城に関わった大名やその家臣を表す印や紋、名前が刻まれているものがあります。刻印または刻紋、刻銘と呼ばれるこれらは、築城がどのように行われたかを知る手掛かりとなっています。名古屋城総合事務所（以下、総合事務所）は、川地義郎氏が採拓した刻印・刻紋の拓本と関連する資料類を所蔵しています。拓本は、ものの表面に紙や布を置き、上から墨を打って凹凸を写し取る技法です。墨の黒地に窪みが白く表れます。名古屋市職員だった川地氏は、総合事務所の前身である名古屋城管理事務所（以下、管理事務所）に庭師と守衛として勤務していました。退職した昭和50年（1975）頃に管理事務所と名古屋市博物館に拓本類を寄贈しています。寄贈された拓本類は、整理や調査が十分に行われていませんでしたが、令和4年（2022）度の名古屋城調査研究センター紀要*で総合事務所所蔵分の資料紹介を行いました。名古屋城に関する研究に役立てるため、今後も継続した整理と調査が予定されています。

*大村陸・服部英雄「<資料紹介>名古屋城の刻印・刻銘（その1）—川地義郎氏寄贈資料について—」『名古屋城調査研究センター研究紀要 第4号』（2023年）

- | | | | | | | | | |
|-------------|-------|--------|----|---------------|------|-----|-------------|----------|
| 6 | 重要文化財 | 桐文図（緑） | 1面 | 名古屋城本丸御殿上洛殿入側 | 天井板絵 | 501 | 寛永11年（1634） | 平成28年度修理 |
| 名古屋城総合事務所所蔵 | | | | | | | | |
| 7 | 重要文化財 | 桐文図（白） | 1面 | 名古屋城本丸御殿上洛殿入側 | 天井板絵 | 601 | 寛永11年（1634） | 令和3年度修理 |
| 名古屋城総合事務所所蔵 | | | | | | | | |
| 8 | 重要文化財 | 桐文図（緑） | 1面 | 名古屋城本丸御殿上洛殿入側 | 天井板絵 | 557 | 寛永11年（1634） | 平成31年度修理 |
| 名古屋城総合事務所所蔵 | | | | | | | | |
| 9 | 重要文化財 | 桐文図（白） | 1面 | 名古屋城本丸御殿上洛殿入側 | 天井板絵 | 509 | 寛永11年（1634） | 平成29年度修理 |
| 名古屋城総合事務所所蔵 | | | | | | | | |
| 10 | 重要文化財 | 菊文図（白） | 1面 | 名古屋城本丸御殿上洛殿入側 | 天井板絵 | 339 | 寛永11年（1634） | 平成22年度修理 |
| 名古屋城総合事務所所蔵 | | | | | | | | |
| 11 | 重要文化財 | 菊文図（緑） | 1面 | 名古屋城本丸御殿上洛殿入側 | 天井板絵 | 465 | 寛永11年（1634） | 平成27年度修理 |
| 名古屋城総合事務所所蔵 | | | | | | | | |
| 12 | 重要文化財 | 菊文図（白） | 1面 | 名古屋城本丸御殿上洛殿入側 | 天井板絵 | 343 | 寛永11年（1634） | 平成22年度修理 |
| 名古屋城総合事務所所蔵 | | | | | | | | |

補助解説「名古屋城本丸御殿上洛殿入側 天井板絵」

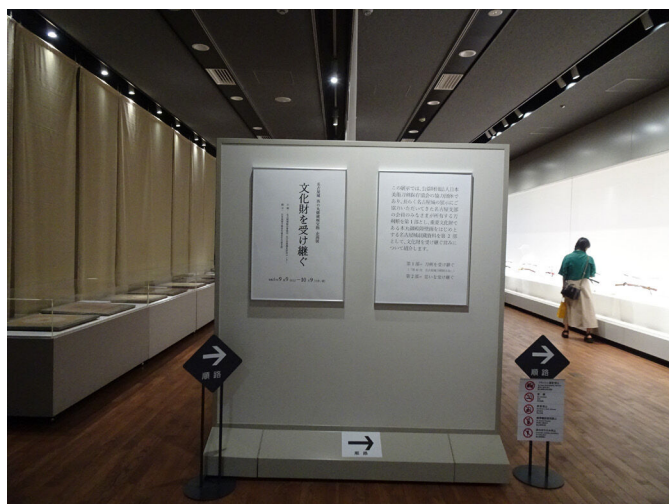
重要文化財の名古屋城本丸御殿障壁画は1047面あり、江戸時代後期の修理記録が残っています。修理は継続して行われており、現在は昭和61年（1986）度から始まった修理のなかで、襖絵と杉戸絵を終え、天井板絵の修理を行っています。

ここで紹介する上洛殿入側の天井板絵は、平成22年（2010）度以降に修理されています。また、復元模写が令和3年（2021）度に制作されており、再建された上洛殿に今秋からはめ込まれる予定です。外気や光の影響を受けやすい入側の天井板絵は、室内のものに比べて傷みがひどく、画面が下を向いていたこともあって、絵具の剥落が多くみられます。良い環境で保存していても、月日を重ねることで文化財は劣化し損傷します。こうした経年劣化による損傷を防ぐ方法はなく、状態を確認しつつ、損傷を最小に抑え、今の状態を保つ作業が必要です。修理に終わりが無いというのは、こうした理由によります。時間をかけた多くの人の働きによって文化財は守られています。

補助解説「上洛殿入側天井板絵」

上洛殿入側の天井は、桐文図と菊文図が交互に並べられていました。往復の視線の向きに配慮して、隣りあう図が天地の向きを変えて並べられています。

展示風景



西の丸御蔵城宝館企画展
「文化財を受け継ぐ」

出品目録

会期：令和5年9月9日(土)～10月9日(月・祝)



名古屋城は、先の戦災で焼失した本丸御殿の障壁画をはじめとして、尾張徳川家やこれにゆかりのある近世武家文化に関する各種の資料を収蔵しています。貴重な文化財であるこれらの資料には、名古屋城だけでなく、市民のみなさまによって守り伝えられてきたものも含まれています。また、名古屋城は、今現在も市民のみなさまが所有し、大切に守り伝えている資料をお借りして、収蔵資料とともに展示紹介することも行っています。この展示では、長らく名古屋城での展示にご協力いただいていた公益財団法人日本美術刀剣保存協会の協力団体である名古屋支部の会員のみなさまが所有する刀剣類を第1部とし、重要文化財である本丸御殿障壁画をはじめとする名古屋城収蔵資料を第2部として、文化財を受け継ぐ営みについて紹介します。

第1部 刀剣を受け継ぐ（「第47回 名古屋城刀剣展示会」）

番号	名称	頁数	製作年代	国・流派	刃長
1	短刀 銘 藤原貞清 黒呂塗龍文高時絵鞘出鮫合口拵	1振 1口	鎌倉時代 14世紀	大和国・保昌派	7寸3分5厘 (22.3cm)
2	太刀 銘 家忠 金梨地鞘糸巻太刀拵	1振 1口	鎌倉時代 13世紀	備前国・古備前派	2尺3寸7分 (71.8cm)
3	太刀 銘 長光 朱色鮫研出鞘打刀拵	1振 1口	鎌倉時代 13世紀	備前国・長船派	2尺3寸4分 (70.9cm)
4	刀 無銘 安綱 黒呂塗鞘葵紋打刀拵	1振 1口	平安時代 10世紀	伯耆国	2尺3寸5分 (71.2cm)
5	短刀 銘 兼元（2代） 朱色金紛溜塗鞘葵紋出鮫合口拵	1振 1口	室町時代 16世紀	美濃国	8寸9分1厘 (27.0cm)
6	刀 銘 越後守包貞（2代） 茶色塗鞘打刀拵	1振 1口	江戸時代 17世紀	摂津国	2尺2寸9分 (69.4cm)
7	脇差 銘 綱廣（3代） 朱菊判変り鞘小さ刀拵	1振 1口	桃山～江戸時代 16～17世紀	相模国	1尺2寸4分 (37.6cm)
8	刀 銘 飛騨守藤原朝臣氏房 黒呂塗鞘打刀拵	1振 1口	桃山～江戸時代 16～17世紀	尾張国	2尺3寸2分 (70.3cm)
9	脇差 銘 於南紀重国造之 朱色塗鞘小さ刀拵	1振 1口	桃山～江戸時代 16～17世紀	紀伊国	1尺2寸9分 (39.1cm)
10	短刀 銘 播磨守輝廣作（2代） 黒呂塗鞘合口拵	1振 1口	桃山～江戸時代 16～17世紀	安芸国	9寸4分7厘 (28.7cm)

すべて日本美術刀剣保存協会名古屋支部会員の所蔵です。出品番号は展示順と異なります。

第2部 思いを受け継ぐ

番号	指定	作品名	頁数	作者等	時代	備考
1-1		名古屋城古釘転用火箸	3組		江戸時代/昭和時代	松山カーテン株式会社寄贈
1-2		名古屋城古釘(火箸転用火)	5本		江戸時代/昭和時代	松山カーテン株式会社寄贈
2		瓦釘火箸	1組		江戸時代/昭和時代	松山カーテン株式会社寄贈
3		名古屋離宮城之図	1枚	後藤彦右衛門	明治29年(1896)	*
4-1		名古屋城古写真	1枚		明治時代	*
4-2		名古屋城古写真	1枚		明治時代	*
4-3		名古屋城古写真	1枚		明治時代	*
5-1		石垣拓本資料	1枚	川地義郎	昭和時代	川地義郎氏寄贈
5-2		石垣拓本資料	1枚	川地義郎	昭和時代	川地義郎氏寄贈
5-3		石垣拓本資料	1枚	川地義郎	昭和時代	川地義郎氏寄贈
5-4		石垣拓本資料	1枚	川地義郎	昭和時代	川地義郎氏寄贈
5-5		石垣拓本資料	1枚	川地義郎	昭和時代	川地義郎氏寄贈
6	◎	桐文図（緑）	1面		寛永11年(1634)	名古屋城本丸御殿上洛殿入側 天井板絵 501
7	◎	桐文図（白）	1面		寛永11年(1634)	名古屋城本丸御殿上洛殿入側 天井板絵 601
8	◎	桐文図（緑）	1面		寛永11年(1634)	名古屋城本丸御殿上洛殿入側 天井板絵 557
9	◎	桐文図（白）	1面		寛永11年(1634)	名古屋城本丸御殿上洛殿入側 天井板絵 509
10	◎	菊文図（白）	1面		寛永11年(1634)	名古屋城本丸御殿上洛殿入側 天井板絵 339
11	◎	菊文図（緑）	1面		寛永11年(1634)	名古屋城本丸御殿上洛殿入側 天井板絵 465
12	◎	菊文図（白）	1面		寛永11年(1634)	名古屋城本丸御殿上洛殿入側 天井板絵 343

◎重要文化財

*は名古屋城振興協会所蔵、名古屋城総合事務所寄託です。その他はすべて名古屋城総合事務所所蔵です。出品番号は展示順と異なります。

(4) 特別展「家康と名古屋東照宮」

会期 令和 5 年(2023) 10月17日(火)～12月17日(日) 62日間

前期: 10月17日(火)～11月16日(木) 31日間

後期: 11月17日(金)～12月17日(日) 31日間

特別協力 名古屋東照宮

入館者数 76,269人(1日平均 1,230人)

出品件数 33件

展示担当 朝日美砂子、今和泉大

印刷物 解説目録 カラー A4 8頁 令和 5 年(2023) 10月16日発行

趣旨

元和2年(1616) 4月17日、徳川家康がなくなりました。家康九男で名古屋城主であった徳川義直は、元和5年(1619) 9月17日、名古屋城三の丸に家康をまつる東照宮を建立しました。日光(栃木)や久能山(静岡)の東照宮と同じく壮麗な壁画や金具で飾られていた名古屋東照宮は、明治維新後も三の丸南の現在地に移築されて存続し、昭和10年には本殿、拝殿、唐門などが国宝に指定されました。国宝建造物の大半は、昭和20年(1945) 5月14日の名古屋城を襲った空襲により焼失しましたが、宝物類は焼失を免れました。今回の特別展では、家康と名古屋城にゆかり深い名古屋東照宮の名宝を一堂に公開します。大半が今回初公開の逸品です。

テーマパネル(執筆 朝日美砂子。写真パネル、ルビ、行替、一部文章は省略)

I 名古屋東照宮

元和2年(1616) 4月17日、大御所家康が駿府城で逝去すると、亡骸は遺言に従って久能山東照社に葬られた。翌年、東照社に「東照大権現」の神号が宣下され、家康には正一位が贈位され神格化された。日光にも東照社が建立され、家康の一周忌にあたる元和3年(1617) 4月17日に久能山からの遷座祭が举行された。一方、初代尾張藩主の徳川義直は、元和5年(1619) 9月17日、父家康をまつる東照宮を名古屋城三之丸に建立した。その南西には別当として天台宗天長山神宮寺が建てられた。「源敬公御代御記録」によれば、名古屋東照宮には家康の神像が鎮座し、神衣・甲冑・弓箭(弓矢)・太刀が奉納された。毎年正月17日に歴代の尾張藩主が参詣し、4月17日の家康の命日には、東照宮を祀る祭礼が藩主上覧の下で盛大に举行された。明治維新後、名古屋東照宮は現在地に移転し、昭和20年(1945) 5月14日の名古屋空襲により大半の建物が焼失したが、家康遺品などの一部は焼失を免れ、神宝として保管されてきた。

II 東照宮祭

東照宮祭とは、神格化された家康を祭神とする神事で、尾張藩では元和4年(1618)からはじまった。元和6年(1620)に名古屋東照宮の神輿が完成し、藩が举行する最高の格式の祭礼とされ、江戸中期には、三基の神輿が名古屋東照宮を出て城南末広町の御旅所まで往還し、各町内の山車九輦と警固の仮装行列が供奉する華麗な祭礼行事となった。歴代藩主は、在国時には本町通の評定所や重臣宅(のちは三之丸御厩座敷)から行列を上覧し、江戸在府時は代参を送った。明治維新後、祭礼の主体を失い一時中断されたが、市民の祭りとして復活し、名古屋祭りという愛称のもと親しまれた。第二次世界大戦中は自粛を余儀なくされ、さらに昭和20年(1945)の空襲により山車のすべてが焼失した。そのため山車行列は催行不能となり、現在の祭礼は神事と舞楽奉納が中心になっている。しかるに、名古屋東照宮においては、神旗や山車人形の頭など、一部の祭礼資料が大切に保存されてきた。戦災を乗り越えた貴重な資料であり、その価値ははかり知れない。

III 東照宮の建築

名古屋東照宮は、「三之丸御宮」と呼ばれ、手前の拝殿(祭文殿)、一段低い石之間(渡殿)、奥の本殿(正殿)からなる権現造であった。明治以降三之丸が陸軍用地となったため、明治8年(1874)現在地に移転した。昭和10年(1935)、本殿、渡殿、拝殿、唐門、楼門、透塀が国宝に指定され、名古屋市内唯一の霊廟建築として喧伝された。しかし、昭和20年(1945)の空襲により国宝建造物の全てを失った。同年6月18日付で文部大臣に提出された戦災焼失届によれば、3月19日午前1時、焼夷弾が社務所を直撃し、楼門が類焼した。さらに5月14日午前9時、焼夷弾の直撃により、神庫(宝蔵)・神輿庫以外の建物の大半、すなわち国宝建造物五棟・楽所・楽人休憩所・高塀・通門が炎上したのである。現在の本殿は、尾張藩

初代藩主義直の正室であった高原院春姫の御霊屋（旧万松寺内・慶安4年[1651]建立）を昭和28年（1953）に建中寺から移築したもので、昭和35年（1960）、愛知県有形文化財に指定された。

IV 東照宮と『進饌要覧』

『進饌要覧』とは、年中行事における尾張藩主の座席や献立、給仕の仕方を記す大部の書で、藩士清原重巨（(1779～1847)）によって編まれた。その中に、毎年正月17日と4月17日に藩主が名古屋東照宮に参詣する際の図面があり、江戸時代の東照宮内部を描く唯一の図と考えられる。克明な図から、酒をつぐ土器を乗せる三方や太刀の置き場まで知られる。行事により神官や藩士の座る席が異なることも知られ、興味深い。なお、『金城温古録』によれば、正殿は東西棟行三間四尺六寸・梁三間三尺七寸、石の間は南北棟行三間一尺二寸・梁三間一尺二寸。拝殿は東西棟行五間五尺・梁二間五尺三寸で、本図とは若干異なっており、検討を要する。また明治以降に制作された略図面とも異なるが、明治以降の図が屋根まで含むのに対し、本書は室内のみを描くためと思われる。

キャプション（2.3の執筆は今和泉大、それ以外は朝日美砂子）

1 名古屋城下図 江戸時代中期 名古屋城振興協会蔵

名古屋城南西三之丸（今の金シャチ横丁義直ゾーン）の「天王社 安養寺」西に、「東照権現」（名古屋東照宮）がある。南西に別当寺院「尊寿院」もある。その西に九代將軍家重淳信院（宝暦11年・1761没）までの歴代將軍の御霊屋が並ぶ。十代將軍家治（天明8年・1786没）の霊屋はまだなく、画家としても活躍した尾張藩重臣・津田応圭（安永9年・1780没）の屋敷が描かれることから、明和・安永年間（1764～1781）の絵図と考えられる。

2 道中宿付 徳川家康自筆 慶長17年（1612） 名古屋東照宮蔵

駿府から江戸へ至る旅行日程を記した家康自筆の文書。將軍職を辞した家康は、慶長12年（1607）から駿府城を隠居所としたが、これ以降毎年のように駿府から江戸へ下向し、その道すがら、あるいは江戸へ到着後関東所々で、放鷹を行った。本文書を含め、この時期の家康自筆道中宿付が数点現存する。ただし、本文書はあくまで旅行予定であり、実際の旅程には変更が生じた。家康はこのとき実際には閏10月2日に駿府を発ち、同12日の江戸到着後、忍（埼玉県行田市）等での放鷹を経て、11月26日に江戸へ帰着した。いずれにせよ自筆の宿付からは、放鷹を伴う旅行に対する家康の強い意向が読み取れる。

3 香合覚書 一幅 徳川家康自筆 江戸時代前期 名古屋東照宮蔵

香木を薫き合わせる際の配合を記したと思われる覚書。家康自筆とされる。覚書中に記された香木・香料の種類はそれぞれ、「ちん」＝沈香、「丁」＝丁字、「くん」＝薫陸、「白」＝白檀、「さ」＝麝香とされ、それぞれの分量が記される。名古屋東照宮に伝わる当該覚書以外にも、香木等に関する家康自筆の覚書が数点現存しており、香に対する家康の関心の深さがうかがいしれる。

4 徳川家康画像 盛胤親王賛 江戸時代前期 名古屋東照宮蔵

宮殿の中に座す、神としての家康を描く。家康の背後には、寛永年間半ば（1630年代）の日光東照宮の社殿が描かれ、数ある家康画像の中でひときわ古い様式を示す。筆者は木村了琢周辺と考えられる。絵の上部に、無品の盛胤親王（1651～1680）による賛がある。盛胤親王は後水尾天皇十六皇子で、延宝元年（1673）4月10日に一八六世天台座主となり、同年11月22日無品から二品に叙せられた。よって賛は絵から遅れ、延宝元年に記された可能性がある。東照宮別当の天長山神宮寺尊寿院に伝来し明治8年（1875）東照宮に移管されたことが、箱書から知られる。

賛：涅槃経云 汝勿啼泣 於閻浮提 或復還生 現大明神 無品盛胤親王書

5 徳川家康画像 徳川義直筆 江戸時代前期 名古屋東照宮蔵

威厳ある風貌の家康画像。背景はない。家康第九男で初代尾張藩主となった徳川義直の筆として東照宮に伝えられてきた。上部の賛は、徳川美術館・徳川記念財団などに蔵される義直による家康画像の賛と同文である。絵も義直筆と伝えられるが、きわめて巧みで、専門画家の補佐を受けたものと考えられる。

賛：源家正嫡武門棟梁 興新田跡出參州郷 威風大振徳澤益彰 所向無敵不招帰降 有仁有智克柔克剛 一統創業萬年永昌

6 徳川家康画像 徳川義直筆 江戸時代前期 名古屋東照宮蔵

5 とほぼ同一の家康画像。賛文もほぼ等しい。義直十七回忌にあたる寛文7年（1667）、家康の側室であった貞松院おさいの方から東照宮別当の神宮寺に寄進されたことが、神宮寺三世住職珍舜（号観心院）による箱書から知られる。

賛：源家正嫡武門棟梁 興新田跡出参州郷 威風大振徳澤益彰 所向無敵不招帰降 有仁有智克柔克剛 一統翔業萬年永昌

7 徳川家康画像 徳川義直筆 江戸時代前期 名古屋東照宮蔵

4・5 とはまた異なる家康画像。名古屋東照宮で、義直自筆画像として崇敬されてきた。おおらかな風貌の家康をのびのびと描いており、本画像のほうに義直の筆使いを伝えていると考えられる。義直は、父家康はじめ、母相応院お亀の方の画像を複数描いている。多くは無背景の画像で、上部に賛を施す。本画像には「東照大権現」の神号が大きく墨書されており、柔らかに屈曲するその書体も、他の義直書画と共通する。

8 菅原道真画像 徳川義直筆 江戸時代前期 名古屋東照宮蔵

義直筆と伝えられる菅原道真の画像。旧尾張藩士で明治維新後は名古屋東照宮の復興に尽力した大島為知から、明治17年（1884）2月17日、東照宮に寄進された。

賛：菅相亟 此是天經即孝經 分來聖道滿皇庭 為臣為子皆言孝 和齊春風仲月下（「菅家文草八一 仲春釋奠 聽講孝經」）

9 松鷹図 元禄12年（1699）奉納 名古屋東照宮蔵

松にとまる黒白の鷹を描く双幅。名古屋東照宮の五世別当智洞による長文の墨書が軸裏にあり、三代藩主綱誠（1652～1699）の家臣で、鷹の絵を得意とした南部光近が、家康寵愛の鷹を描き奉納したという。江戸期の記録によれば、「雪白・龍（遼）東黒」という家康の鷹二羽を義直が懇願して拝領し、家康没後山に放ち、細工坊主に命じその姿を木で彫らせた。木彫の鷹二羽は、家康をまつる東照宮祭礼でも行列に加わっており、家康と義直に関わる象徴的な逸話であった。本図はまさにその鷹を描くものである。

裏書大意：南部氏源光近は、尾張藩主綱誠公に武家として仕えていた。鷹の絵を巧みに描き、見る者が恐れるほどであったので、綱誠公から、藩主の許可がなければ描いてはいけないという留筆（とめふで）の栄誉を賜った。ある時光近は、神君家康が鷹を放ち遊ぶ時は先祖がお伴をしていた縁から、神君寵愛の鷹を描いて奉納したいと綱誠公に願い出て、許しを得た。そこで身を清め大鷹の絵二枚を描き、東照宮に奉納した。この次第を私は禿筆（下手）ながらここに記すのである。

元禄十二年九月穀旦（吉日） 東照宮別当第五世 大僧都智洞が合爪（合掌）して誌す

10 四字一行書「君子愛人」 一幅 徳川綱義（綱誠）筆 江戸時代前期 名古屋東照宮蔵

尾張藩三代藩主・徳川綱誠（1652～1699）による四字一行書。綱誠は、承応元年（1652）に二代藩主・光友と千代姫（三代将軍・家光の娘）の間に生まれ、寛文3年（1663）に元服し綱義と名乗り、延宝8年（1680）に綱誠に改名した。藩主としては、藩撰地誌の編纂を命じるなど、文教政策に力を注いだことで知られる。「君子愛人」は、中国の儒教経典「礼記」第三篇「檀弓・上」の一節「君子之愛人也以德」（君子の人を愛するや徳を以てす）を出典とし、君子は徳義にかなうようにして人を愛するという意味になる。墨を多く含み整然としたためられた書からは、謹厳実直の風が感じられ、藩主の座を継承する者としての志がうかがえる。

11 一大字書「敬」 一幅 徳川吉通筆 元禄14年（1701） 名古屋東照宮蔵

尾張藩四代藩主・徳川吉通（1689～1713）による大字書。元禄12年（1699）、吉通は父綱誠（三代藩主）の死により、わずか11歳にして家督を継ぎ、四代藩主となった。本作品には「吉通十三歳書」とあるので、元禄14年の書であることがわかる。署名の下に捺された印章「絶塵」は、徳行・人格が群を抜いてすぐれていることを意味し、年相応の未熟さが垣間見られるものの大胆にしたためられた「敬」の大字とともに、幼いながらも徳を備えた君主たりえようとする吉通の志が伝わる。

12 色々威二枚胴具足（徳川家康近侍具足） 江戸時代前期 名古屋東照宮蔵

元和2年（1616）の家康没後、駿府御分物として義直に譲られた「御具足十六領分」のうちの1領。桐紋を多用するため秀吉所用とされてきたが、江戸期の文献『金城温古録』によれば、家康御小姓の具足16領が小天守2階に納められ、その内1領は家康御着衣と伝わり名古屋東照宮別当の尊寿院に奉納されたという。本具足こそ、尊寿院に移された1領である。

他の家康近侍具足の大半が宝暦12年（1762）に修理され紅・白・紺・縹の鮮やかな威糸に交換されているのに対し、本具足は紅・白・茶・黒の色目で、当初の威糸と考えられる。逆にそのため、袖や草摺・籠手・脛当は糸が切れたままになっており、「御草摺包布 寛政十戊午十月 御細工方出来」などと墨書する布に包まれ、小箱に納められている。

13 東照宮御装束 江戸時代 名古屋東照宮蔵

「東照宮御装束」と墨書する布に包まれ黒漆塗鍵付箱におさめられた装束一式。12の2枚胴具足と同じく、寛政10年（1798）、尾張藩細工方により整理されたことが知られる。下襲・表袴・裃・襪、石帯など、包布に記された全装束が現存するが、「黒御装束 上斗り 但御袖無之」と記された黒の半臂は、鉄媒染により染められたらしく鉄分による劣化が進んでおり、別箱に収められている。石帯もあり、正規の装束である束帯の一具と考えられるが、一番表に着用すべき黒の袍はない。

東照宮御装束 白御装束上下共 壹 桃色御装束上斗り 貳 黒御装束上斗り 壹 但御袖無之 同地同色ノ切レ 壹巾 白地御装束下表斗り 壹 白織紋襪子 壹足 石帯 壹 八品 寛政十戊午歳十月 御細工方出来

下襲 袍の下に着用する衣。後ろの裾が長い。表が椿文の白地、裏が紅地。

表袴 大口袴の上に着用する。表が白、裏が紅。

裃 下襲の中に着る下着。単仕立て。

襪（しとうず） 沓の中にはく下履き。いわゆる靴下。

14 東照宮御装束のうち 石帯 江戸時代 名古屋東照宮蔵

13「東照宮御装束」の一具。束帯（正式の装束）を着用する時、袍の上から締める帯で、牛の革に黒漆を塗って固め、飾りとして8個の玉を縫い付けている。着用時は、玉を縫いつけた部分（本帯）を、背中側にまわす。本来は、先端のバックル部分にもう一つ玉があった。

15 冠 江戸時代 名古屋東照宮蔵

羅という薄い絹に黒漆を塗って固めた冠。束帯着用時は必ずかぶるべきもの。頭にのせる帽子部分、髷を納める巾子、巾子の上から髷に差す簪からなる。本来は、背後に細長い纓を垂らす。寛政10年（1798）に調進された布が付属しており、13「東照宮御装束」の一具であったと考えられる。現在は、芦雁を蒔絵した冠箱に納められている。

16 笏 江戸時代 名古屋東照宮蔵

イチイ（櫟）の木を削った笏。束帯姿の時右手に持つ。形状がわずかに異なる二握が伝えられている。いずれも御神宝と考えられる。寛政10年（1798）に調進された布に包まれ、青貝と総称される光沢のある貝を薄く切り貼り付けた、螺鈿細工の箱に納められている。

17 梨地武具尽文蒔絵鐙 辻山城守政知作 江戸時代後期 名古屋東照宮蔵

旗指物・母衣・采配・火縄などの武具を蒔絵で表す鐙。幕府の御鞍打師であった辻山城守政知の作とする辻政信による天保14年（1843）の折紙（鑑定書）が付属する。また、重熙なる旗本の添書があり、万延元年（1860）、江戸城本丸御殿普請での功績により、幕府から拝領したという。その後名古屋東照宮に寄進されたと考えられる。

18 東照宮縁起絵巻 全5巻のうち第4巻 寛政6年（1798） 名古屋東照宮蔵

家康の生涯と日光東照宮の沿革を描く絵巻。同様の絵巻が日光東照宮などに所蔵されるが、名古屋東照宮が所蔵する本絵巻は、諸本とは別個の成立で、九代藩主宗睦の命により制作され、寛政6年（1794）名古屋東照宮に奉納された。画家は幕府御絵師住吉内記広行、板谷慶意広長、板谷慶舟広当の3名で、幕府右筆森尹祥が詞を記した。第四巻は、家康二十一回忌の寛永13年（1636）、日光東照宮で行われた祭礼の場面。三基の神輿に華麗な行列が供奉する様子が描かれる。

19 梨子地葵紋小太刀拵 江戸時代前期 名古屋東照宮蔵

初代藩主義直によって奉納され、東照宮の御神宝とされてきた太刀（山城国来国行作）の拵。太刀自体は明治維新後に東照宮を離れたが、拵は脚付の刀箱にそのまま納められて伝来する。鮫皮の柄、桑鍔、二尾の鮒形を完備し、保存状態はきわめてよい。葵紋も繊細で、17世紀の優品である。

20 朱漆塗四脚太刀箱 江戸時代 名古屋東照宮蔵
(本文略)

21 林和靖車人形覚書・山車行列図絵巻 享保17年(1732) 名古屋東照宮蔵

享保17年、伝馬町(今の中区錦一丁目・二丁目)の山車が梵天王車から林和靖車へ一新されるにともない、人形を注文された大坂の人形師山本飛騨掾らが町に提出した代金・仕様の覚書と、完成した林和靖車の行列を描く絵巻との合巻。新作したのは、林和靖・唐子・鶴・采振の各人形と梅の造枝で、箱を含め一式18両であった。後半の絵巻は、正確精緻であり、山車行列を詳しく描くことで著名な内藤東甫編『張州雜志』の原画かと思われる。人形注文や『張州雜志』成立の過程が知られる貴重な資料である。なお采振人形は、その後作り直されたものが西枇杷島の東六軒町に譲られ現存する。林和靖は、中国宋代の詩人。鶴と梅を愛し、不在中に客が来たら童子に鶴を放たせ、鶴が天を飛ぶのを見て帰宅したという。鶴もまた庭に戻ったという。日本では、林和靖と梅、鶴、童子(唐子)を組み合わせた林和靖図が、風雅な画題として好まれた。注文主の伝馬町の町人は、常識として林和靖の逸話や詩作を知っており、東照宮祭の山車からくりのテーマとして選んだことになる。

22 東照宮祭礼絵巻 明治 名古屋東照宮蔵

明治維新後、東照宮祭は一時中止・縮小され混乱した。その中で、明治8年(1875)、藩祖義直と二代光友が東照宮に合祀された。明治14年、徳川家の援助と各町内の尽力により、地域の祭りとして東照宮祭が復興された。明治18年には「名古屋祭(まつり)」という名で呼ばれるようになり、東照宮と義直の神輿渡御を山車と甲冑姿の旧士族らが供奉する形となった。明治以降の「名古屋祭」としての東照宮祭礼を描く貴重な絵巻。

23 下七間町山車人形頭 判官 天明8年(1788)箱作成 名古屋東照宮蔵

下七間町の山車「橋弁慶車」の人形「判官」の頭(かしら)。橋弁慶とは、稚児姿の牛若丸が京都の五条橋で弁慶と戦う場面。頭は立った状態で箱に入っており、前蓋を外せばそのまま拝むことができる。高力猿猴庵著『尾張年中行事絵抄』や桑山好之著『金鱗九十九之塵』によると、本頭は若狭の名人形師出目法眼の作で、二代藩主光友の寄進ともされ、普段は御神体の如く秘蔵され、祭礼直前の三日間のみ下七間町の車宿で開帳されたという。涼やかな目元や笑みを含む口元は神々しく、江戸時代前半にさかのぼり得る優美な頭である。

箱蓋表 享保十六辛亥年 地人形面箱 四月十七日

箱身裏 下七間町 指物屋庄右衛門作

頭内側 伊藤文左衛門

24 下七間町山車人形頭 地人形 享保16年(1731)箱作成 名古屋東照宮蔵

下七間町の「橋弁慶車」の前部に立つ采振人形の頭。箱の墨書から、享保16年(1731)、町内の指物師庄右衛門が箱を製作したことがわかる。頭は木を寄せて内部をくりぬいており、内側に代々の有力者と考えられる伊藤文左衛門の墨書がある。頭しか現存しないが、両手で御幣(ごへい)を捧げ左右に振るからくり人形であったと考えられる。舌を出す行為は、剽軽であると同時に、世俗の立場や生死を超えた存在の象徴でもある。

25 下七間町山車人形頭 弁慶 安永3年(1774)四月箱作成 寛政2年(1790)修理 名古屋東照宮蔵

五条橋の上で牛若丸と戦う、下七間町「橋弁慶車」の弁慶人形の頭。頭部と首が別に作られ、頭が前後に揺れる仕掛けとなっている。箱書から、安永3年(1774)の祭礼当日の荒天により弁慶他すべての面(めん)と衣類が濡れたこと、寛政2年(1790)に頭内部のばね仕掛けを鬼頭二三延忠が作ったことがわかる。鼻がひどく傷んでおり、寛政六年、新しい人形に交換された。

蓋表墨書 安永三年甲午四月 弁慶面箱

蓋裏墨書 寛政二庚戌四月弁慶頭骨鯨はね相成 二三作 表書之歳 歳二 ねり出し 破損 並御当日 朝六ツ半時分
大雨天にて惣軀三つ之面□幕衣類其外家軀御道具共二翌日 助右衛門方にて町代組頭若キ者立会ニ而改干シ
橋もみかき直し申候跡車之年にて御座候

26 下七間町山車人形頭 弁慶 寛政6年(1794) 鬼頭二三延忠作 名古屋東照宮蔵

頭内部と箱蓋裏の墨書から、寛政6年(1794)の11月、80歳の人形師二三延忠が作り、漆職人の治兵衛が漆を塗り、24と同じ伊藤文左衛門が世話人をつとめたことがわかる。鬼頭二三延忠は、25弁慶頭のばねを作った他、若宮祭福祿寿車の唐子人形を天明4年(1780)に修理している。頭は25の弁慶よりかなり大きく、25の破損後、身体ごと作り直したと考えられる。橋弁慶車は、欄干に乗りくるくる回る牛若丸に対し、弁慶が大長刀を振り回す華やかなからくりで、東照宮祭の象徴として人気を集めた。

内部 銘 時干寛政六甲寅霜月 行年八十歳 鬼頭二三延忠造之 町代 渡邊勘右衛門 関谷重右衛門 世話人伊藤文左衛門 ぬりものや 治兵衛

27 神旗のうち 青龍 江戸時代後期 名古屋東照宮蔵

東照宮祭礼の主要神事である神輿渡御に随行した神旗。東照宮の神輿を青龍・白虎、山王神輿を朱雀・玄武、日光神輿を勾陳(「くちん」とも。金色の蛇)・騰蛇(「とうだ」とも。炎に包まれた蛇)の旗が先導した。江川町・樽屋町(いずれも現名古屋市西区)の町人が捧げ持つ決まりであった。青龍とは、東を護る聖獣。白虎・朱雀・玄武とともに四神とし東西南北に配するのが一般的であるが、名古屋東照宮祭では三基の神輿に二流ずつ供奉したため、勾陳・騰蛇を加え六流とし、四神幡と総称していた。

28 神旗のうち 白虎 江戸時代後期 名古屋東照宮蔵

白虎とは、西を護る白い虎。身を低くし身構える虎を描いている。瞳の描き方や描線は、虎の絵を得意とし江戸後期から明治にかけて人気を博した岸派の系譜をひく。ここから江戸後期から明治初年の作と見なされるが、明治維新後の混乱期に旗が新作されたとは考えにくいので、江戸時代の作と見ておく。このような神旗が現存する例は全国的に見てもほとんどなく、きわめて貴重である。

29 神旗のうち 朱雀 江戸時代後期 名古屋東照宮蔵

朱雀は、南を護る聖鳥。頭が3つ、足が3本の鳳凰に似た鳥が、赤い翼を広げる姿として描かれている。本紙部分(中央部)の仕立て方は、表裏同一の絵を描く木綿裂2枚を太い糸で刺子縫い合わせており、中に芯がないため柔らかい。周囲の鱗は、赤く彩色した布2枚をそれぞれ紙で裏打ちし、外表に重ね、縁をかがり縫いし、本紙部分に綴じ合わせている。縦部分には、棒を通すための乳(ち)も縫いつけられている。

30 葵紋金具付革貼長持 江戸時代前期 名古屋東照宮蔵

木に牛の革を貼り朱漆を塗る特殊な長持。「□番 三□之内 不火入□」「東照宮第壱號」と墨書する貼紙がある。蓋上には朱漆で「九」と記す。「不火入」は、名古屋城二之丸北にあり蠟燭類を持って入る事を禁じていたため不火入御蔵と呼ばれた蔵。「第壱號」は東照宮の長持に付けられた番号で、一号長持には、家康画像など特に重要な神宝が納められていた。長持の仕立は堅牢で、葵紋を打つ金具は慶長期に遡る古様を示す。家康没後駿府御分物を納めて義直に譲られ不火入御蔵で保管され、その後東照宮に奉納されたと考えられる。なお『金城温古録』御本丸編によれば、家康の馬印は革製長持に納められ関東を往還したという。

31 葵紋長持 江戸時代後期 名古屋東照宮蔵

名古屋東照宮において宝物を納めてきた長持。大きな葵紋を朱漆で表す。「東照宮第二号」と記す近代の貼紙がある。「神宮寺由緒并神物什物之記」(元禄7年[1694]6月成立・密蔵院蔵)には、東照宮に「御供長持 御紋付き 二ツ」があったことが記されている。二棹の長持のうちの一棹は、30の革長持をさす可能性が高い。一方本長持は、葵紋の形式から元禄以前とみなすことはむづかしいが、貼紙から、30の革長持につぐ貴重な長持とされてきたと考えられる。「神宮寺由緒并神物什物之記」は、『春日井市史 資料編 続』(昭和39年[1964] 春日井市発行)に翻刻されている。

◆東照宮と密蔵院

元和5年(1619)、徳川義直は、名古屋東照宮を造営した神宮寺をたて、比叡山日増院から春日井の古刹密蔵院に転任していた権僧正珍裕を初代別当とした。その後天長山尊寿院の寺号が定まり、尊寿院別当は密蔵院住職を兼務した。よって密蔵院には、東照宮関係の資料が今も伝えられている。「神宮寺由緒并神物什物之記」はその一つで、五代別当恵恩院智

名古屋城 西の丸御蔵城宝館 特別展「家康と名古屋東照宮」

特別協力 名古屋東照宮

会期 令和5年10月17日(火)～12月17日(日) 会期中無休
主催 名古屋城総合事務所 名古屋城調査研究センター

展示番号	資料名	員数	筆者	年代	所蔵
1	名古屋城下図	1枚		江戸時代中期	名古屋城振興協会
2	道中宿付	2枚	徳川家康筆	江戸時代前期	名古屋東照宮
	付 和歌色紙「恨ても」	1枚	徳川秀忠筆	江戸時代前期	名古屋東照宮
3	香合覧書	1幅	徳川家康筆	江戸時代前期	名古屋東照宮
4	徳川家康画像	1幅	盛胤入道親王賛	江戸時代前期 延宝元年(1673)着賛か	名古屋東照宮
5	徳川家康画像	1幅	徳川義直筆	江戸時代前期	名古屋東照宮
6	徳川家康画像	1幅	徳川義直筆	江戸時代前期 寛文7年(1667)貞松院寄進 ★10月17日のみ展示	名古屋東照宮
7	徳川家康画像 題字「東照大権現」	1幅	徳川義直筆	江戸時代前期 ★10月18日から展示	名古屋東照宮
8	菅原道真画像	1幅	徳川義直筆	江戸時代前期	名古屋東照宮
9	松鷹図	双幅	南部光近筆	元禄12年(1699)奉納	名古屋東照宮
10	四字一行書「君子愛人」	1幅	徳川綱義(綱誠)筆	江戸時代前期	名古屋東照宮
11	一大字書「敬」	1幅	徳川吉通筆	元禄14年(1701)	名古屋東照宮
12	徳川家康近侍具足・十六間筋兜	1領		江戸時代前期	名古屋東照宮
13	東照宮御装束の内 下襲・表袴・袴・襦	1式		寛政10年(1798)以前	名古屋東照宮
14	東照宮御装束の内 石帯	1帯		寛政10年(1798)以前	名古屋東照宮
15	冠 冠箱とも	1頭		寛政10年(1799)以前	名古屋東照宮
16	笏 螺鈿笏箱とも	2握		寛政10年(1798)以前	名古屋東照宮
17	梨地武具尽文蒔絵箱 折紙・色紙とも	1双	辻山城守政友作	江戸時代後期	名古屋東照宮
18	東照宮縁起絵巻	全5巻中 第4巻	住吉広行・板谷広長・広当絵 森尹祥書	寛政6年(1794)奉納	名古屋東照宮
19	太刀拵 太刀箱とも	1口		江戸時代前期	名古屋東照宮
21	林和靖車人形覧書・山車行列図絵巻	1巻	山本飛騨掾・山形屋又六差出、日 比野市兵衛他三名宛	享保17年(1732)覧書	名古屋東照宮
22	東照宮祭礼絵巻	1巻		明治	名古屋東照宮
23	山車人形頭 下七間町 判官	1頭		天明8年(1788)4月吉日 箱制作	名古屋東照宮
24	山車人形頭 下七間町 地人形	1頭		享保16年(1731)4月17日 箱制作	名古屋東照宮
25	山車人形頭 下七間町 弁慶	1頭		安永3年(1774)4月 箱制作	名古屋東照宮
26	山車人形頭 下七間町 弁慶	1頭	鬼頭三延忠作	寛政6年(1794)	名古屋東照宮
27	神旗のうち 青龍	1旗		江戸時代後期	名古屋東照宮
28	神旗のうち 白虎	1旗		江戸時代後期	名古屋東照宮
29	神旗のうち 朱雀	1旗		江戸時代後期	名古屋東照宮
30	菱紋金具付革貼長持	1合		江戸時代前期	名古屋東照宮
31	菱紋長持 第二号	1合		江戸時代後期	名古屋東照宮
32	黒漆塗菱旗箱	1合		江戸時代後期	名古屋東照宮
33	重要文化財 名古屋城本丸御殿玄関天袋模	4面		慶長19年(1614) ★前期10月17日～11月17日・ 後期11月18日～12月17日で2面ずつ展示	名古屋城総合事務所

（５）企画展「家康の謎 名古屋城本丸御殿の黒木書院」

会期 令和５年（2023）12月23日（土）～令和６年（2024）２月25日（日） 62日間

前期：12月23日（土）～１月22日（月） 28日間

後期：１月23日（火）～２月25日（日） 34日間

入館者数 45,463人（１日平均 733人）

出品件数 27件

展示担当 朝日美砂子

趣旨

名古屋城本丸御殿は、徳川家康が九男義直のために建てた広大な御殿でした。華麗な襖絵や金銀の金具で飾られていましたが、最奥の黒木書院は、二部屋のみ小さな建物で、襖絵も水墨主体の地味な仕様でした。それでも、山水図・人物図・花鳥図という当時の規範的な画題がそろっており、格式ある建物の一部であったと考えられます。清須城の家康宿館を移築したという伝承は否定できません。黒木書院の襖絵は、昭和20年の戦災を耐え、現存します。本展では、黒木書院の襖絵を一挙に展示いたします。あわせて、清須城からの移築の伝承がある名古屋城西北隅櫓の資料なども公開します。

テーマパネル（写真パネル、本文の一部、ルビ、行替は省略。キャプションも同じ）

一 名古屋城本丸御殿の黒木書院

慶長14年（1609）、徳川家康は清須から名古屋への遷府を決め、翌年名古屋城の普請を開始した。同20年には、初代尾張藩主である実子義直の住まいとして本丸御殿を完成させた。20年後の寛永11年（1634）、三代将軍家光の上洛にともない、義直は、将軍の宿として上洛殿を本丸御殿に増築した。上洛殿は、極彩色の彫刻欄間や障壁画、金色に光り輝く鍔金物や漆黒の材で荘厳された、華麗な御殿であった。黒木書院は、この時上洛殿の北西に設けられた別棟である。一之間・二之間の二室と入側（廊下）のみ小さな建物で、『金城温古録』によれば黒松が使われているためこの名があり、清須城にあった父家康の宿舎を移築したという。黒木書院と天守や上洛殿との位置関係は不可思議で、黒木書院の北側には小天守石垣が間隙もなく屹立し、東側には配膳室である上洛殿上御膳所の外口部がやはり廊下もなくそのまま迫っていた。上洛殿の建築過程で、何らかの既存の建物を急遽移築したとも想像できるのである。

二 黒木書院の障壁画

上洛殿上段之間北西から朝顔廊下を北に渡ると、黒木書院にいたる。朝顔廊下の幅は一間しかなく、天井は斜め掛けで、上洛殿上段之間の二重折上格天井に比べ格段に低い。天井の下の長押上小壁は、朝顔廊下も黒木書院も漆喰塗の白壁のままであり、長押上や天井まで障壁画で彩る上洛殿とは、豪華さにおいて大差があった。しかし、襖は明かり取り用の水腰障子を入れた三枚仕立て、襖を開けて障子を閉めれば柔らかな光が室内に入るとい、快適で格の高い仕様となっている。本丸御殿中で三枚仕立ての襖は上洛殿と黒木書院にしかなく、黒木書院は質素ながら別格の存在で、上洛殿との見た目の落差は意図的なものと考えられる。そもそも家光は祖父家康に心酔しており、家光専用の客館である上洛殿に、義直の父家康がかつて義直とともに宿った清須城の建物を移築したとすれば、そこには、家康と義直の強固な関係を家光に知らしめる意図が込められていたのではなかろうか。しかも、清須越から20年以上たったの移築とすれば、一端別の場所一たとえば本丸御殿一に移築してあった建物を再移築した可能性すら想定できる。

三 清須城と名古屋城

慶長14年（1609）の家康による名古屋築城の命令にともない、清須城下に住んでいた家臣や町人、神社や寺は、続々と名古屋城下に移転した。いわゆる清須越である。名古屋城には、堀川京町筋に架かる五条橋（現名古屋市中区丸の内一丁目）に据えられていた擬宝珠が伝えられてきた。堀川とは、名古屋城西側を北から南に流れる人工運河で、慶長17年（1612）以降に開削された。擬宝珠は、刻銘から、堀川掘削以前の慶長7年（1602）、松平忠吉が城主であった清須城下の五条川にかけられていた五条橋欄干の擬宝珠として制作されたもので、堀川開通時に堀川の橋の擬宝珠として再利用されたことが知られる。五条橋と堀川では川幅が異なることから、橋全体を移築したのではなく、擬宝珠など主要材を転用したと考えられる。遷府が急で時を争うものであった上、橋は町づくりにおける象徴的な建造物であるがゆえ、擬宝珠は再利用されたのであろう。清須越を具現する貴重な資料である。

四 陸軍期の黒木書院

明治維新後、名古屋城は尾張徳川家の手を離れ陸軍所管となり、本丸御殿には名古屋鎮台が常駐した。本丸御殿の表書院は参謀部、表書院上段之間は司令官室、対面所は会議室、梅之間は食堂として使用された。上洛殿はさすがに貴重とみなされ用いられなかったようだが、黒木書院は「物置」となった。簡素な構造からか倉庫とされ、障壁画の破損も進んだと考えられる。その一方、本丸御殿と天守は建築としての重要性から永久保存することが国家として決定されたため、鎮台は明治20年（1887）、本丸から三之丸の新庁舎に移転し、同26年（1893）、本丸全体が陸軍から宮内省に移管された。陸軍期の名古屋城については、陸軍の日誌類等に記録されているが、文字資料が大半で絵図類は少ない。一方、本丸御殿部分に「鎮台本部」と記された稀有な図面が、名古屋城で長く保管されてきた。詳細は今後の検討が必要であるが、類例は現時点では他になく、希少な一葉である。

五 西北隅櫓と清須城

西北隅櫓は、名古屋城西北（戌亥）の曲輪である御深井丸の西北隅に立つ三階建ての櫓。かつては戌亥櫓・清州櫓・三階櫓などと呼ばれ、昭和5年（1930）国宝に指定された。昭和20年（1945）の空襲は御深井丸には及ばなかったため焼失を免れ、今は重要文化財になっている。北と西に外堀が迫り、現存する重要文化財三櫓（西北隅櫓・西南隅櫓・東南隅櫓）中、満々と水をたたえる堀越しに雄姿が望める唯一の櫓である。清須城の天守を移したとの伝承が諸書に記され、確かに転用材とみなされる古材が多用されている。創建年代については、昭和30年代の解体修理時に発見された末年と記す墨書から、元和5年（1619）の完成という説が提示され定説化している。しかし、元和5年は、築城期に行われた清須越からかなりの年月を経ており、同じく清須越の伝承を持つ黒木書院とあわせ、多くの問題を含んでいる。

キャプション（特記のない限り名古屋城総合事務所蔵）

1 山水図 重要文化財名古屋城本丸御殿黒木書院一之間南側襖絵 江戸時代前期

本丸御殿は、昭和20年（1945）5月14日の空襲により全焼し、床之間などの壁貼付絵は建物とともに焼失した。一方襖絵は、空襲直前の3月末頃に取り外され城内御深井丸の乃木倉庫に保管されていたため、奇跡的に焼失を免れた。黒木書院の襖絵は、一之間・二之間計33面が現存し、すべて重要文化財に指定されている。画題は、一之間が山水（瀟湘八景）、二之間が四季耕作で、各室襖の裏面（廊下側）に雪中柳鷺が描かれる。本資料は、一之間南の襖。本紙破損が著しいが、緑青（緑色の絵具）が比較的残存している。

2 山水図 重要文化財名古屋城本丸御殿黒木書院一之間東側襖絵 江戸時代前期

（本文一部略）本資料は、一之間東の襖。当時すでに古様であった周文様・牧谿様などの中国伝来の様式に従い、狩野派画人が描いたと考えられる。

3 四季耕作図【柳・橋】 重要文化財名古屋城本丸御殿黒木書院二之間東側襖絵 江戸時代前期

黒木書院は、一之間・二之間とも八畳の小部屋で、間仕切りとして襖が四枚ずつはめられていた。二之間では、春の田植から秋の刈入までの稲作風景が、東西南北の四方に描かれていた。稲作を描く絵画は耕作図と呼ばれ、舶載された中国絵画をもとに室町時代から描かれてきた。安定した米作りは最重要の政治案件であり、為政者のまわりを飾る画題として好まれた。また、山水・人物・花鳥という狩野派における画題の序列では上から二番目の画題であり、この点でも二之間にふさわしい。

4 四季耕作図【田植】 重要文化財名古屋城本丸御殿黒木書院二之間南側襖絵 江戸時代前期

黒木書院二之間には、春の田植から秋の刈入までの稲作風景が四方に描かれていた。（本文中略）なお右から三枚目の襖は右側と図が繋がらず、錯簡があると考えられる。

5 四季耕作図【刈入】 重要文化財名古屋城本丸御殿黒木書院二之間西側襖絵 江戸時代前期

二之間の耕作図は、東面に春先の田の準備、南面に初夏の田植、西面に秋の収穫を描く。よって季節は時計回り（右回り）に展開している。名古屋城本丸御殿上洛殿などの江戸時代以降の障壁画では、季節は反時計回り（左回り）に移るのが定石となっているが、黒木書院の耕作図はそれとは逆回りであり、「四方四季」（北に冬、東に春、南に夏、西に秋）という古様な方位にならうとわかる。ここからも、黒木書院障壁画の模古的ともいふべき特殊性がうかがわれる。

6 四季耕作図【山水】 重要文化財名古屋城本丸御殿黒木書院二之間北側戸襖絵 江戸時代前期

戦前に撮影されたガラス乾板写真によれば、二之間北側は、左端（西寄り）に半間幅の壁貼付絵、その右に半間の戸襖（左方向への引戸）、その右（東寄り）に一間幅の壁貼付絵が続く、異例の構成であった。本襖は中央の戸襖（杉板戸）で、両側の壁貼付絵は戦災で焼失した。絵は、米を水に浸す浸種の場面。梁楷様という中国の古い筆様に倣っているが、筆者は近世狩野派と見てよい。また浸種は本来春の作業であるのに、あえて雪の景とし四方四季を守っている。

7 雪中芦鷺図 重要文化財名古屋城本丸御殿黒木書院二之間南入側北側襖絵 江戸時代前期

南側廊下には、雪の積もった柳・芦・白鷺という花鳥図の伝統画題が、一之間・二之間の四間幅、すなわち襖8面にわたり描かれている。二室を通し同じ画題を描くのは異例で、本来は一室の襖絵であったものが、黒木書院建設時に改装された立て込まれた可能性が高い。また御殿では、山水、人物、花鳥の三画題を各棟に配するのが定法である。黒木書院は、一之間の山図、二之間の人物図（耕作図）、入側の花鳥図（芦鷺図）と、山水・人物・花鳥が揃っており、二室のみという制約の中で決まりを遵守していることがわかる。

8 雪中柳鷺図 重要文化財名古屋城本丸御殿黒木書院一之間南入側北側襖絵 江戸時代前期 (本文略)

9 梅花雉子小禽図 重要文化財名古屋城本丸御殿黒木書院東入側西側襖絵 江戸時代前期

白梅、薔薇、雉子が描かれる。『金城温古録』は黒木書院入側襖絵のモチーフとしてこれらを列举しており、『金城温古録』成立時に本襖が黒木書院にはまっていたことが確認できる。しかし、本襖は、黒木書院の他の襖とは技法や紙質、紙幅が異なる。また引手は、明治26年（1893）に宮内省が黒木書院用に一括して新調した小振りの引手であるが、引手周囲に紙が補われており、明治以前は一回り大きい引手がはまっていたことを示している。他の襖にはこのような補紙はなく、本襖のみ、他の襖とは異なる建物から黒木書院に転用された可能性が高い。

10 梅花雉子小禽図 引手 名古屋城本丸御殿障壁画 引手 明治25年（1892）

平成の本丸御殿復元工事に先立ち、調査のため襖から外した引手。非破壊の蛍光X線分析により全体から硫黄が検出され、硫化作用を利用した煮黒味という技法を用い黒く色付けしていたことが明らかになった。一方、文様や魚々子の陰刻部から金が検出され、金泥の類を擦りこんでいたと推定された。本丸御殿は、明治26年（1893）から明治天皇の御宿泊所とされ宮内省が管理した。宮内省の『工事録』に、濃尾震災復旧工事として名古屋の鉄物業岡谷惣助が引手30個を新作し5個を修理したことが記載されている。鋳物や銅器制作で著名な笹屋（現岡谷鋼機株式会社）の明治期の仕事としても貴重である。

11 水腰障子 名古屋城本丸御殿黒木書院一之間南側西から一本目 寛永11年（1634）新作

明り取り用の薄手の紙障子。全四本が名古屋城に伝えられてきた。外寸は黒木書院の絵襖と等しく、下框に「南側西より一」「南側西より二」などの墨書がある。寸法や枚数からこの紙障子が入る建物は黒木書院しかなく、寛永11年の上洛殿造営にあたり、二枚引の絵襖とともに室内と廊下の境にはめ込まれたと推定できる。昭和20年（1945）、御殿の絵襖とともに乃木倉庫に運びこまれ戦災焼失を免れた、旧国宝の貴重な建具である。初公開。

12 五条橋擬宝珠

全六基のうち4基に「五条橋 慶長七年壬刀 六月吉日」という籠字による刻銘がある（刀は寅の異体字）。慶長7年（1602）は名古屋築城以前であり、同年清須川の五条橋用に作られ据えられた擬宝珠を、清須越以降に作られた堀川の橋に移し、橋自体を五条橋と呼んだことがわかる。信長、信雄、松平忠吉、義直など代々の為政者から黒印状を給付され江戸時代を通じ尾張藩御鋳物師の筆頭であった水野太郎左衛門家に、「五条橋擬宝珠」と題された縮図（見取図）があり、本資料と同じ銘が記されている。水野家初代太郎左衛門は鍋屋上野出身の鋳物師で、文禄2年（1593）に二代太郎左衛門が清須に移り、慶長16年（1611）、三代が清須越により名古屋城下の鍋屋町に移転した。よって本擬宝珠は二代の作となる。五条橋は、明治34年（1901）に修理され、昭和13年（1938）コンクリート製となり、旧擬宝珠6基が名古屋城に運ばれた。その内の銘のある4基は重く、首元で上部と下部が接合され大きな釘穴が複数ある。銘のない2基は比較的軽く、肩で上部と下部が組み合わされ、釘穴は小さく打ち換えられた痕跡がない。また江戸期の絵図類では、五条川の擬宝珠は4基しか描かれていない。よって無銘の2基は、明治期の新作と考えられる。

13 名古屋御本丸御殿中御絵 原本 江戸時代後期 明治写

江戸時代後期、尾張藩御絵師（御用絵師）の神谷晴真が、本丸御殿障壁画の筆者を鑑定した記録。黒木書院一之間・二之間・朝顔廊下の襖絵について、「周文の絵手本に従って松栄が描いた」と推定している。周文は室町期の幕府御絵師で、中国風の癖の強い作品を描いた。松栄は狩野探幽の祖父にあたる周文の次世代の御用絵師で、湿潤な筆法を特徴とした。黒木書院の襖絵は、中国風の山水図を柔らかな筆使いで描いており、この意味で晴真の見立ては当を得ている。なお朝顔廊下の壁貼付絵は、京都の妙心寺天球院障壁画のように、金地に群青で朝顔の花を描き、垣根には胡粉を盛上げ緑青の葉を這わせる図が想像されやすい。しかし、本書や『金城温古録』から、室町水墨風の墨画淡彩であったことがわかる。

一黒木之御間御次共山水之御画并朝顔之 御廊下共 右周文以図松栄之筆（中略）右、拝見罷出、鑑定いたし候。

14 金城録 第五冊 原本 江戸時代後期 明治写

名古屋城について詳述する江戸後期の書物『金城温古録』の、明治期の抄出本。黒木書院について、「清洲越と言われ、神君家康の御宿殿という伝承があり、また一之間の絵はきわめて古様で、淡い色調で描かれ金銀も使用されておらず、古法眼元信の筆と言われていた」と記述している。狩野元信は、松栄の父で、室町幕府の御絵師。江戸期には古法眼と称され名人と見なされており、古手の水墨画はおおむね元信作とされていた。

東側御壁張絵梅椿シヤウビン雉子西側御次境御襖東 面絵雪ノ柳二鷺 右此御殿ハ清洲越ヲ称シ甚古質ノ体アリ絵淡彩ニシテ 金銀ノ着色モ見ヘズ御本間ノ細画ハ古法眼元信ト云々又 神君様御宿殿ニモ成セラレシ所トモ云フ

15 名古屋城郭之図 原本 明治6～20年（1873～1887）頃成立

本丸御殿に「鎮台本部」と記す稀有な図面。2枚に分かれている。現状は青焼きによる複写図面であるが、「明治初年名古屋鎮台に於いて実測せる第三師団経理部所蔵の図によ□」という付箋から、原図は、名古屋鎮台が本丸外に移転した明治20年（1887）以前に名古屋鎮台が作製したものとわかる。二之丸の兵舎には「なし」や「✓」の添え書きがある。陸軍期の二之丸や外堀、雁木（階段）などの概要が分かる貴重な図である。初公開。

16 ガラス乾板写真

①【黒木書院一之間西側】 昭和15～16年（1940～41）頃撮影

戦前、国宝建造物調査の一環として名古屋市が撮影した大量のガラス乾板写真のうちの一枚。黒木書院一之間の床之間と北側を撮影している。床之間と違棚の壁貼付絵は、昭和20年（1945）5月14日、御殿とともに焼失したが、この写真から、峩々たる雪山を描く周文様山水図であったことが知られる。

②【黒木書院二之間より一之間西北を望む】 昭和15～16年（1940～41）頃撮影

手前に二之間、奥に一之間が写っている。天井は棒縁天井、欄間は箴欄間、長押上小壁は障壁画ではなく漆喰仕上という、簡素な仕様である。小振りな襖引手は宮内省による明治25年（1892）の補作であるが、引手跡が見えない所から、当初も小さめの引手がはめられていたと考えられる。

③【黒木書院東入側北側】 昭和15～16年（1940～41）頃撮影

黒木書院二之間東側の廊下を南から撮った写真。屋根廂の小屋組がそのまま見える。二之間との境に、「梅花雉子小禽図襖」が写っているが、手前の「雪中芦鷺図襖」とは絵が繋がらず、襖に仕立て黒木書院に納める際に大きな改変があったことを物語っている。

17 金城録 第七冊 原本 江戸時代後期 明治写

西北隅櫓について、「三階御櫓と呼ばれており、戌亥御櫓の別称がある」とのべ、また、清州城の小天守という古書の記載を引き、清須城の北矢倉かという筆者奥村得義の私見を記している。西北隅櫓とは宮内省がつけた呼称であり、江戸期は三階御櫓が公的な名称であった。名古屋城の櫓は、大天守・小天守以外は外観二階建てで、三階建ての櫓は西北隅櫓しかない。

18 滝川家資料 名古屋市博物館蔵

滝川家とは、織田信長の重臣滝川一益の家臣で滝川姓を与えられた滝川忠征の家系。忠征は名古屋城普請奉行を勤め、そ

の子孫は代々尾張藩の要職についた。滝川家に伝来した文書のうち、数冊に「戌六月調」の朱筆があり、内容から、幕末期に鉄砲奉行や玉薬奉行から城代に提出された火縄銃や火薬類に関する調書と考えられる。滝川家では、安政2年（1855）12月から文久2年（1862）8月まで滝川又左衛門が城代をつとめており、戌とは文久二年の可能性が高い。幕末の動乱のさなか、配下に指示し、現実には収蔵されている鉄砲類の数量を点検させ、城内各所に配置すべき数や人員の割り当て、火薬制作費などを提出させたものとなる。とくに「三階御櫓始 御道具帳」は、三階御櫓（西北隅櫓）をはじめとする御深井丸の諸建造物に、驚くべき量の武器が貯蓄されていたことを記している。また武器の一部はここ西之丸の御米蔵にも詰め込まれていたことが知られ、幕末期の尾張藩における武器収蔵の実際が知られる貴重な資料となっている。

①【三階御櫓始 御道具帳】 文久2年（1862） 名古屋市博物館蔵

表紙に朱字で「戌六月調」とあり、文久2年の取り調べ帳と考えられる。三階櫓（西北隅櫓）、御旅蔵、麻木多聞などの御深井丸内の櫓や蔵に加え、ここ西之丸の一番から五番までの米蔵について、収蔵する鉄砲や玉、道具類の種類と数を克明に記し、修復履歴や今の存否を付箋等で注記している。『金城温古録』は、西之丸米蔵の虫害により嘉永3年（1849）以降備蓄米が他の長屋に移された事を記しており、本資料により、空になった米蔵が武器庫に転用されたことが明らかになる。

②【御筒配小割】 文久2年（1862） 名古屋市博物館蔵

本丸、二之丸、御深井丸から本町御門、巾下御門など、名古屋城内外の門や櫓、多聞などについて、鉄砲の種類と数、それを撃つための人数を記している。たとえばここ西之丸の月見櫓には、三百目矢筒二挺と、それを撃つ大筒打方四人を配するとし、天守への配置を含め計709人が必要とはじいている。現実の配置数ではなく、要時における必要数を予測したものと考えられる。

③【御有合等三つ物割并合薬製作割】 文久2年（1862） 名古屋市博物館蔵

白煙硝（精製した煙硝）、硫黄、麻木（灰の原料）という火薬の主材料について、今ある分量と今後購入すべき分量、毎年の購入費用の見積りについて記す。たとえば白煙硝は、11,739貫目保管しており、今般1300貫目買うとして、計13,039貫目になるという。領内で火薬を製造しようとしていたことも知られる。

19 伊勢湾台風被害状況写真 昭和34年撮影 「重要文化財関係書綴」に合冊

昭和34年（1959）9月26日の伊勢湾台風により、名古屋城は多くの樹木が倒壊するなど甚大な被害を受けた。名古屋城は昭和26年（1951）特別史跡に指定されていたため、名古屋市は文化財保護法にもとづき毀損届を文化財保護委員会に提出した。本写真は、その決裁に添付されたもの。西北隅櫓のたつ御深井丸には倒木が重なり、浸水も見られる。被災状況がよくわかる、生々しい写真である。初公開。

20 西北隅櫓 修理竣工図

西北隅櫓が建つ御深井丸は、明治維新後、本丸・二之丸とともに陸軍（名古屋鎮台・第六連隊）の所管となった。陸軍は、江戸期と同様、武器・弾薬を貯蔵する場として御深井丸を使用し続けた。とくに西北隅櫓には「第四弾薬庫」という新たな呼称を与え、修理・改装を加えつつ弾薬倉庫として使用した。明治42年（1909）、御深井丸一帯が宮内省に保管転換されると、西北隅櫓という呼称が宮内省により新たに与えられた。伊勢湾台風後、西北隅櫓の解体修理が行われ、昭和39年（1964）3月に完了した。これらはその際の修理竣工図。

①【名古屋城西北櫓矩形図】 昭和39年（1964）

②【名古屋城西北櫓北面千鳥破風詳細図】 昭和39年（1964）

21 西北隅櫓 用材

昭和30年代の解体修理時に取り外された西北隅櫓の部材の一部。西北隅櫓の部材としては不自然な柄穴があるなど、何らかの建物の部材を再利用したものとおもわれる。修理銘のある補修材もあわせて展示する。清須城内の建物詳細は知られておらず、伝承どおり西北隅櫓の用材の一部が清須城から持ち運ばれたとしても、どの建物のものかは判断できない。

①【三階 根太】

西北隅櫓では三階床の根太として用いられていたが、猿の頬に似た形の繰り抜きが等間隔に存在し、猿棒棹を受けた痕跡と見なされるところから、当初は桁であったと考えられる。当初の建物は猿棒天井を張っていたことになり、居室の類の可能性が高い。また櫓であれば、低層ではなく最上階の仕様と考えられる。木札：三階根太は通り三

②【一階 梁】

昭和30年代の修理時、墨書銘が見出され、享和2年（1802）に取り替えられた材であることが明らかになった。西北隅

櫓の江戸期の修理履歴は明らかでなく、貴重。

墨書：岩崎久米左衛門弟子 大工傳藏 作之 享和二年 壬戌 五月吉日

③【三階 根太】

櫓の根太。床板を釘打ちした跡がある。根太とは、床板を受ける部材で、大引の上に乘せる。修理報告書では、当初は鉋で仕上げていた桁を、西北隅櫓への転用時に手斧ではつった可能性があると指摘している。木札：三階根太 に通じ14本 目

22 西北隅櫓 銘板

①【一階 中仕切内法貫】

一階の内法貫（薄い横材）。壁下地に隠れる面に墨書があり、「未（み）九月」と記している。『重要文化財名古屋城西北隅櫓保存修理工事報告書』（昭和39年[1964] 3月名古屋市編集発行・文部技官高端政雄監修）では、西北隅櫓創建時の墨書とみなし、元和五年（1619）末年の創建という説を提唱した。ただし、現在墨書は薄れかけており、翻刻を含め再検討を要する。

墨書： 足代扣 同切松渡し 四石分 右ノ□□石 かわらやねに 三人宛在り 相より出仕 御つき申□ 未九月十一日 庄左エ門 二十五才 【翻刻は修理報告書による】

②【階段踊場床板】 大正5年（1916）

一階から二階にあがる階段の踊場の床板。「軍人に限り見学してよいが立って見てはいけない」と記す落書きが裏面にある。書いてから根太に釘打ちしており、釘跡が残る。大正5年（1916）、西北隅櫓は宮内省により修理された（宮内庁宮内公文書館蔵『名古屋離宮沿革誌』）。当時、名古屋城の二之丸には陸軍第六連隊の兵舎が立ち並び多くの軍人が詰めていた。文意からも、この床板は大正五年時の補修材と考えられる。

墨書：軍人二限り入ルヲ許ス 但シ立ち見ルヲ禁ス

23 西北隅櫓 三層南側妻部破風鰭 戸時代前期

西北隅櫓最上階の妻部を飾っていた破風の鰭。裏に「南側」と記されている。昭和30年代の修理時、一階（初層）の東西南北にあった懸魚の鰭4組8点はすべて再使用されたが、三層南北妻部の鰭2組4点は状態が悪く新規に制作されることとなり、南側鰭1組2点が保存された。葉の葉脈などに見られる彫りは力強く、西北隅櫓創建期の当初材である可能性が高い。なお、向かって左側の葉部分の破片1点は、近年所在が確認できたもの。

24 西北隅櫓 六葉 寛文3年（1663）他

懸魚中央に打たれた六葉。4点が現存するが、大きさや技法は様々で、創建後繰り返された修理時の補修材が混在している。一層北側千鳥破風の六葉の裏には「寛文三年 卯八月日 大工佐助作」の墨書があり、寛文3年（1663）、佐助という名の大工が作ったものとわかる。創建から約50年後という早期の修理であるが、六葉は漆喰仕上げではなく木地が露出していたため、早くから腐食が進行したと考えられる。

25 名古屋城国宝建造物拓本

①【西北隅櫓一層東面千鳥破風懸魚拓本】 19-8 昭和前期

昭和5年（1930）名古屋離宮は名古屋市に下賜され、天守、隅櫓など創建以来の建物が国宝に指定された。名古屋市は、国宝建造物の悉皆調査（総合調査）を開始し、実測と拓本制作を推進した。展示の拓本はその一部。一階の千鳥破風の鰭部分。展示資料の鰭（三階南側）とはわずかに異なる。

②【西北隅櫓一層北出窓千鳥破風懸魚拓本】 19-13 昭和前期

西北隅櫓一階の北側千鳥破風の拓本。北側は外堀に面しており、足場を架けるのもむづかしい。おそらく簡易な足場のみ架けたと考えられる。

③【西北隅櫓一層北出窓千鳥破風六葉拓本】 19-14 昭和前期

六葉の拓本。樽の口と呼ばれる中央の部材は、突き出ており拓本がとりにくいため、別に採拓している。

新春特別公開 宮津熱田社の御宝物

愛知県知多郡阿久比町の「宮津熱田社」は、日本武尊を御祭神とする神社です。日本武尊の東征に従った丸氏が奉祀し、

名古屋城 西の丸御蔵城宝館企画展「家康の謎 名古屋城本丸御殿の黒木書院」出品作品

令和5年12月23日(土)～令和6年2月25日(日)
特記のないかぎり、所蔵は名古屋城総合事務所

1	後期	山水図	4面	重要文化財 名古屋城本丸御殿障壁画 一之間南側	江戸時代前期
2	前期	山水図	4面	重要文化財 名古屋城本丸御殿障壁画 一之間東側	江戸時代前期
3	後期	四季耕作図〔柳・橋〕	4面	重要文化財 名古屋城本丸御殿障壁画 二之間東側	江戸時代前期
4	後期	四季耕作図〔刈入〕	4面	重要文化財 名古屋城本丸御殿障壁画 二之間西側	江戸時代前期
5	前期	四季耕作図〔田植〕	4面	重要文化財 名古屋城本丸御殿障壁画 二之間南側	江戸時代前期
6	通期	四季耕作図〔山水〕	1面	重要文化財 名古屋城本丸御殿障壁画 二之間北側	江戸時代前期
7	後期	雪中芦鶯図	4面	重要文化財 名古屋城本丸御殿障壁画 二之間南入側北側	江戸時代前期
8	前期	雪中柳鶯図	4面	重要文化財 名古屋城本丸御殿障壁画 一之間南入側北側	江戸時代前期
9	前期	梅花雉子小禽図	4面	重要文化財 名古屋城本丸御殿障壁画 東入側西側	江戸時代前期
10	通期	梅花雉子小禽図 引手	1点	重要文化財 名古屋城本丸御殿障壁画 引手	明治26年(1893)
11	通期	水腰障子	1本	4本中西から1本目	寛永11年(1634)
12	通期	五条橋擬宝珠	6基		慶長7年(1602)
13	通期	名古屋御本丸御殿中御絵	1冊		原本江戸時代後期 明治写
14	通期	金城録 第五冊 黒木書院	1冊		原本江戸時代後期 明治写
15	通期	名古屋城郭之図	1式		明治
16	通期	ガラス乾板 黒木書院	3枚		昭和14～15年(1939～40)撮影
17	通期	金城録 第七冊 清洲櫓	1冊		原本江戸時代後期 明治写
18	通期	滝川家資料	3綴	三階御櫓始御道具帳・御筒配小割・御有合等三つ物割并合葉製作割	文久2年(1862) 名古屋市博物館蔵
19	通期	伊勢湾台風被害状況写真	1式		昭和34年(1959)撮影
20	通期	西北隅櫓 修理竣工図	2枚		昭和39年(1964)
21	通期	西北隅櫓 用材	1式		江戸時代前期
22	通期	西北隅櫓 銘板	1枚		江戸時代前期
23	通期	西北隅櫓 三層南側妻部破風 鰯	1組		江戸時代前期
24	通期	西北隅櫓 六葉	4点		江戸時代前期
25	通期	名古屋城国宝建造物拓本	3枚		昭和前期
特別出品		羽子板	2点		江戸時代後期 宮津熱田社寄贈
特別出品		破魔矢・簀	1式		江戸時代後期 宮津熱田社寄贈

前期 令和5年12月23日(土)～令和6年1月22日(月) 後期1月23日(火)～2月25日(日)
展示期間は予告なく変わることがあります

（６）特別展「守山の御寺 大森寺の宝物」

会期 令和6年（2024）3月2日（土）～5月7日（火） 67日間

前期：3月2日（土）～4月8日（月） 38日間

後期：4月9日（火）～5月7日（火） 33日間

入館者数 26,769人（1日平均892.3人）（令和5年度分の入館者数のみ）

出品件数 40件

展示担当 堀内亮介、朝日美砂子

印刷物 解説目録 カラー A4 8頁 令和6年（2024）3月1日発行

特別協力 大森寺

趣旨

新緑と紅葉の寺として知られる名古屋市守山区の浄土宗大森寺は、尾張藩二代藩主徳川光友の生母である歓喜院（お尉、乾の方、寛永11年[1634]没）の菩提寺です。寛永14年（1637）に光友が母の菩提を弔うため江戸小石川の伝通院内に創建したのがはじまりで、寛文元年（1661）に歓喜院ゆかりの現在地に移転して以来、尾張徳川家の庇護を受け、崇敬を集めてきました。創建時の建物は明治初年に焼失しましたが、光友をはじめとした尾張徳川家ゆかりの品々や創建以来の黒印状など、数多くの美術工芸品や歴史資料が伝えられています。今回の展覧会では、大森寺の宝物を一举に公開し、その歴史を紹介します。ほとんどが初公開の名品であり、古刹の驚くべき奥深さを伝えてくれます。

作品解説

文章の改行・ルビ、挿入写真・図面は省略した。ここに収録しないパネル・キャプションもある。作品9・10・11・12・32・33の執筆は朝日美砂子、それ以外は堀内亮介が執筆した。

第一章 大森寺の創建

大森寺は尾張藩二代藩主・徳川光友（1625～1725）の生母である歓喜院の菩提寺として創建された浄土宗寺院である。光友は亡母の菩提を弔うため、寛永14年（1637）に江戸小石川にある伝通院内に大森寺の前身となる廟所を建立し、歓喜院と号した。その後、寛文元年（1661）に歓喜院の出生地である尾張国大森村に廟所を移転し、興旧山歓喜院大森寺と寺号を改め、知恩院末寺として創建された。寛文11年（1671）に光友が200石を寄進、元禄3年（1691）には100石が追加寄進され、以後江戸時代を通して寺領300石となった。大森寺は尾張徳川家や徳川一門の菩提寺である「尾州御寺」のうちの一寺として、尾張徳川家による手厚い庇護を受けた。光友と歓喜院の菩提を弔う寺院として、現在にいたるまで追善供養がなされている。本章では、大森寺の創建に関する作品をもとに、大森寺の歴史を紹介する。

【尾州御寺】

尾張徳川家と徳川一門の菩提寺で構成された尾張国内で最高格の浄土宗寺院を指す。明治以降、尾張徳川家の仏事を執り行うため、建中寺・相応寺・大森寺・高岳院・性高院の5寺で組織された（のち清浄寺を加えて6寺となる）。江戸時代には尾張藩主にまみえることを許された格式高い寺院であった。

【大森村と水野街道】

大森寺が創建された春日井郡大森村（現・名古屋市守山区）は、名古屋城北東約10kmにあった水野街道沿いの村で、二代光友の生母である歓喜院お尉の出身地であった。水野街道は名古屋城下から大曾根、小幡、大森などの諸村を経由して水野（現・瀬戸市）に向かい定光寺に至る。初代義直は鷹狩のためこの道を何度も通行した。後世の逸話では、義直と歓喜院が出会ったのは鷹狩に行く途中の大森村であったとされる。

【小石川伝通院】

正式名称は無量山寿経寺。応永22年（1415）に浄土宗第七祖了誉聖阿によって開山された。慶長8年（1603）、徳川家康の生母である於大の方（伝通院）の菩提寺となり、法号にちなんで伝通院と改称された。慶長13年（1608）には家康によって大規模な伽藍が整備、元和9年（1623）には幕府から寺領830石が安堵され、増上寺・寛永寺とともに將軍家の

庇護を受けた。院坊を多く持つ大寺院で、徳川家にゆかりの深い人々の廟所も多くあった。数度の火災や太平洋戦争の戦火によって、現在は創建当時の伽藍が失われているが、名刹として著名である。

1 尾張名所図会 天保11年（1840）/明治13年（1881）後編刊行 名古屋城総合事務所蔵

尾張藩士岡田文園らが編纂した尾張国の地誌。後編巻四に大森寺の記事がある。寛永14年（1637）に二代光友の生母である歓喜院（お尉）の廟所として江戸小石川伝通院内に創建され、寛文元年（1661）にお尉の出生地である尾張国大森村に移転して寺号を大森寺と改めたこと、元禄3年（1690）に常念仏堂（常行堂）が建立されたことなど、大森寺の概略が記されている。尾張藩士で画家の小田切春江による挿絵が掲載され、水野街道から延びる参道や山麓に立ち並んだ伽藍など、江戸時代の大森寺の様子が視覚的に分かる。

2 興旧山大森寺草創記 元禄7年（1694）大森寺所蔵

大森寺三世然誉義典が作成した大森寺の縁起。跋文によると、創建者である尾張藩二代藩主光友の功績および寺院発展の礎を築いた開山信譽大龍、二世深誉吞益の徳を伝えるために作成したとされている。当記によると、大森寺の前身である歓喜院の創建には光友の祖母相応院お亀が深く関わっており、中国唐の皇帝高宗が亡母のために慈恩寺を建てた故事をもとに、幼い光友に生母の菩提所として歓喜院を建立させたことが分かる。その後成長した光友は、大森村に歓喜院を移転させ大森寺を創建した。

3-1 黒印状目録覚 明治3年（1870）閏10月 大森寺所蔵

大森寺に伝わった歴代尾張藩主による寺領宛行の黒印状目録。尾張藩では藩主が代替わりで名古屋に初入国した際に黒印状を発給し、所領安堵をするのが慣例であった。大森寺には、寛文11年（1671）に二代光友が寺領寄進の黒印状を出して以来、十六代義宣までの黒印状が12通伝わっている。代替わりの黒印状を出さなかった七代宗春、早世して名古屋に入国しなかった五代五郎太、十一代斉温、十三代慶藏の四名を欠くが、発給された黒印状はすべて揃っている。

3-2 徳川光友黒印状 寛文11年（1671）2月12日 大森寺所蔵

寛文11年に二代光友が大森寺に発給した寺領寄進の黒印状。春日井郡の新居村新田118石余と大森村新田81石余の合計200石を、歓喜院の菩提所として寄進するほか、寺領の一部にかかる諸役を免除することが記されている。2月12日は歓喜院の命日であり、光友が生母の命日に合わせて寺領を寄進したことが分かる。なお、大森寺に伝わる黒印状は元禄3年「徳川光友黒印状」（作品3-3）を除いて12日付であり、意図的に歓喜院の月命日に合わせていたことが推測される。

3-3 徳川光友黒印状 元禄3年（1690）6月18日 大森寺所蔵

元禄3年に二代光友が大森寺に発給した寺領加増の黒印状。春日井郡の上野村西新田69石余と今村寅新田30石余の合計100石を、歓喜院の菩提を弔うための常念仏堂（常行堂）を開基するために加増することが記されている。常念仏堂は同年8月12日、光友や尾張藩によって大々的に開眼供養がおこなわれた。この寄進によって、大森寺の寺領は合計300石となった。以後幕末まで寺領300石が維持され、尾張徳川家一門の菩提寺として歴代藩主から手厚い庇護を受けた。

4 大森寺山絵図 元禄3年（1690）頃 名古屋市蓬左文庫所蔵

大森寺の伽藍配置を貼紙で示した平面図。元禄3年に建立された常念仏堂があるため、同時期に作成された図面とみられる。水野街道につながる参道から山門（大門）と中門を通して境内に入るようになっていた。境内には橙色で示された本堂・書院・庫裡、黄色で示された常念仏堂がある。境内周囲には青色と紺色で土居と堀が巡らせてあったことが分かる。江戸時代の建物は明治8年（1875）の火災で多くが失われたが、山門等は難を逃れたほか、平成27年（2015）には絵図の位置に本堂が再建されている。

5 信譽大龍上人号証文 延宝3年（1675）知恩院38世 玄誉萬無筆 大森寺所蔵

大森寺開山信譽大龍（?～1671）の入寂後に知恩院三十八世の玄誉萬無（1607～1681）が天皇から賜った上人号を認めた証文。大森寺は知恩院末寺で、信譽の功績を讃えた玄誉が朝廷に奏達して上人号の綸旨を得たことが知られる。信譽は肥後国（現・熊本県）出身で、はじめ熊本西福寺の叡誉に師事し、江戸に出て小石川伝通院内の松林院の院主となった。伝通院では光友の祖母相応院お亀の知遇を得て、寛永14年（1637）歓喜院創建時に院主となり、寛文元年（1661）歓喜院

の大森村遷座にともない大森寺開山となった。

6 深誉吞益上人坐像 元禄7年(1694) 木造 大森寺所蔵

大森寺二世深誉吞益(?~1694)の肖像をあらわした坐像。老年の姿で、黒漆が塗られた袈裟をまとい、左腕に数珠をかけて合掌し、曲録(椅子)に座っている。目は玉眼が嵌入され、頭部や両手には彩色の跡が残る。椅子の座面裏にある墨書によると、元禄7年の深誉入寂後、大森寺三世然誉義典が深誉の功績をたたえ、深誉の姿をあらわした肖像を製作したことが分かる。深誉は小石川伝通院で信誉の師事を受け、延宝元年(1671)の信誉入寂後に大森寺二世となった。元禄3年(1690)の常念仏堂開基で寺領百石を加増されたため、位牌には「中興」の銘がある。

7 阿弥陀如来立像 平安時代後期 伝恵心僧都源信作 木造 大森寺所蔵

大森寺に伝わる仏像。『張州雑志』(出品25)には、元禄3年(1690)に建立された常念仏堂の本尊として、恵心僧都作で長さ三尺四寸の「安阿弥陀仏」が記されており、この立像のことを指す可能性が高い。大森寺の常念仏堂は光友の祈願で大々的に建立されており、浄土教を大成した恵心僧都作と伝わる立像を本尊としたものとみられる。印相(手指の構え)は来迎印を結んでいる。光背付きの厨子と踏み割蓮華座は後世の製作とみられるが、立像本体は平安時代末から鎌倉時代初期の特徴を有している。

第二章 大森寺の寺宝 その1

現在の大森寺には、大森寺を創建した二代光友にゆかりのある寺宝が数多く残されている。光友自筆として伝わる水墨画(「蓮鷺図」・「芦葉達磨図」)や「仏頂尊勝陀羅尼」は、尾張藩士内藤東甫が九代宗睦の内命によって編纂した地誌である『張州雑志』にも掲載されており、江戸時代から寺宝として大切に扱われていたことが知られる。また、大森寺に伝わる諸尊も光友によってもたらされたとの寺伝があり、さらに、光友寄進と記録されている什器も数多く残されている。大森寺と光友の親密な関係が寺宝からもうかがえる。本章では、光友自筆の水墨画や光友から拝領したと伝わる諸尊・什器を中心に、大森寺が所蔵する貴重な寺宝を紹介する。

8 阿弥陀来迎図 元禄4年(1691) 寄進 伝恵心僧都源信筆 大森寺所蔵

来迎図とは念仏行者の臨終のとき雲に乗って降臨し、極楽浄土へと導く阿弥陀如来の姿を描いた仏画。浄土宗で特に大切にされた。手足や雲に後世の補筆が入り、光明も後筆の可能性のあるものの、体は描かれた当時の状態を残しており、製作は室町時代までさかのぼれる。箱書には「恵心僧都源信筆」とあり、『張州雑志』(出品25)の寺宝目録にも「恵心僧都筆」と書かれている。蓋裏書には元禄4年に愛知郡井戸田村の岡本平左衛門が親族の菩提を弔うため寄進した旨が記されており、伝来の経緯が分かる。

9 蓮鷺図 江戸時代 17世紀半ば頃 徳川光友筆 大森寺所蔵

蕾や散り際の蓮の花と白鷺を描く。大森寺の前身歓喜院の開山信誉による「宰相中将様御筆 信誉」の箱書があり、光友が藩主を継ぐ二十六歳以前の作と知られる。江戸小石川の歓喜院に納められ、大森寺建立にともない守山に移されたと考えられ、大森寺の歴史を物語る寺宝として、また若き光友の作品として貴重である。

10 竹雀図 江戸時代 17世紀後半 徳川光友筆 一幅 紙本墨画 大森寺所蔵

『尾陽源義』の大きな朱文円印を画面上方に捺しており、光義と名乗った時期の二代光友の作と知られる。画面は、小さな雀の重みで竹の小枝がしなう一瞬を略筆で描く作品で、玉潤、牧谿ら中国宋元画人の様式をひく。尾張徳川家は、室町將軍家伝来の玉潤、牧谿の名品を家康から与えられており、光友はそれら中国古画の真髄を学んでいた。

11 山水図 江戸時代 17世紀後半 徳川光友筆 大森寺所蔵

山、木々、水辺を描く水墨画。胸中の理想郷を描くという、中国古来の水墨山水図の原点に立ち返った作品。將軍や藩主の書画は、狩野派の規矩にとらわれない自由な画風のものが多いが、とくに本作品は、貴人による山水図の白眉といってよい。また表装は桐紋を金泥で描く大胆な描表装である。

12 芦葉達磨図 江戸時代 17世紀後半 伝徳川光友筆 大森寺所蔵

禅宗の祖達磨が中国の大河揚子江を一葉の芦に乗り渡ったとの伝説を描く。落款はないが、箱書に「瑞龍院殿御筆 達磨絵 信譽拝領」とあり、瑞龍院殿（光友）から大森寺開山信譽が拝領したものとわかる。内藤東甫編『張州雜誌』は、瑞龍公御筆の寺宝として「白鷺図画」と「達磨図画」をあげており、「蓮鷺図」（作品9）と本図が該当すると考えられる。

13 御深井釉白象香炉 江戸時代 18～19世紀 大森寺所蔵

尾張徳川家から寄進された白象の形をした香炉。四肢を曲げてうずくまる姿が表現されている。全体に白濁釉がかけられており、仏教で神聖視される白象をあらわしている。胴の中は空洞になってすすけており、目・口元・耳裏には小さな開口部があるため、香炉として使用されたことが分かる。

14 御深井釉双葉葵文手水鉢 江戸時代 18～19世紀 大森寺所蔵

尾張徳川家から寄進された大型の手水鉢。「白象香炉」（出品13）と同様、全体に白濁釉が美しくかけられている。全形は朝顔形（ラッパ状に開いた形）をしており、大きな口縁部は外側に開くように縁取りがされている。簡略化された双葉の葵文が胴部を巡るように施されており、シンプルではあるが美しい造形となっている。

15 「御深井釉牡丹唐草文水甕」 江戸時代 18～19世紀 大森寺所蔵

尾張徳川家から寄進された水甕。両肩にアーチ状の突帯（持手部分）が付いており、双耳壺のような形状をしている。また、胴を巡るように突帯が付いており、文様と無文様の境目になっている。文様は牡丹と唐草文を立体的に表現しており、特に唐草文には呉須（藍色に発色する塗料）を挿して目立たせている。腰下部には水抜き穴があり、栓をするようになっている。本来は蓋付きだが当初の蓋は失われている。

【御深井釉】

江戸時代、名古屋城の下御深井御庭では、尾張藩の御庭焼である「御深井焼」が焼成されていた。御深井釉とは「御深井焼」に使われていた灰釉系の釉薬のことを指す。尾張徳川家ゆかりの寺院には、藩主から寄進されたとされる御深井釉の什器が数多く伝来しており、大森寺にも数点が寺宝として伝来している。

16 阿弥陀如来坐像（伝嵯峨光仏） 室町～安土桃山時代 15～16世紀 徳川光友寄進 大森寺所蔵

現・大森寺奥院（明照殿）の本尊である阿弥陀如来坐像の内側に安置される小像。もとは千仏光（小さな仏が並んだ光背）の一部とみられる。像高約5.5cm、表面には漆箔が施され、頸部と胸部に光沢のある粒子が確認できる。二重の厨子に入っており、内側の厨子は精緻な金時絵が施された江戸前期の製作、外側の厨子と蓮台は江戸後期の製作とみられる。「嵯峨光仏縁起絵巻」（作品17）の冒頭にある、明治23年（1890）に二十世住職武田芳淳氏が記した貼紙には、この坐像は光友から拝領した「嵯峨光仏」とであると書かれている。

【嵯峨光仏】

嵯峨光仏とは本来、京都嵯峨野の清凉寺に安置されている国宝阿弥陀三尊像の中尊・阿弥陀如来坐像のことを指す。もとは嵯峨天皇の皇子・源融の別荘である棲霞観を寺に改めた棲霞寺（清凉寺の前身）の本尊で、源融が発願して完成させた仏像とされる。この嵯峨光仏は慶長元年（1596）の地震によって、当時の光背が破損したことが知られている。清凉寺にある嵯峨光仏と大森寺に伝わる嵯峨光仏の関係は現時点で不明だが、破損した光背にあった千仏光のひとつが光友寄進の「嵯峨光仏」として大森寺に伝来した可能性がある。

17 嵯峨光仏縁起絵巻 江戸時代 18世紀前半 曇譽忍海（号・海雲）筆 大森寺所蔵

清凉寺に安置される嵯峨光仏の由緒を記した絵巻。江戸増上寺宝松院九世で書画に秀でた曇譽忍海（1696～1761）によって描かれた。彩色された絵五段と詞五段で構成されているほか、清凉寺の本尊である釈迦如来の由緒についても記されている。巻末には増上寺四十六世の妙誉定月（1687～1771）による六字名号（南無阿弥陀仏）が認められており、増上寺と大森寺が深い関係にあったことがうかがえる。光友が大森寺に伝えた「嵯峨光仏」の由緒を示す絵巻であることから、寺宝として伝来したとみられる。

【17 補足説明】

展示したのは絵第四段。後宇多天皇の時代（鎌倉時代後期）、嵯峨光仏を深く信仰していた称念法師が四国に向かう船上で嵐に襲われた際、念持仏（携帯して拝むための仏像）である嵯峨光仏の化仏を海に投げ入れて嵐を鎮める場面が描かれる。一年後、称念法師が同じ海を渡った際、海神の遣いとして竜宮から遣わされた亀（左上に描かれている）が念持仏を返しにやってきて、称念法師が嵯峨光仏の威光に感服する構成となっている。

第三章 歓喜院お尉と徳川光友

歓喜院お尉は二代藩主光友の実母でありながら、その経歴には不詳な点が多い。江戸中期に編纂された尾張藩士の系譜を記した『士林浜廻』によると吉田家の出身とされているが、後世の随筆では元は吉田家に縁故のある大森村百姓の娘であるとされている。歓喜院の経歴で確実なのは、大森村の出身であること、初代義直に見初められ寛永2年（1625）に光友を出産したこと、ほどなくして光友と引き離され江戸に上り、義直の母である相応院（お亀）の屋敷に住んでいたこと、寛永11年（1634）2月12日に死去したことである。幼少期の光友は名古屋で養育されており、寛永10年（1633）に義直の正室である高原院春姫と共に江戸に上るため、歓喜院は光友と会うこともほとんどなかったとみられる。本章では、歓喜院お尉の経歴や光友出生に関する逸話、若くして亡くなった母の菩提を弔うため、光友が大森寺の発展に多大な寄与したことを様々な史料から紹介する。

18 袂草 卷十 原本：江戸時代 19世紀前半 昭和10年写本 名古屋市蓬左文庫所蔵

尾張藩士朝岡宇朝（1794～1840）による随筆。お尉と初代義直の出会いに関する逸話が記される。お尉は元々大森村百姓の娘で、義直が鷹狩のため大森村を通った際、猪が現れて義直に突撃したところを、お尉が民家から飛び出て追い払った。感服した義直は、お尉を女中として召し抱えたという。この逸話の真偽は不明だが、後年には義直が大森村まで鷹狩に出向いた記録が存在するため、真実味をもった話として流布していたことが想定される。偉丈夫であった光友の母として、力強い人物像を想い描かれたことが分かる。

19 昔咄 卷五 江戸時代 18世紀前半 名古屋市蓬左文庫所蔵

尾張藩士近松茂矩（1697～1778）による随筆。光友出生に関する記事がある。御湯殿掛であったお尉は初代義直に見初められ、男子を懐妊した。義直は当初、お尉の懐妊を認めようとしなかったが、付家老の成瀬正虎が世話を引き受け、名古屋城外の矢崎左京屋敷で誕生したのが光友であるという。光友の出生については諸説あるが、お尉が義直や正室の高原院春姫を憚って城外で出産したのは事実で、他記録では、義直の母である相応院お亀や相応院の妹婿山下氏勝の尽力があったとされる（山下氏覚書）。

20 尾張徇行記 春日井郡徇行記 卷七 江戸時代 18世紀後半 名古屋市蓬左文庫所蔵

尾張藩士樋口好古（1750～1826）が藩領を巡検して採録した地誌。水野代官支配所として大森村があり、「興旧山大森寺草創記」（出品2）等を引用して大森寺の由緒が記される。お尉の経歴は松平君山の随筆『秋之寝覚』が引用される。お尉の父は大森村百姓の庄助で、庄助が仕えた手島勘兵衛と吉田加右衛門は兄弟であった。お尉と加右衛門は同宿であったことから、叔母と甥の関係になったが、実は他人であるという。真偽は不明だが『士林浜廻』では加右衛門はお尉の甥になっており、お尉の縁者であることは確かである。

21 黒漆塗七曜紋付乗物 江戸時代 19世紀 大森寺所蔵

お尉に所縁のある尾張藩士都筑家に伝来した引戸付きの駕籠（乗物）。正面上部と御簾の下部には都筑家の家紋である七曜紋をあしらった金具が打たれる。内装は後世の修復で棹は失われている。外装も一部修復とみられるが、家紋をあしらった金具から武家で使われた乗物と推測される。『士林浜廻』では、お尉は吉田家の出身とされ、都筑家は吉田家の分家にあたる。吉田・都筑一族の多くは光友時代に召し抱えられており、お尉との所縁によって尾張藩士になった家系であることが分かる。

22 徳川光友書状 元禄3年（1690）8月26日 大森寺所蔵

光友が大森寺の本寺である知恩院に宛てた書状。元禄3年8月12日に催行された大森寺の常念仏堂開基に際して、知恩院から尊簡（手紙）が贈られたことについての返礼を述べている。元は知恩院に宛てた書状だが、光友の花押が捺されている。

るため、大森寺の寺宝として大切にされてきたと思われる。光友はこれに先立つ元禄3年6月28日、大森寺に100石を加増（「徳川光友黒印状」〔出品3-3〕）している。光友は歓喜院の菩提を弔うため常念仏堂開基に尽力しており、大森寺や知恩院と深く関わっていたことがうかがえる。

23 尾張藩年寄衆連署書状 元禄3年（1690）8月12日 大森寺所蔵

元禄3年8月12日の大森寺常念仏堂開基の際、光友が犯科人の赦免を言い渡したことを成瀬長則ら尾張藩年寄（家老）が大森寺に通達した書状。別紙二通には犯科人の名と刑罰が記されており、これらの罪人が恩赦されたことが分かる。尾張藩では歴代藩主や将軍家に関連した大きな法要を営む際に恩赦がおこなわれており、特に建中寺や名古屋東照宮の別当寺院である尊寿院の法要では、江戸時代を通して度々罪人の恩赦がおこなわれていた。大森寺の常念仏堂開基が尾張藩にとって重要な法要であったことがうかがえる。

24 徳川光友禁制 元禄5年（1692）8月12日 大森寺所蔵

光友が大森寺に対して発給した禁制。光友の花押が捺されている。境内に家畜を放すこと、樹木を伐採すること、境内で殺生することを禁じている。尾張藩内の寺院には尾張藩主から禁制が出されていることが多い。大森寺にも光友から禁制が発給されたことが分かる。内容は江戸時代後期の『尾張徇行記』（出品19）や『張州雑誌』（出品25）にも引用されており、大門（山門）前に制札を立てて掲示されていたことが知られる。光友禁制が江戸時代を通して効力を持ち、大切に扱われてきたことが分かる。

25 張州雑誌 卷九十三 江戸時代 18世紀後半 名古屋市蓬左文庫所蔵

尾張藩士内藤東甫（1728～1788）が九代宗睦の内命で編纂した尾張国の地誌。卷九十三には春日井郡東部の村々のうち、大森村所在の仏閣として大森寺が載る。由緒のほか、大森寺の仏像についても記され、恵心僧都源信作の本尊「阿弥陀仏」と念仏堂の「安阿弥陀仏」（出品5）、智證大師円珍作の「阿弥陀仏像」、仏工春日作の「阿弥陀仏像」の四軀が安置されていたことが分かる。光友自筆の山門扁額「興舊山」と本堂扁額「大森寺」、黒印状、禁制、詠歌があることも記されており、光友ゆかりの寺院であることが強調されている。

26 仏頂尊勝陀羅尼 寛文11年（1671）2月24日 大森寺所蔵

二代光友が記した仏頂尊勝陀羅尼。尊勝仏頂は如来の頭にある肉髻を仏格化した「仏頂尊」のひとつ。陀羅尼とは古代インドで使われた梵語のまま仏に唱える文言のことで、この陀羅尼には罪障消滅の功德があるとされる。勢いのある文字で陀羅尼が記されており、光友の篤い信仰心がうかがえる。箱書には「式部卿様御家絶之時御母義様方御寄附 莊誉」とあり、光友の曾孫にあたる梁川松平家三代の義真（式部卿）が死去した享保14年（1729）に、義真の母現成院によって寄進されたことが分かる。

第四章 大森寺の寺宝 その2

江戸時代後期に尾張藩士の内藤東甫が九代宗睦の内命を受けて編纂した『張州雑誌』には、当時存在した大森寺の寺宝一覧が掲載されている。大森寺は、明治8年（1875）の火災によって本堂をはじめとする伽藍の大部分や寺宝を焼失しているため、『張州雑誌』に掲載された寺宝がすべて残されているわけではないが、一部は現在まで継承されており、長きにわたって貴重な宝物が受け継がれてきたことが分かる。本章では、おもに二代光友に関係の深い寺宝を紹介した第二章に引き続き、大森寺が所蔵する数々の寺宝を紹介していく。寺宝目録に掲載されていない宝物についても、貴重な品々が多くあり、創建時から代々にわたって尾張徳川家の庇護を受けてきた名刹の奥深さがうかがえる。

27 釈迦如来坐像 江戸時代 19世紀か 陶製 大森寺所蔵

大森寺境内奥にあるお堂に安置されていた陶製の仏像。平成初期に盗難未遂に遭った際、全身が破損し、現在はそのままの状態で保管されている。尊顔が失われているものの、螺髪の一部や体はほぼ残っている。袈裟部分は鉄釉が施され茶褐色になっており、衣のひだが細かく表現されている。螺髪には呉須が挿され、黒みがかった藍色が美しく残る。寺伝では、中国明から渡来した文人で、初代義直に仕えた陳元賛の作陶と伝えられる。この大きさの陶製仏は珍しく、破片となっているが貴重な仏像である。

28 普峯院京姫自筆和歌懷紙 江戸時代 17世紀後半 大森寺所蔵

光友の異母妹である普峯院京姫（1626～74）が認めた和歌懷紙。雲母摺の料紙は桜花と流水で装飾される。「中遊閣景寄石山」と題され、琵琶湖のほとりの眺望を詠んだ和歌が二首載る。『張州雜志』（作品25）にも掲載される寺宝である。京姫は初代義直と側室貞松院の間に生まれた。義直の子女は光友と京姫の二人だけであったため、大切に養育され、生涯の多くを名古屋で過ごした。八条宮智仁親王の子・幸丸（広幡忠幸）と婚姻し、名古屋に下向した忠幸との間に三代綱誠の正室となる新君をはじめと五人の子女をもうけた。

29 徳川光友詠歌懷紙 享保8年（1723） 竹屋光兼筆 大森寺所蔵

大森寺が二代光友から賜った詠歌を、後年に公卿の竹屋光兼（1682～1747）が認めた懷紙。金砂子を散らした料紙に、大森寺の繁栄を願った光友の詠歌が一首載る。この詠歌は『張州雜志』（出品25）にも引用されており、元禄3年（1690）の常念仏堂開基の際に詠んだことが知られる。裏書により、当品は大森寺三世然譽が寄進した懷紙だと分かる。「興旧山大森寺草創記」（出品2）を作成するなど、大森寺の由緒を継承しようとしていた然譽が、光友から賜った詠歌を後世まで残すために製作したことが推測される。

30 伝圓光大師法然筆書跡 江戸時代 18世紀前半寄進 大森寺所蔵

中国唐代の高僧善導大師が著した「般舟讃」の一部を記した書跡。善導は浄土思想を確立した人物で、浄土宗の開祖である法然の思想に多大な影響を与えた。「般舟讃」は浄土宗で重視される書物のひとつ。大部分は七語の偈頌（仏の功德を讃える言葉）で構成され、このうち四行が記される。箱書に「圓光大師真筆 然譽寄附」とあり、大森寺三世然譽が寄進したことが分かる。また『張州雜志』には圓光大師真筆の「浄土要文」とある。当時から法然真筆の伝承を持つ寺宝として、大切にされていたことが分かる。

【般舟讃】

中国の高僧で浄土思想を確立した善導大師（613～681）の著作。阿弥陀仏の浄土を觀想し、浄土往生を願うための行法（修行の方法）を説く。「般舟讃」は天平20年（748）以前に日本に伝来したが、その後一般には流布せず、法然（1133～1212）没後の建保5年（1217）に仁和寺で発見された。そのため定説では、法然は善導の著作のうち「般舟讃」だけを見ることができなかったとされるが、仮に本品が真筆であるなら、法然が「般舟讃」を実見していた可能性が出てくる。

31 陶淵明「読山海経」画卷 延享3年（1746） 曇譽忍海（号・海雲）筆 大森寺所蔵

中国六朝時代（4～5世紀）の詩人である陶淵明が詠んだ漢詩「読山海経」を、江戸増上寺宝松院九世の曇譽忍海が筆写し、巻末に水墨で文人たちの姿を描いた巻物。山海経は古代中国の地理書で、陶淵明が愛読したことで知られる。描かれているのは田舎で隠遁生活を送る陶淵明が山海経の巻物を読んでいる情景で、表情豊かな人物が描かれる。本作品を描いた忍海は書画に秀でた画僧として知られており「嵯峨光仏縁起絵巻」（出品17）の筆者である。江戸における浄土宗大本山増上寺と大森寺のつながりが推測できる。

32 十二ヶ月花鳥図押絵貼屏風 江戸時代 18世紀後半 岩井正斎筆 六曲一双のうち一隻 大森寺所蔵

各時節の花鳥を描く図を貼り込む屏風。筆者岩井正斎（？～1801）は、木挽町狩野家九代養川院惟信の門人とされ、尾張藩八代藩主宗勝の第六子であった松平勝長（1737～1811、号・鳳山）に仕えた。名古屋城天守から見た景色を絵巻に描いたことでも知られる。本作品は、正斎最晩年の貴重な遺作で、洒脱さと写実性をあわせもつ。

33 耕作図 江戸時代 18世紀後半 岩井正斎筆 一幅 紙本墨画 大森寺所蔵

伝統的な漢画題である耕作図を描く。構図はおおむね狩野派の絵手本に倣っており、正斎が正統的な狩野派様式を学んでいたことを物語る。その一方で、おだやかな人物の表情に正斎らしさが認められる。落款は、「正斎」、「詔」「信」朱文連印。

34 瑞龍院殿位牌戸張・歓喜院殿位牌戸張 嘉永2年（1849） 大森寺所蔵

現在の大森寺本堂に安置されている瑞龍院殿（光友）と歓喜院殿（お尉）の位牌に付属する戸張（厨子に掛けて位牌を覆うための布）。瑞龍院殿の戸張は茶地に金欄、歓喜院殿の戸張は紅地に金欄で織られており、それぞれ葵紋が二つ縫い合わされている。戸張背面にある墨書きによると、十五世住職の恭譽が光友の百五十回忌にあたる嘉永2年に新調したことが

分かる。光友と歓喜院の位牌が代々に渡って大切にされてきたことがうかがえる。

35 瀬戸肩衝茶入 江戸時代 17世紀 大森寺所蔵

瀬戸焼の茶入。鉄釉が施され茶褐色に映えており、牙蓋（象牙製の蓋）が付属する美品である。無銘だが箱書に「拝領瀬戸茶入 信譽」とあるため、初代住職の信譽（延宝元年[1671没]）の時代に二代光友から寄進された品とみられる。色合いは名古屋城で焼成された御深井焼の茶入に似る。江戸前期の陶工森田久右衛門が延宝6年（1678）に尾張を訪れた際の記録に「尾張被仰付候焼物所ハ御城の内ニ有、茶入かま也」（森田久右衛門江戸日記）とあり、城内に茶入窯があったと分かる。よって当品も御深井焼である可能性がある。

36 葵紋葵葉形茶碗 江戸時代 18～19世紀 大森寺所蔵

瀬戸焼の碗。灰釉が施され、胴部には呉須で素朴な葵紋と数枚の葉が描かれている。口縁部は葵葉を模して成形されており、造形からみても尾張徳川家に関係する品であることがうかがえる。用途は向付もしくは抹茶茶碗であるとみられる。尾張藩医の家系で代々名古屋城下に薬屋を開いた小見山宗法による箱書と添状があり、二代光友から寄進を受けた陳元賛作陶の茶碗（茗碗）と鑑定している。箱の側面には異筆で「昭和七年寄進」とあるため、大森寺の手から一度離れたのち戻された品とみられる。

参考出品 1 銀製蓮華形舍利塔 大正12年（1923） 尾張徳川家十九代徳川義親寄進 大森寺所蔵

蓮華の蕾をかたどった、仏舍利を納めるための容器。現在、仏舍利はガラス製の別容器に入っている。附属の札には徳川義親が元々大森寺にあった什器を引き取り修理し、再度寄進した旨が記される。『張州雑誌』（作品25）に記載される「白銀鍍成蓮華形舍利塔」の可能性がある。

参考出品 2 文殊菩薩騎獅像 江戸時代 大森寺所蔵

歓喜院殿位牌の厨子に入っていた仏像。知恵の仏である文殊菩薩が獅子の上に坐した姿。歓喜院お尉の念持仏（携行して拝む仏像）と伝えられる。

参考出品 3 大日如来坐像（胎藏大日如来） 江戸時代 大森寺所蔵

歓喜院殿位牌の厨子に入っていた仏像。大日如来は真言密教の教主で、胎藏界曼荼羅の中心にあらわされる姿。歓喜院お尉の念持仏（携行して拝む仏像）と伝えられる。

参考出品 4 四方盆（金城盆） 昭和24年（1949） 長谷川甫斎作 名古屋城総合事務所蔵

名古屋城内にあった「清正松」が枯れた際、清正松を使用して製作された盆。



名古屋城 西の丸御蔵城宝館 特別展

西の丸御蔵城宝館

守山の御寺 大森寺の宝物

令和6年 3月2日(土)～5月7日(火)

尾張徳川家 ゆかりの名刹



山形 徳川氏墓所 江戸時代 17世紀後半

十二代尾張徳川家御蔵城宝館「古巻」
徳川氏家傳
江戸時代 寛文8年(1668)

尾張徳川家大森寺
江戸時代 寛保3年(1694)



大森寺本堂 令和5年(2023)11月撮影

名古屋城 西の丸御蔵城宝館

午前9時～午後4時30分(最終入館 午後4時) 会期中無休
入館無料

*名古屋城観覧料300円(名古屋市内在住65歳以上100円・中学生以下無料)が必要。

主催：名古屋城総合事務所 名古屋城観覧センター 特別協力：大森寺

[illegible]

西の丸御蔵城宝館特別展
「守山の御寺 大森寺の宝物」



出品目録

会期：令和6年3月2日（土）～5月7日（火）

新緑と紅葉の寺として知られる名古屋市守山区の浄土宗大森寺は、尾張藩二代藩主徳川光友の生母である
歓喜院（お尉、乾の方、寛永11年〔1634〕没）の菩提寺です。寛永14年（1637）に光友が母の菩提を弔う
ため江戸小石川の伝通院内に創建したのがはじまりで、寛文元年（1661）に歓喜院ゆかりの現在地に移転し
て以来、尾張徳川家の庇護を受け崇敬を集めてきました。現在も尾張徳川家ゆかりの品々をはじめとする数
多くの美術工芸品や歴史資料が寺宝として伝えられています。

本展覧会では、初公開の名品を含む大森寺の宝物を一挙に公開し、その歴史を紹介します。

名称	作者・筆者	員数	年代	備考・所蔵
第1章 大森寺の創建				
1 尾張名所図会	岡田文園他	1冊	天保11年(1840)/明治13年(1881)	名古屋城総合事務所
2 興旧山大森寺草創記	然誉義典	1幅	元禄7年(1694)	
3-1 黒印状目録覚		1枚	明治3年(1870)	
3-2 徳川光友黒印状	徳川光友	1枚	寛文11年(1671)	
3-3 徳川光友黒印状	徳川光友	1枚	元禄3年(1690)	
4 大森寺山絵図		1枚	江戸時代 18世紀前半	名古屋市蓬左文庫
5 信譽大龍上人号証文	玄譽萬無	1幅	延宝3年(1675)	
6 深誉吞益上人坐像		1躰	元禄7年(1694)	
7 阿弥陀如来立像	伝恵心僧都源信	1躰	平安末～鎌倉時代 12～13世紀	
第2章 大森寺の宝物 その1				
8 阿弥陀来迎図	伝恵心僧都源信	1幅	元禄4年(1691) 寄進	
9 蓮鷺図	徳川光友	1面	江戸時代 17世紀半ば	
10 竹雀図	徳川光友	1幅	江戸時代 17世紀後半	
11 山水図	徳川光友	1面	江戸時代 17世紀後半	
12 芦葉達磨図	伝徳川光友	1幅	江戸時代 17世紀後半	
13 御深井釉白象香炉		1合	江戸時代 18～19世紀	
14 御深井釉双葉葵文手水鉢		1口	江戸時代 18～19世紀	
15 御深井釉牡丹唐草文水甕		1口	江戸時代 18～19世紀	
16 阿弥陀如来坐像(伝嵯峨光仏)		1躰	室町～安土桃山時代 15～16世紀	
17 嵯峨光仏縁起絵巻	曇誉忍海(海雲)	1幅	江戸時代 18世紀前半	
第3章 歓喜院お尉と徳川光友				
18 袂草	朝岡宇朝	1冊	江戸時代 19世紀前半(昭和10年写本)	巻10・名古屋市蓬左文庫
19 昔咄	近松茂矩	1冊	江戸時代 18世紀前半	巻5・名古屋市蓬左文庫
20 尾張御行記 春日井郡御行記	樋口好古	1冊	江戸時代 19世紀前半	巻7・名古屋市蓬左文庫
21 黒漆塗七曜紋付乗物		1挺	江戸時代 19世紀	
22 徳川光友書状	徳川光友	1枚	元禄3年(1690)	
23 尾張藩年寄衆連署状	成瀬長則他	1枚	元禄3年(1690)	
24 徳川光友禁制	徳川光友	1枚	元禄5年(1692)	
25 張州雑志	内藤東甫	1冊	江戸時代 18世紀後半	巻93・名古屋市蓬左文庫蔵
26 仏頂尊勝陀羅尼	徳川光友	1幅	寛文11年(1671)	
第4章 大森寺の宝物 その2				
27 釈迦如来坐像		1躰	江戸時代 19世紀か	
28 普峯院京姫自筆和歌懐紙	普峯院京姫	1幅	江戸時代 17世紀後半	
29 徳川光友詠歌懐紙	竹屋光兼筆・徳川光友詠	1幅	享保8年(1723)	
30 伝圓光大師法然筆書跡	伝圓光大師法然	1幅	江戸時代 18世紀前半寄進	
31 陶淵明「読山海経」画巻	曇誉忍海(海雲)	1幅	延享3年(1746)	
32 十二ヶ月花鳥図押絵貼屏風	岩井正斎	6曲1双	江戸時代 18世紀後半	右隻:前期展示 左隻:後期展示
33 耕作図	岩井正斎	1幅	江戸時代 18世紀後半	
34 瑞龍院殿位牌戸張・歓喜院殿位牌戸張		2枚	嘉永2年(1849)	
35 瀬戸肩衝茶入		1口	江戸時代 17世紀	
36 葵紋付葵葉形茶碗		1口	江戸時代 18～19世紀	
参考1 銀製蓮華形舍利塔		1基	大正12年(1923) 寄進	
参考2 文殊菩薩騎獅像		1躰	江戸時代	
参考3 大日如来坐像(胎蔵大日如来)		1躰	江戸時代	
参考4 四方盆(金城盆)	長谷川甫斎	1枚	昭和24年(1949)	名古屋城総合事務所

※所蔵記載のない作品は大森寺の所蔵品です。出品番号は一部展示順と異なります。

2 西の丸御蔵城宝館 情報ルーム

(1) 本丸表二の門発掘調査速報展

会期 令和5年(2023)5月24日(水)～9月19日(火)

出品件数 5件

趣旨

会期中に実施していた表二の門発掘調査に合わせて、令和元年(2019)度・4年(2022)度の実施した発掘調査の成果をパネルや出土遺物の展示によって紹介した。

展示資料 すべて名古屋城調査研究センター蔵

1 軒丸瓦 江戸時代

2 軒棧瓦 江戸時代 18世紀 東海式

令和4年(2022)度調査で出土した軒棧瓦。現在表二の門に葺かれている瓦はすべて本瓦葺きのため、他所から搬入された可能性がある。表二の門発掘調査ではこうした多種多様な瓦が出土しており、過去の造成に伴って搬入されていると考えられる。

3 軒平(軒棧)瓦 江戸時代 18世紀以降 東海式

4 和釘 江戸時代

表二の門発掘調査の出土遺物の大半が瓦だが、令和4年(2022)度調査では和釘のような建物に伴う金属製品も出土している。

5 陶器 碗江戸時代 19世紀 萩焼

令和4年(2022)度の調査で萩焼とみられる優品が出土した。江戸時代の門付近には番所などがあるのみで生活空間とは離れているため、こちらも他所からの搬入品と考えられる。

展示風景



(2) 二之丸庭園発掘調査成果報告展

副名称 二之丸70th Anniversary～二之丸の屋根を彩った瓦～

会期 令和5年(2023)9月20日(水)～令和6年(2024)4月25日(木)

1期：9月20日(水)～11月6日(月)

2期：11月7日(火)～4月25日(木)

出品件数 11点

趣旨

名勝名古屋城二之丸庭園の名勝指定70周年を記念して展覧会を実施した。1期は近世の二之丸に葺かれていた施釉瓦の

概要を示し、2期は施釉瓦の製作技法の考察を行った。

江戸時代の緑釉瓦：灰や銅を原料とする釉薬をかけて、緑青色に発色させている瓦。釉の成分や焼き方によってそれぞれの瓦の色調がわずかに異なっている。同時期の陶器と同じ胎土を使用し、陶器と同じ窯で焼いていたと考えられる。丸瓦の内面には陶器のようにロクロを使用して成形した痕跡が確認できる。特に緑青色の瓦は尾張藩の江戸屋敷、名古屋城三之丸の「御屋形」などから多く確認されている。

展示資料

緑釉丸瓦 4点 江戸時代 名古屋市教育委員会蔵

緑釉平瓦 2点 江戸時代 名古屋市教育委員会蔵

緑釉軒丸瓦 4点 江戸時代 名古屋市教育委員会蔵

緑釉軒平瓦 1点 江戸時代 名古屋市教育委員会蔵

展示風景（1期）



（3）八雲木彫熊展示

会期 令和6年（2024）1月4日（木）～令和6年度継続（終了未定）

出品件数 2点

作品解説

木彫り熊と八雲町・尾張徳川家

尾張徳川家17代慶勝（1832～84）は、明治維新後に窮乏する旧藩士の救済のため、明治11年（1878）に北海道遊楽部の無償払い下げを受け、旧藩士たちを入植させて開拓を行わせた。「八雲」の名は、平和な理想郷を造ることを願い、素戔鳴尊の歌を引用して慶勝が命名した。過酷な環境の中、開拓は困難を極めたが、大正年間（1912～26）頃から国内でいち早く酪農を始め、生活が安定するようになった。

尾張徳川家19代義親（1886～1976）は、大正12年（1923）にスイスの木彫り熊を持ち帰り、八雲町での余業として同様の作品を作ること奨励する。各地の品評会で八雲町の木彫り熊が高い評価を受けたことで、昭和初期には北海道を代表する産業にまで発展した。

木彫り熊（親子熊の内、子熊） 引間木歩作 平成7年・9年（1995年・1997年） 名古屋城総合事務所蔵 北海道八雲町役場寄贈

八雲町より名古屋市へ寄贈された引間木歩（本名・二郎 1924～2012）作の木彫り熊である。平成7年（1995）と同9年（1997）にそれぞれ木彫り親子熊が、同8年（1996）に木彫り鯨が八雲町より寄贈された。いずれも引間木歩作である。平成7年（1995）寄贈の子熊は、引間が「カット彫り」と自ら命名した面彫りの熊である。同9年（1997）寄贈の熊は、名古屋城二之丸で立ち枯れた樹齢100年ほどのクロガネモチを用いて、名古屋市の依頼により制作された。

展示風景



（４）加賀孝一郎画油絵展示

会期 令和6年（2024）3月1日（金）～令和6年度継続（終了未定）

出品件数 1点

作品解説

梅雨晴れの名古屋城之写生 加賀孝一郎画 昭和19年（1944）6月 名古屋城総合事務所蔵 水野勲氏寄贈

名古屋城西側の堀越しに空襲で焼失する前の天守を描く。寄贈者の父が取得した油絵で、画面左下に作者のサイン、背面には作者による画題と制作年月の書き込みがある。

作者の加賀孝一郎は、明治32年（1899）、岐阜県海津町（現・海津市）の生まれ。名古屋市で鈴木不知に学んだあと上京し、岸田劉生に師事した。帰名後は文展への入選を果たし、春陽会会員となって作品発表を行った。名古屋市から犬山市に転居した翌年、昭和63年（1988）に89歳で死去。劉生に学んだ対象の存在に迫る写実的な表現を持ち味とし、この地域における洋画の写実表現を代表する作家のひとりである。国立国際美術館・愛知県美術館・名古屋市美術館などが作品を収蔵する。この作品は、作り込むことなく、戸外での写生を生かした表現となっている。

展示風景



3 特別公開

(1) 期間限定 特別公開 登録文化財 乃木倉庫

会期 令和5年(2023)11月29日(水)～12月10日(日)

展示担当 朝日美砂子

趣旨

登録文化財乃木倉庫(現在非公開)内を整備し、解説パネル等を設置し、期間限定で一般公開した。

テーマパネル(挿入写真は省略)

1 乃木倉庫によるこ

名古屋城の西北、ここ御深井丸の地にたたずむ、白い倉庫。乃木倉庫と呼ばれる、旧陸軍の弾薬庫です。創建年代や乃木倉庫という通称の根拠は不明でしたが、特殊な構造と希少性から、平成9年(1997)、国登録有形文化財になりました。近年の名古屋城調査研究センターの調査により、乃木倉庫は、明治13年(1880)に名古屋鎮台が造営した「予備弾薬庫」であったことが確認されました。明治24年(1891)の濃尾震災や二度にわたる所有者変更、第二次世界大戦末期の焼夷弾攻撃など、存亡の危機にたびたび襲われながら、乗り越えてきたことも明らかになりました。この小さな倉庫が背負ってきた、名古屋城近代史の象徴ともいべき数奇な歴史を、ここに紹介いたします。

2 乃木倉庫の創建

御深井丸は、名古屋城の西北を守る曲輪で、西北隅櫓と土蔵や穴蔵に、大量の鉄砲(火縄銃)や弾薬が保管されてきた。明治維新後、名古屋城は尾張徳川家の手を離れ、陸軍の所管となった。陸軍(当時は名古屋鎮台)は、旧尾張藩の櫓と蔵を武器庫として用いる一方、明治11年(1878)末、御深井丸の中央に「予備弾薬庫」を建てることを決定する。コレラの流行やレンガ造りという当時最新の工法を採用したことにより工事は遅れたが、明治13年(1880)10月、「予備弾薬庫」は無事完成した。建設の経緯は、「壺大日記」等の名古屋鎮台の日誌類から詳しく知ることができる。最終的に工事を担当したのは、当時名古屋鎮台工兵方面工役長であった基太村不二。基太村不二は、鹿児島生まれの士族で、名古屋鎮台に配され、乃木倉庫はじめ名古屋近辺の陸軍工事を監督した。彼の肖像写真が、幸いにも宮内庁に伝えられている。

3 乃木倉庫の構造

乃木倉庫の壁は、レンガを2丁半、約60cmの厚さに積み上げたレンガ構造で、その上から内外ともに漆喰を塗り白く仕上げている(外壁は戦後に改修)。入口扉と窓はアーチ状の両開き式で、木製板戸に銅板を貼っている。基礎には伊豆の凝灰岩と三河の花崗岩を敷いた上にレンガでヴォールトを組み、その上に大引と根太を置き、さらに床板を二層に敷いている。弾薬という、火気と湿気を嫌う重量物を納めるための工夫と考えられる。屋根は、洋風のトラス構造で支え、野地板を並べ漆喰を塗った上に棧瓦を葺いており、やはり和洋折衷の仕様となっている。基礎や壁の構造を詳細に描き淡彩を施した図面が、宮内省の建築技師であった木子清敬の所蔵資料の中に現存している(現東京都立中央図書館蔵・木子文庫)。通常の設計図とは異なる絵画風の表現から、名古屋鎮台内部で作成された図面と考えられる。木子は、明治24年(1891)10月の濃尾震災直後、陸軍に依頼され被災状況調査と修理方法検討のため名古屋城を訪れており、そうした折に陸軍から入手したものと思われる。

4 名古屋離宮期の乃木倉庫

濃尾震災後の明治26年(1893)、名古屋城の本丸は、陸軍省から宮内省へ移管され「名古屋離宮」となった。御深井丸は、明治42年(1909)、宮内省に編入され、第三師団が御深井丸内に建てていた武器庫・弾薬庫の大半が破却され更地とされた。しかし予備弾薬庫は、その特殊かつ強固な構造から破却をまぬがれ、第一倉庫という名称のもと宮内省により管理された。大正4年(1915)に京都御所で大正天皇の即位式が行われた際、名古屋城本丸御殿は天皇の御宿泊所となり、御深井丸には宮中三殿の一で神器を祀る賢所の行殿が造営された。そのため御深井丸は大整備されたが、第一倉庫は壊されず、仮賢所はその脇に造営された。昭和3年(1928)の昭和天皇大礼時も御深井丸に仮賢所が置かれたが、第一倉庫はやはりそのまま残された。当時の図面から、仮賢所の西にたたずむ乃木倉庫が確認できる。

5 乃木倉庫と震災・空襲

明治24年（1890）10月28日、根尾谷を震源地として発生した濃尾震災は、岐阜・愛知に甚大な被害を及ぼした。震災直後に被害調査のため来名したイギリス人建築家ジョサイア・コンドル（1852～1920）は、名古屋城も訪れ、建物を見分した。乃木倉庫については、「煉瓦造の外観に漆喰塗で建設されていたが、全く無傷で、小さなヒビ一つなかった」と特筆している。昭和20年（1945）5月14日の焼夷弾攻撃により、指呼の距離にある天守と本丸御殿は全焼したが、本丸御殿の障壁画が運びこまれていた乃木倉庫は、類焼を免れた。陸軍設計・施工の乃木倉庫は、かくも頑健であった。

参考文献 平山育男「乃木倉庫の建築年代について」J・コンドルによる濃尾地震調査の研究（19）『日本建築学会北陸支部研究報告集』日本建築学会北陸支部研究委員会編60号 2017年

6 名古屋市下賜と名古屋空襲

御召列車で東京駅を早朝出発すると、夕方名古屋駅に着く。この利便性により、明治・大正・昭和の天皇・皇后はしばしば名古屋離宮に宿泊された。しかし、交通の発達もあって、昭和5年（1930）、名古屋離宮は名古屋市に下賜され、同時に天守・本丸御殿などが国宝に指定された。昭和6年（1931）2月11日、市民への天守公開が始まった。拝観者に渡された名古屋城の略図に、第一倉庫が「乃木倉庫」という名称で表示されている。この時はじめて、明治天皇に殉死した陸軍大将乃木希典の名がこの倉庫に冠されたと考えられる。昭和20年（1945）春、第二次世界大戦の戦局悪化を受け国宝本丸御殿の襖絵類がとりはずされ乃木倉庫に運びこまれた。搬入直後の5月14日、空襲により本丸御殿は全焼したが、乃木倉庫に搬入された襖絵は焼けなかった。それら空襲を免れた本丸御殿障壁画1047面は、重要文化財に指定され、西の丸御蔵城宝館の専用収蔵庫で大切に保管されている。

小パネル（抜粋。挿入写真は省略）

1 のぞいてみよう 乃木倉庫の床の下

乃木倉庫の床面は、地表から1メートル以上高い。厚い床板の下には、レンガがアーチ状に組まれ、その下に基礎がある。アーチで床を支えるとともに床下の空間により湿気を防ぐ、特殊な構造である。

2 屋根の漆喰

今年（令和5年）、破損していた屋根瓦を取り換え、外壁の一部を塗り直す修理を行った。瓦を外すと、漆喰が段状に塗られており、木子文庫の図面と一致した。よってこの漆喰は、明治13年（1880）のものだと確定できる。

3 屋根瓦

今年度の修理の際取り換えられた屋根瓦。「尾州瓦屋庄八」・「三州〇七樅山製」・「竹四郎」などの刻印がある。乃木倉庫は、弾薬庫として用いられていた明治時代、陸軍により頻繁に修理されており、各瓦の制作時期は特定できない。

4 雨樋

銅製の雨樋。現在縦樋の一部は取り換えられている。

5 卓子

頑健な作りの卓子（テーブル）二脚。昭和5年（1930）に名古屋離宮が宮内省から名古屋市に下賜された時、離宮内で使用されていた大量の家具や食器、文房具がそのまま下賜された。この机も下賜品の可能性が残る。

6 入口

入口扉は、厚い板に銅板を貼った、アーチ状の両開き戸。内側には吊戸（片引き戸）を取り付けた痕跡があり、二重構造となっている。

7 窓

窓は、アーチ状の両開き戸と片開きの網戸からなる二重窓である。両開き戸には、入口と同様、厚い銅板を貼っている。

8 レンガ

令和5年(2023)度の修理時、外壁の上塗りの下からレンガがあらわれた。高さ50mm、幅220mm、奥行100mmで、現在のJIS規格(60×210×100)にくらべやや細長い。生産者の刻印を確かめることは現時点ではできないが、明治13年(1880)にレンガを焼成していた工場は限られており、今後の調査に期待できる。

9 乃木倉庫と木子文庫

東京都立中央図書館の特殊文庫である木子文庫に納められた乃木倉庫の図面は、13枚にのぼる。東西方向二列に積まれた床下のレンガの図面もある。明治初期の洋風建築のまとまった図面として貴重である。

10 宮内庁宮内公文書館蔵「名古屋離宮付属建物平面図」写真 大正8年(1919)

大正の大礼を無事終えた宮内省は、各離宮の実測図を作成した。名古屋離宮についても、各建物の平面図などが作成され、今も宮内庁で保管されている。左下の「第一倉庫」が乃木倉庫の平面図。半円形の階段が特徴的である。

11 宮内庁宮内公文書館蔵 名古屋城古写真 撮影年次不明 堀真澄撮影

天守から撮影された御深井丸。右端の白い建物が乃木倉庫。その奥に西北隅櫓が見える。御深井丸が整備された大正4年以降の撮影かと考えられるが、検討を要する。

12 宮内庁宮内公文書館蔵 仮賢所の古写真 昭和3年(1928)撮影

昭和3年の昭和天皇即位式の時、御深井丸に建てられた仮賢所の写真。左端の木立の奥に、乃木倉庫の白壁が写っている。

13 名古屋城総合事務所蔵 乃木倉庫のガラス乾板写真 昭和15～16年(1940～1941)頃撮影

空襲で被災する前に撮影された乃木倉庫。正面(南側)に棧瓦葺の庇が突き出し、半円形の階段が石積されている。庇と階段は現在撤去されており、廂部分の基礎石が階段に転用されている。庇のむかって左側に、「乃木倉庫」と墨書された立看板がある。

14 名古屋城総合事務所蔵 本丸東一之門升形のガラス乾板写真 昭和15～16年(1940～1941)頃撮影

乃木倉庫のガラス乾板写真と同時期に撮影された本丸東一之門枡形の写真。「清正石」と大書した、同じような看板が写っている。加藤清正は東門升形石垣を積んでおらず、清正石の名は史実ではない。昭和6年(1931)の一般公開開始前後、国威掲揚の風潮にあわせ清正の人気は高まっており、乃木倉庫とあわせ名古屋城内の見所として、名古屋城管理事務所に愛称を付けたのであろう。

15 陸軍撮影の空中写真 部分 撮影年不明 国土地理院提供

昭和初年頃、陸軍が撮影した空中写真。天守や本丸御殿が写っている。御深井丸には、乃木倉庫と西北隅櫓が見える。

16 米軍撮影の空中写真 部分 1949年11月16日撮影 国土地理院提供

戦後、米軍が高度2438mから撮影した写真。鮮明な画像にまず驚かされる。昭和20年(1945)5月14日の空襲により、天守と本丸御殿は焼失し、石垣のみが残されている。左上の乃木倉庫は、無事である。本丸御殿の襖絵は、ここに運び込まれ、戦災焼失を免れたのである。

期間限定 特別公開

とう ろく ぶん か ざい の き
登録文化財 乃木

そう こ
倉庫

令和5年(2023) 11月29日(水)~12月10日(日)

- ◆貴重な登録文化財です。飲食はご遠慮ください。
- ◆壁や扉、展示品に触れないでください。
- ◆床を傷つけないよう、お気をつけください。
- ◆撮影はできますが、他のお客様のご迷惑にならないよう、ご配慮ください。



IV 教育普及事業

1 刊行物

(1) 名古屋城調査研究センター研究紀要 第5号

概要

名古屋城調査研究における研究成果を公開するため、『名古屋城調査研究センター研究紀要 第5号』を刊行した(A4 176頁 令和6年(2024)3月31日発行)。

目次

〈資料紹介〉守山の御寺 大森寺所蔵の岩井正斎作品について	朝日美砂子
〈研究ノート〉尾張藩下級藩士の旅行	種田祐司
慶長期成立の名古屋城「四つ之御矢倉・二つ之御門・唐門」	今和泉大
町づくり・城づくり、携わる人々 ―続々名古屋城築城考―	服部英雄
〈資料紹介〉「堀川通絵図」	服部英雄、堀内亮介
「山下家覚書」から読み解く浅野家相続問題	原史彦
名古屋城大天守台西側の石列を巡って	村木誠
〈資料紹介〉二之丸庭園余芳出土の漆喰片	花木ゆき乃
長久手猪鼻堰跡残石群測量調査報告	大村陸、川出康博、木村有作、田口一男、 二橋慶太郎、高橋圭也、服部英雄
名古屋城跡石垣における大名丁場間の矢穴形状比較 ―矢穴縦断面形状を中心に―	二橋慶太郎

(2) 名古屋城調査研究センターだより 第5号

概要

名古屋城調査研究センターの活動を広く市民に周知するためのリーフレットとして、『名古屋城調査研究センターだより 第5号』を刊行した(A4 4頁 令和6年[2024]3月発行)。

目次

「名古屋城学」をめざす名古屋城調査研究センターの5年―	服部英雄
国登録有形文化財 乃木倉庫へようこそ	朝日美砂子
〈美術工芸資料担当より〉石黒鏘二の清正像	角田美奈子

(3) 特別展「家康とお嫁様 名古屋城と春姫お輿入れ」リーフレット

A4 オールカラー 8頁 執筆 朝日美砂子 令和5年(2023)3月17日発行

(4) 特別展「家康と名古屋東照宮」リーフレット

A4 オールカラー 8頁 執筆 朝日美砂子・今和泉大 令和5年(2023)10月16日発行

(5) 特別展「守山の御寺 大森寺の宝物」リーフレット

A4 オールカラー 8頁 執筆 堀内亮介・朝日美砂子 令和6年(2024)3月1日発行

(6) 国秘録 御巡覧留続編 [名古屋城調査研究報告8・名古屋城史料叢書2]

概要

名古屋城調査研究センターにおける文献調査の成果報告および名古屋城の歴史的な調査研究の一助とするため、名古屋城史料叢書を刊行した。今年度は、昨年度刊行した名古屋城本丸の巡覧記録である「国秘録 御巡覧留」に引き続き、徳川林政史研究所所蔵「国秘録 御巡覧留続篇」を翻刻して掲載した(令和6年(2024)3月発行)。

(7) 名勝名古屋城二之丸庭園発掘調査報告書第7次・第8次〔名古屋城調査研究報告9・埋蔵文化財調査報告書6〕

概要

調査は令和3年(2021)～令和4年(2022)に行い、名古屋城二之丸の中の名勝指定範囲外及び特別史跡未告示地区で実施した。資料調査は令和元年(2019)～令和2年(2020)に行った。

発掘調査の結果、近世における庭園の範囲を推測することができた。また、築山の一部が近代に土塁として再利用されていること、南池の護岸にタタキが使用されていることが明らかになった(令和6年(2024)3月発行)。

(8) 特別史跡名古屋城跡御深井丸・小守西側発掘調査報告書〔名古屋城調査研究報告10・埋蔵文化財調査報告書7〕

概要

令和2年(2020)度実施した御深井丸、小守西側での発掘調査の成果を報告した(令和6年(2024)3月31日発行)。調査では、御深井丸に24カ所、小守西側に1カ所のトレンチを設定し、掘削を行った。

掘削の結果、御深井丸B区では水路の側壁とみられる石列を検出したほか、御深井丸G区では太平洋戦争時に小守等から焼け落ちた焼損金具が多数出土し、中には六葉釘隠し等の装飾金具が含まれていた。

(9) 特別史跡名古屋城跡西之丸き損地点発掘調査・修復報告書

概要

令和2年(2020)3月に西之丸にてき損した六番御蔵(米蔵)の基礎石列の復旧のために実施した発掘調査及び修復作業について報告した(A4 108頁[本文のみ] 令和6年(2024)3月31日発行)。

報告書では、原位置を離れた石材の位置を特定・推定した過程及び結果を示すとともに、き損した礎石・地覆石及び出土遺物について掲載した。

(10) 名古屋城調査研究センター年報4 令和4年度

概要

令和4年度の名古屋城調査研究センターの活動実績を示す年報を刊行した(令和6年(2024)3月発行)。

2 シンポジウム

(1) 名古屋城石垣をつくる・なおす

日時 令和6年(2024)2月3日(土) 午後1時～午後4時30分

場所 KKRホテル名古屋 3階蘭の間

参加人数 100人(動画配信1,463回視聴)

概要

名古屋城調査研究センター学芸員の大村陸による趣旨説明の後、名古屋城石垣の悉皆調査を実施された濱田晋一氏に基調講演をしていただいた。続いて、これまでに名古屋城調査研究センターで実施してきた石垣に対する調査研究成果の報告を行い、最後にパネルディスカッションを行った。名古屋城調査研究センターからは服部英雄、村木誠、二橋慶太郎が登壇し、意見交換を行った。

また、シンポジウム当日の様子を動画撮影し、後日編集したものをYouTubeにて期間限定で公開した(令和6年[2024]3月6日～3月31日)。

プログラム・登壇者

【基調講演】

「名古屋城石垣の石積技術とその変遷」 濱田晋一(名古屋工業大学大学院准教授)

【事例紹介】

「① 名古屋城石垣の考古学による調査成果」 二橋慶太郎(名古屋城調査研究センター学芸員)

「② 名古屋城石垣に関する総合的な調査成果」 服部英雄(名古屋城調査研究センター所長)

【パネルディスカッション】

司会：村木誠（名古屋城調査研究センター副所長）

パネリスト：濱田晋一、二橋慶太郎、服部英雄



基調講演の様子



パネルディスカッションの様子

3 現地説明会

発掘調査の成果（遺構・遺物）を市民の皆様にご覧いただき説明会を開催した。なお、現地説明会の資料は名古屋城調査研究センターホームページ（<https://www.nagoyajo.city.nagoya.jp/center/>）にて公開している。

（1）本丸表二の門発掘調査現地説明会

日時 令和5（2023）年9月16（土） 午前10時～午後12時

参加人数 350人

概要

全体説明の後、東側土塁調査区・西側土塁調査区を導線に沿って見学していただいた。調査区内には遺構を解説するパネルや雁木を再現した展示物を設置した。また、各調査区に学芸員を配置し、参加者へ遺構の説明等を行った。



遺構解説展示（西より）



全体説明の様子（南より）

4 講師派遣

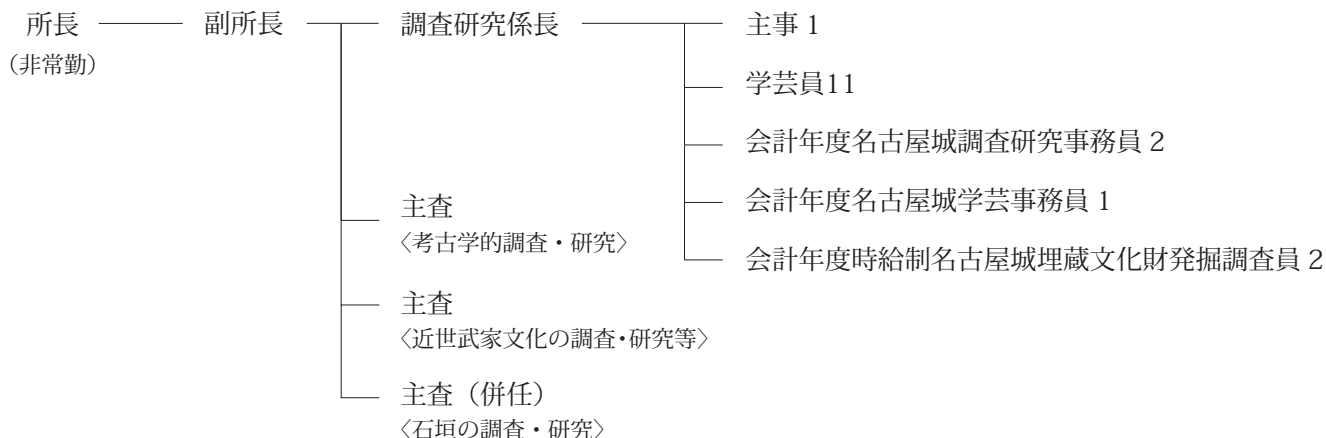
年月日	題目	主催者	講師
令和5年5月23日（火）	名古屋城に関する卓話	名古屋城北ロータリークラブ	堀内亮介
令和5年5月26日（金）	名古屋城の構造	海部南部危険物安全協会	原史彦
令和5年6月17日（土）	名古屋城と観光	中央大学	朝日美砂子
令和5年6月29日（木）	新しい時代に生きる女性	名古屋市港生涯学習センター	原史彦
令和5年8月24日（木）	名古屋城の魅力	愛知県町村教育長協議会	原史彦
令和5年9月7日（木）	熱田浜御殿の歴史	名古屋瑞穂ロータリークラブ	原史彦
令和5年9月16日（土）	古写真で見る名古屋城	やっとかめ文化祭実行委員会	原史彦
令和5年10月25日（水）	名古屋の城下町・碁盤割の変遷	名古屋市教育委員会事務局	堀内亮介
令和5年10月25日（水）	名古屋城の魅力	東区地域女性団体連絡協議会	原史彦
令和5年10月27日（金）	歴史講演会「尾張徳川家初代義直公と春姫」	特定非営利活動法人 本丸ネットワーク	原史彦
令和5年11月2日（木）	徳川家康と名古屋城	一般社団法人 日本クレーン協会東海支部	原史彦
令和5年11月15日（水）	尾張藩誕生の周辺	臨済宗妙心寺派 永泉寺	原史彦
令和5年11月18日（土）	名古屋城二之丸の考古学散歩	やっとかめ文化祭実行委員会	花木ゆき乃
令和5年11月23日（木・祝）	名古屋城の城づくり、まちづくり	愛知県埋蔵文化財センター	服部英雄

※当センター職員を職務の一環として派遣したもののみ掲載（名古屋城総合事務所[名古屋城調査研究センター含む]が主催又は主催として含むものを除く。）。

V 組織と職員

[令和6年(2024)3月31日現在]

1 組織



2 職員

所長(非常勤)	服部 英雄(～6.3.31)
副所長	村木 誠(～6.3.31)
主査<考古学的調査・研究>	酒井 将史
主査<近世武家文化の調査・研究等>	原 史彦
主査<石垣の調査・研究>	瀬瀬 茂(～6.3.31)
調査研究係長	三矢 知徳(5.4.1～)
主事	駒田 智子(～6.3.31)
学芸員	朝日 美砂子
	角田 美奈子
	西本 茉由
	花木 ゆき乃(～6.3.31)
	堀内 亮介
	今和泉 大
	二橋 慶太郎
	濱崎 健
	高橋 圭也
	大村 陸
	村上 慶介
会計年度名古屋城調査研究事務員	種田 祐司
	大西 健吾
会計年度名古屋城学芸事務員	小川 春子(5.5.1～)
会計年度時給制名古屋城埋蔵文化財発掘調査員	郷 由佳
	森 朋子

VI 参考資料

1 令和5年度の名古屋城の活動

(1) 催事等

会期	事項
令和5年(2023)3月18日(土)～6月18日(日)	西の丸御蔵城宝館特別展 「家康とお嫁様 名古屋城と春姫お輿入れ」
令和5年(2023)6月26日(月)～9月3日(日)	西の丸御蔵城宝館企画展「尾張ゆかりの甲冑・刀剣」
令和5年(2023)8月5日(土)～8月15日(火)	名古屋城夏まつり
令和5年(2023)8月5日(土)～8月13日(日)	重要文化財「西南隅櫓」特別公開
令和5年(2023)9月9日(土)～10月9日(月・祝)	西の丸御蔵城宝館企画展「文化財を受け継ぐ」
令和5年(2023)10月7日(土)～11月23日(木・祝)	名古屋城秋まつり
令和5年(2023)10月29日(日)～11月23日(木・祝)	第76回 名古屋城菊花大会
令和5年(2023)10月28日(土)～11月5日(日)	重要文化財「西南隅櫓」特別公開
令和5年(2023)11月19日(日)～11月23日(木・祝)	茶席特別公開
令和5年(2023)10月17日(火)～12月17日(日)	西の丸御蔵城宝館特別展「家康と名古屋東照宮」
令和6年(2024)1月1日(月・祝)～1月8日(月・祝)	名古屋城冬まつり
令和5年(2023)12月23日(土)～ 令和6年(2024)2月25日(日)	西の丸御蔵城宝館企画展 「家康の謎 名古屋城本丸御殿の黒木書院」
令和6年(2024)1月2日(火)～1月8日(月・祝)	重要文化財「西南隅櫓」特別公開
令和6年(2024)3月2日(土)～3月11日(月)	第50回名古屋城つばき展
令和6年(2024)3月2日(土)～5月7日(火)	西の丸御蔵城宝館特別展「守山の御寺 大森寺の宝物」
令和6年(2024)3月20日(水・祝)～5月6日(月)	名古屋城春まつり
令和6年(2024)3月23日(土)～3月31日(日)	重要文化財「西南隅櫓」特別公開

(2) 特別史跡名古屋城跡全体整備検討会議

年	月日	会議名称※
令和5年(2023)	5月16日(火)	第34回 庭園部会
	5月28日(日)	第56回 石垣・埋蔵文化財部会
	6月5日(月)	第5回 バリアフリー検討会議
	6月12日(月)	第56回 全体整備検討会議
	9月19日(火)	第33回 建造物部会
	10月23日(月)	第57回 全体整備検討会議
	11月6日(月)	第57回 石垣・埋蔵文化財部会
	12月6日(水)	第35回 庭園部会
	12月22日(金)	第58回 全体整備検討会議
令和6年(2024)	1月16日(火)	第58回 石垣・埋蔵文化財部会
	2月26日(月)	第36回 庭園部会
	3月4日(月)	第59回 石垣・埋蔵文化財部会
	3月4日(月)	第34回 建造物部会
	3月22日(金)	第59回 全体整備検討会議

※各部会の正式名称には部会名称の前に「特別史跡名古屋城跡全体整備検討会議」が付されるが、煩雑になるため省略した。
同様に全体整備検討会議についても「特別史跡名古屋城跡」を省略した。

2 入場者の推移

(1) 名古屋城入場者数

月	令和2年度※ ¹	令和3年度※ ²	令和4年度	令和5年度
4	10,775 (0)	65,849 (31,621) 〈 5,049〉	124,209 (45,277) 〈19,695〉	191,923 (81,472) 〈41,749〉
5	199 (0)	31,777 (17,300) 〈6,528〉	130,851 (54,740) 〈27,823〉	187,188 (77,107) 〈35,572〉
6	21,208 (13,732)	14,819 (11,279)	67,029 (40,167) 〈11,904〉	115,079 (65,038) 〈23,792〉
7	30,302 (26,228)	41,449 (23,658)	72,716 (46,167) 〈14,897〉	131,591 (68,885) 〈27,961〉
8	25,423 (23,228)	58,529 (24,076)	154,226 (68,146) 〈31,222〉	207,415 (81,039) 〈35,450〉
9	46,333 (30,065)	27,122 (16,402)	92,460 (52,515) 〈23,184〉	144,269 (75,179) 〈29,436〉
10	55,784 (44,090)	56,547 (32,998)	142,262 (72,507) 〈28,277〉	198,262 (88,282) 〈35,379〉
11	90,109 (61,874)	105,035 (42,274) 〈30,610〉	154,783 (71,037) 〈30,610〉	194,262 (101,220) 〈40,069〉
12	31,957 (29,173)	65,340 (36,713) 〈14,265〉	103,327 (55,320) 〈18,735〉	141,410 (82,284) 〈22,504〉
1	20,559 (17,183)	59,678 (30,475) 〈17,230〉	120,645 (63,773) 〈22,329〉	150,613 (86,887) 〈20,960〉
2	25,942 (16,597)	37,470 (22,138) 〈10,382〉	113,811 (61,622) 〈21,663〉	155,477 (83,611) 〈20,552〉
3	164,893 (53,250)	123,690 (50,791) 〈23,409〉	252,968 (95,185) 〈31,121〉	241,698 (109,229) 〈27,149〉
計	523,484 (315,420)	687,305 (339,725) 〈107,473〉	1,529,287 (727,556) 〈285,602〉	2,059,707 (1,000,233) 〈360,573〉

() 内は本丸御殿の入場者数。〈 〉 内は西の丸御蔵城宝館の入館者数。

※1 令和2年4月10日から同年5月31日までの間、名古屋城開園休止。

※2 令和3年4月16日から同年6月20日までの間、土日のみ名古屋城開園休止。令和3年4月16日から5月9日までの間、プレオープン。令和3年11月1日開館。

名古屋城調査研究センター年報 5
令和5年度
2025年3月

発行 名古屋市観光文化交流局
名古屋城総合事務所
名古屋城調査研究センター
〒460-0031 名古屋市中区本丸1番1号
TEL (052) 231-2481